

季刊・令和5年7月15日発行・第59巻第3号（通巻499号）

ISSN 0014-9586

Feed Trade

WEB版

VOL. 59 NO. 3



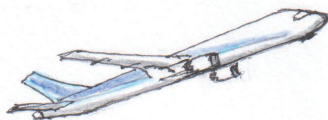
2023

7~9

飼料輸出入協議会

JAPAN FEED TRADE ASSOCIATION

2023年 7～9月号



目 次

<海運セミナー>

ドライバルク市況動向…… (2)

講師：角谷 悟 氏

国際海運における脱炭素の取り組み／安井 央 …… (24)

秋季為替セミナー開催のお知らせ…… (35)

理事長新任あいさつ／永田 義典…… (36)

令和5年度新役員、専門委員会の委員決まる…… (38)

シリーズ●わが社「自慢の逸品」——第36回

Empyreal 75[®]／カーギルジャパン合同会社…… (40)

シリーズ●各地の食生活——第14回

オーストラリア（ブリスベン）の食生活／吉田 俊介…… (44)

シリーズ●各商社の担当者紹介⑪ 双日株式会社

我が社の食料原料課担当者のご紹介…… (51)

●わが社飼料関連部署の新人紹介

三井物産(株)、豊田通商(株)、三菱商事(株)、兼松(株)、丸紅(株)、双日(株)、
伊藤忠商事(株)…… (56)

<座談会>

米国産トウモロコシの需給とシカゴ相場動向…… (68)

出席者：山口 大河、高橋 千明、小林 宗祐、日野 翔太、
高桑 慶太、後藤 佑理、片岡 寿平、〔司会〕川田祐一郎

●New Balance<14>

足早に豊作期待から高温乾燥懸念に転換した新穀の生産見通し／
岩崎 正典…… (103)

編集後記…… (123)

ドライバルク市況動向



<講師>

日本郵船(株)バルク・エネルギー事業統括グループ
調査役

かく や さとる
角 谷 悟氏

●日時 令和 5 年 6 月19日 ●場所 新橋ビジネスフォーラム

日本郵船の角谷と申します。本日はよろしくお願いいたします。

今日のプレゼンは、最初に市況チャートで過去を振り返った後、一般的な荷動きの解説，続いて AIS（船舶位置情報）から得られるデータを用いて市況構造を読み解き，最後に長期的な見通しを説明します。

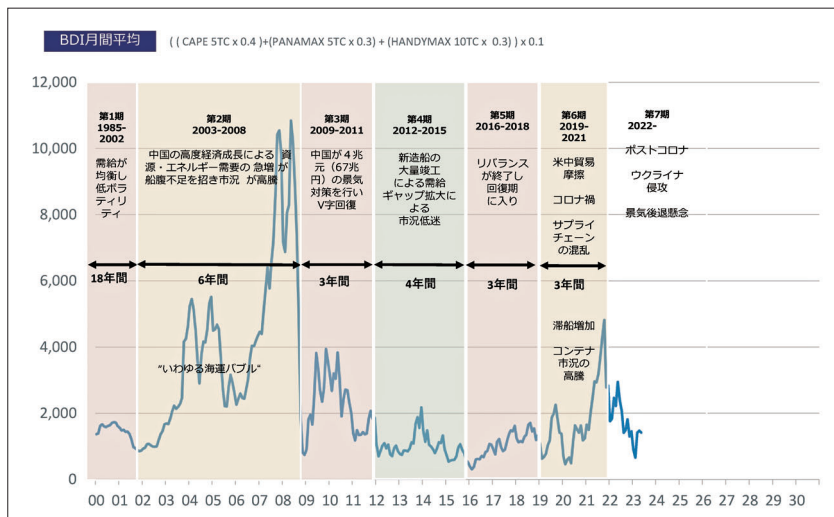
1. チャートで振り返る

資料 1（編注：スライド，以下同）のグラフは，縦軸がBDI（Baltic Dry Index）横軸が2000年からの月平均値を表し，時代背景を第 1 期から第 7 期に分類しました。荷動きと船腹量がバランスしていた第 1 期は市況も安定していました。

中国のWTO加盟後からバブルの兆しが見えてきます。中国の需要が大きく伸びるなか，船腹の供給が追いつけず需給バランスが大きく崩れ海運バブルが起りましたが，2008年のリーマン・ショックとともに終焉しました。

同時並行で，中国で造船所の新設ラッシュ起り，2008年頃から新造船の竣工が始まりつまり，最悪のタイミングでリーマン・ショックが起きて，需

資料1 ドライバルク市況の歴史認識（出所：Baltic Exchange as of 14 June）



要が後退するなか、船腹の供給が増加しました。中国が財政出動し需要喚起すると、市況は（一時的に）リバウンドしました。

しかし、この官製需要の効果は長く続きませんでした。需要より船の供給が上回った結果、需給バランスが崩れ市況は低迷しました。2012年から4年間で需給バランスを整え2016年に大底を打った後、ようやく回復期を迎えました。

ところが、2019年に米中貿易摩擦、続いてコロナ禍が始まりました。コロナ禍の当初は「需要が後退し市況の低迷は避けられない」と思いましたが、蓋を開けてみれば、サプライチェーンの混乱（＝滞船増加）が強い追い風となりました。当初は弱い材料と見做したコロナ禍が変貌し市況がスパイクしました。

そして今はというと去年から巻き戻しに入っていると見ています。サプライチェーンの混乱が沈静化するなか、中国の景気不安が燃り始め、市況は調整局面にありますが。そろそろ終盤戦を迎え、来年から新しい時代に入るかもしれないという、話をこれからさせていただきます。

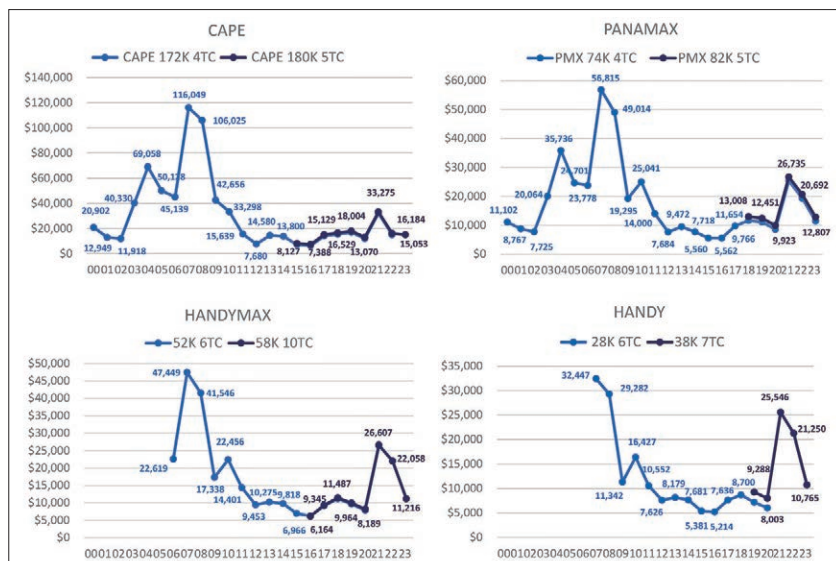


セミナー会場風景

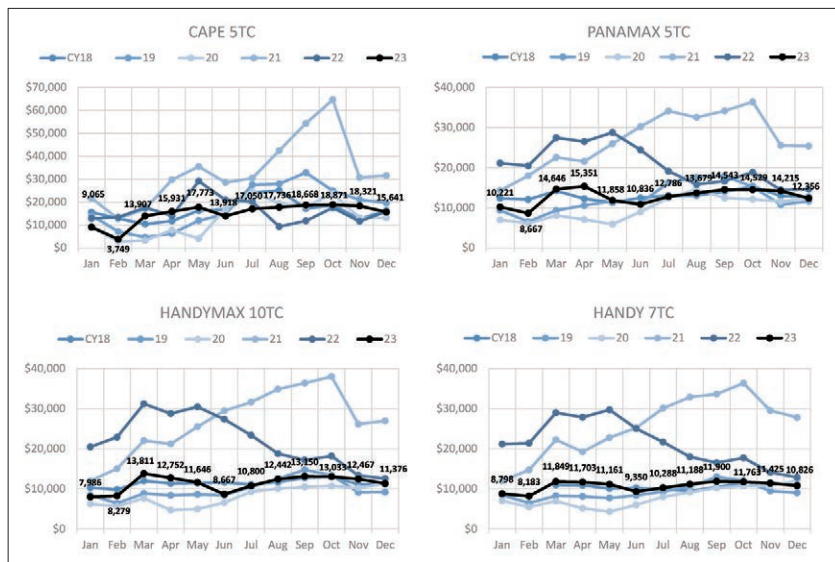
資料 2 は、平均航路の年間平均を表したグラフです。

資料 3 は、横軸を月次にしたグラフです。これを見ると市況は荷動きの季節性に合わせて動く傾向が見えます。穀物はもちろん、鉄鉱石でさえ 1 - 4

資料 2 年間平均（出所：Baltic Exchange as of 14 June）



資料3 月間平均+FFA（出所：Baltic Exchange as of 14 June）



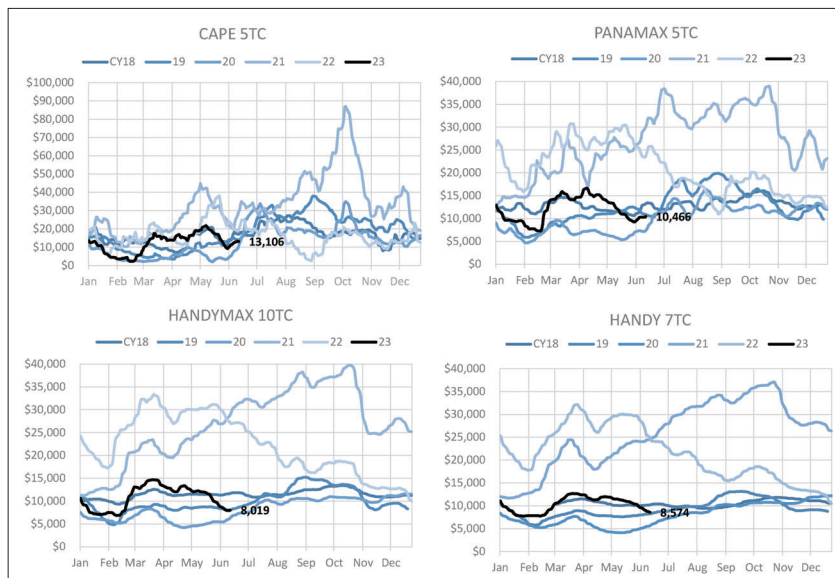
月は（鉄鉱石の輸出国の）ブラジル北部を中心に雨期に入り、鉄鉱石の出荷は減少します。これがちょうど中国の旧正月と重なります。雨期が終わる4月頃から荷動きが増え秋口にピークを迎えます。（CAPEの）市況はこれに歩調を合わせるパフォーマンスを見せます。

資料4は、日足（デイリー）の市況グラフです。

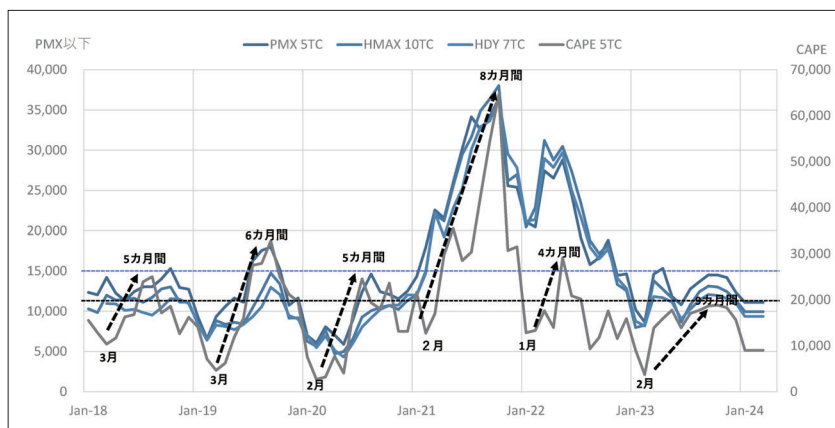
足元の市況動向は、「底を打ったかな?」「上がり始めたかな?」という位置にいます。季節的な荷動きとして半期末に向かって鉄鉱石サプライヤーの追い込み出荷が船腹需給を引き締めています（これも季節性の一つです）。ただ、新聞などを読むと、「中国の景気見通しが良くない」という記事が多くなり、マクロでは、中国の先行き懸念が健在のまま、6月はミクロ（荷動きと船腹需給）が勝ったが、マクロから来る重石が外れていないため、先物価格（FFA）が物足らない水準にあります。

さて、グラフを変えて、資料5は2018年から足元まで、左軸がPANAMAX以下、右軸はCAPEと軸を分けています。月間平均にすると、4船型市況は

資料4 日足（出所：Baltic Exchange as of 14 June）



資料5 月間平均+FFA（出所：Baltic Exchange as of 14 June）



概ね同じ波に乗っている，ということを確認するために分けました。とりわけPANAMAX以下の3船型は若干時差がありますが連動性は強い。さらに，コロナ禍の時期を除いて，「CAPEには2万ドル，PANAMAXには1万5,000

ドルくらいに天井感が見える」ということです。これを超えると、ピークアウトします。平時ならば（コロナ禍のような戦時でなければ）この天井感は意識しておきたい。また、マーケットはサイクルで動くことも忘れてはいけません。負のサイクルにもいつか終わりが来て、その後回復すると循環を繰り返すのが市況の特性です。

2. 荷動き

資料6をご覧ください。荷動きを見てみます。鉄鉱石は、ドライバルクの中で最も大きな荷動きを誇り、その7～8割が中国向け、この荷動きがドライバルク市況の全体を左右する力を持ちます。

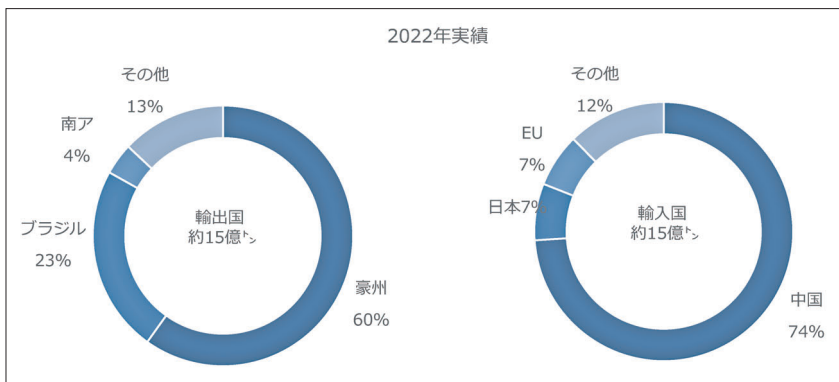
資料7のグラフ見ると、過去20年以上にわたり、中国向けが増えてきたことが分かります。しかし、脱炭素化の時代に入ることを踏まえると、今後は頭打ちor減少傾向がコンセンサスです。

資料8は、トレードパターンのイラストレートです。

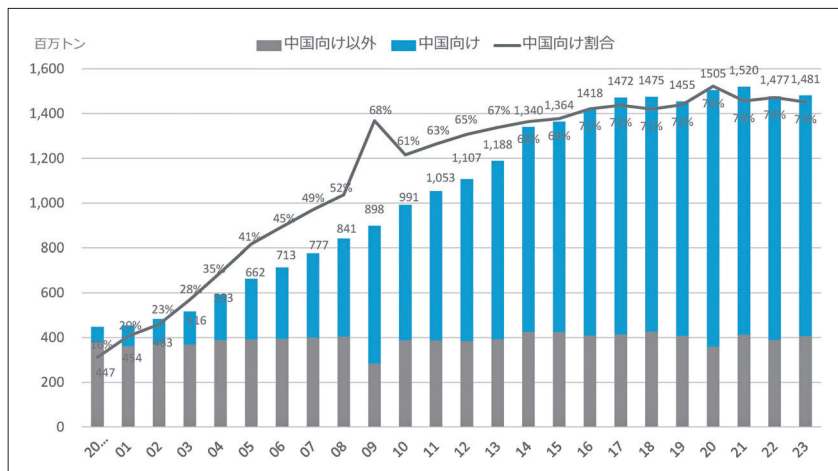
資料9は、AISで鉄鉱石を積んでいるドライバルク船のポジションを表示しています。

資料10は、石炭の荷動きは、4割が中国とインドに向かいます。続いて日本、韓国、EUがほぼ1割です。

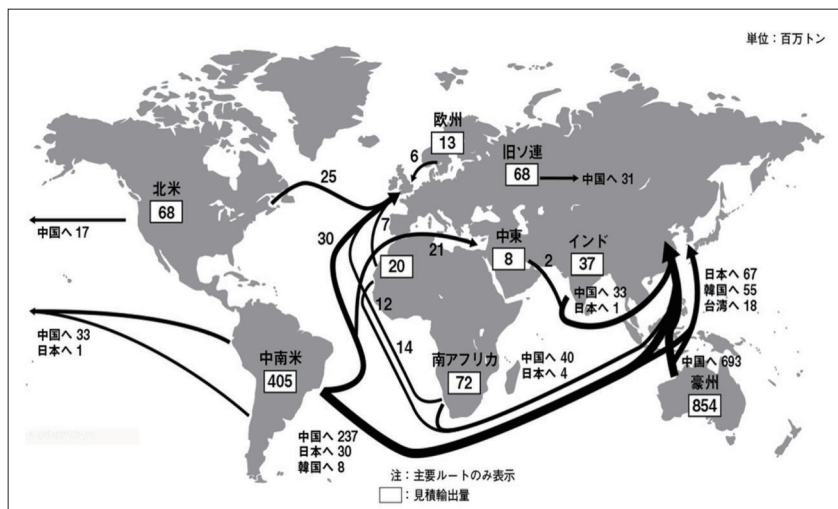
資料6 鉄鉱石の海上荷動き（出所：Clarksons）



資料 7 鉄鉱石の海上荷動き（出所：Clarksons）



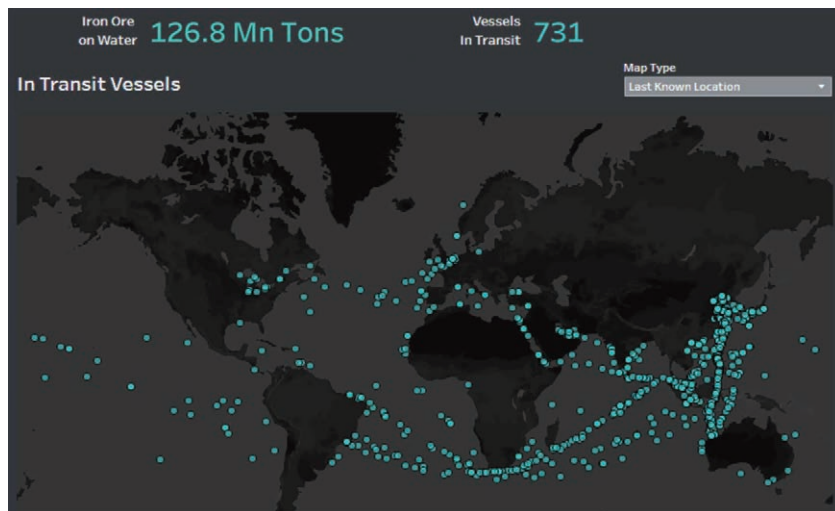
資料 8 鉄鉱石の海上荷動き（通関統計に基づき当社作成）



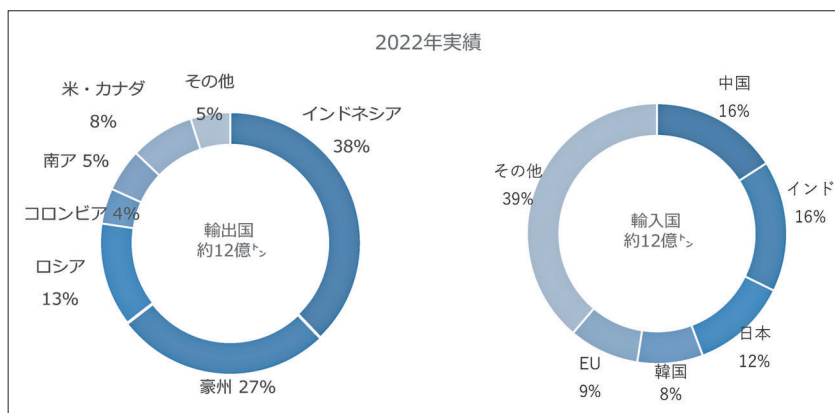
資料11をご覧ください。過去20年以上にわたり、石炭の荷動きは中国とインド向けが増えてきましたが、両国とも輸入炭が主力ではなく、国内炭の消費量のほうが大きく上回ります。

中国の年間輸入量の約3億トンに対して、国内炭の生産量40億トン、イ

資料9 鉄鉱石の海上荷動き（出所：S&P Global）



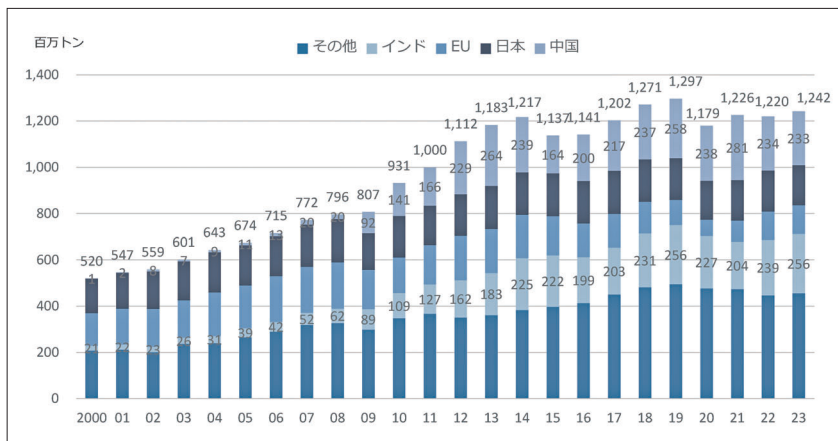
資料10 石炭の海上荷動き（出所：Clarksons）



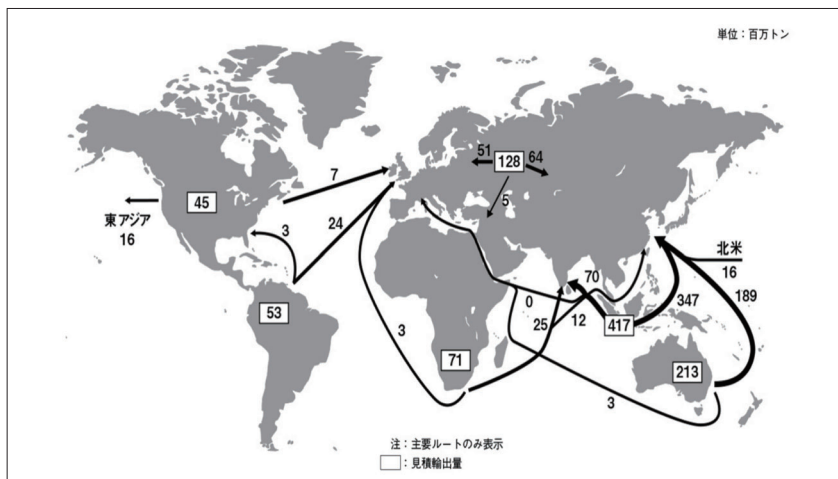
インドの国内炭の生産量は8億トンです。国内炭は輸入炭より割高なため、経済原則に則れば「脱石炭」は先ずは国内炭が対象になりますが、現実には近年高まっているエネルギー安全保障の観点から両国とも増産傾向にあります。

資料12は、一般炭（電力炭）のトレードパターンです。

資料11 石炭の海上荷動き（出所：Clarksons）



資料12 一般炭の海上荷動き（出所：通関統計に基づき当社作成）

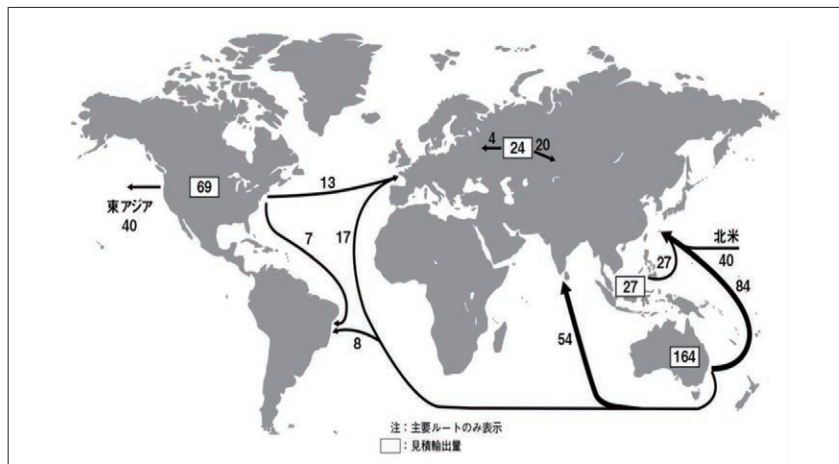


資料13は，原料炭のトレードパターンです。

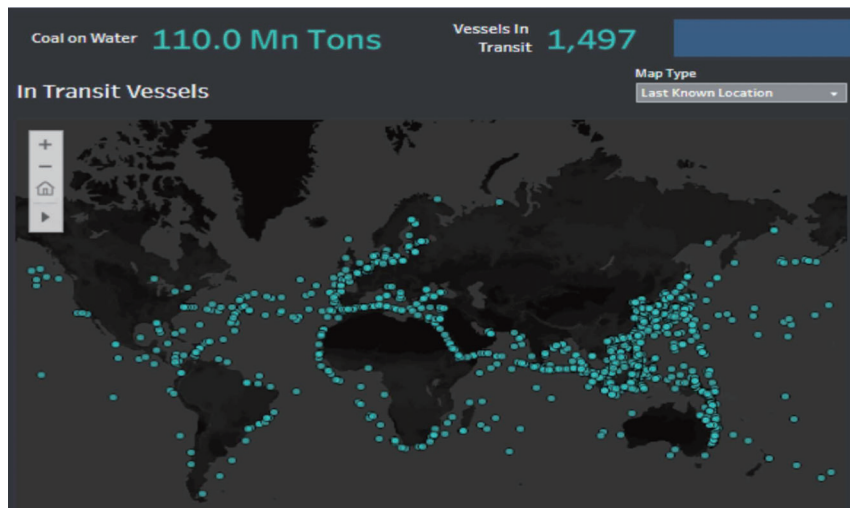
資料14は，両者を積んだドライバルクの隻数になります。

資料15をご覧ください。穀物は中国が大きなバイヤー，輸出国はブラジル，米国，アルゼンチン，ウクライナ，ロシアというおなじみの面々が並んでいます。

資料13 原料炭の海上荷動き（出所：通関統計に基づき当社作成）



資料14 石炭の海上荷動き（出所：通関統計に基づき当社作成）

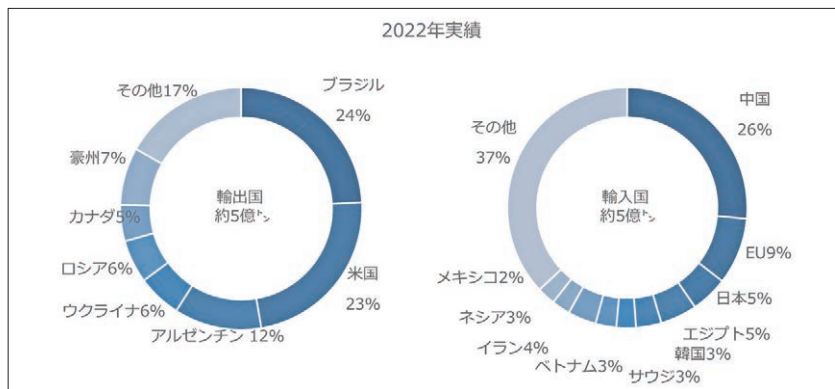


次は資料16ですが、穀物でも中国向けが増えてきました。巡航速度を保って荷動きは増えています。

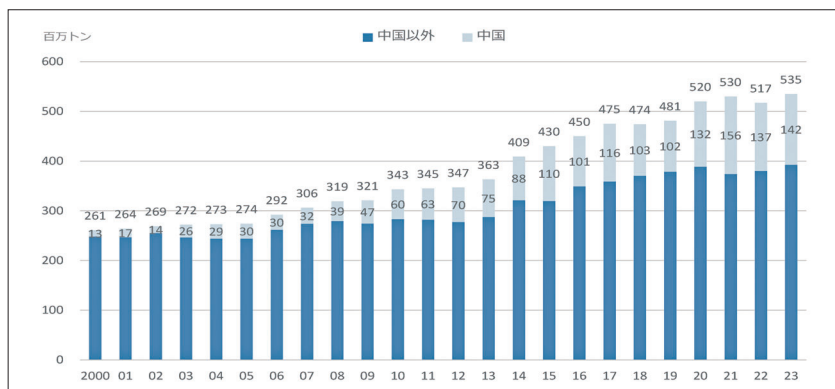
資料17は、穀物のトレードパターンです。

資料18は、AISで穀物を積んだドライバルク船を表示しています。

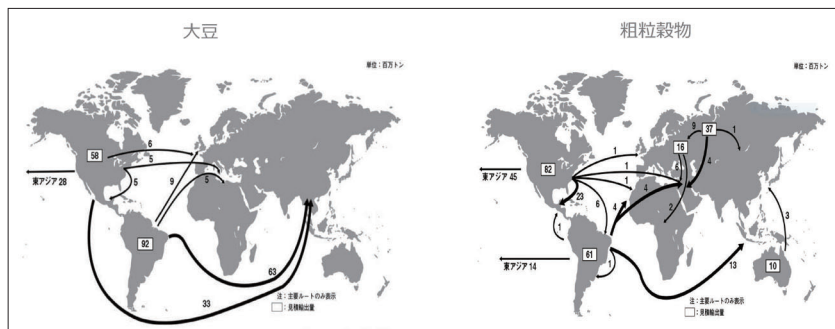
資料15 穀物の海上荷動き（出所：Clarksons）



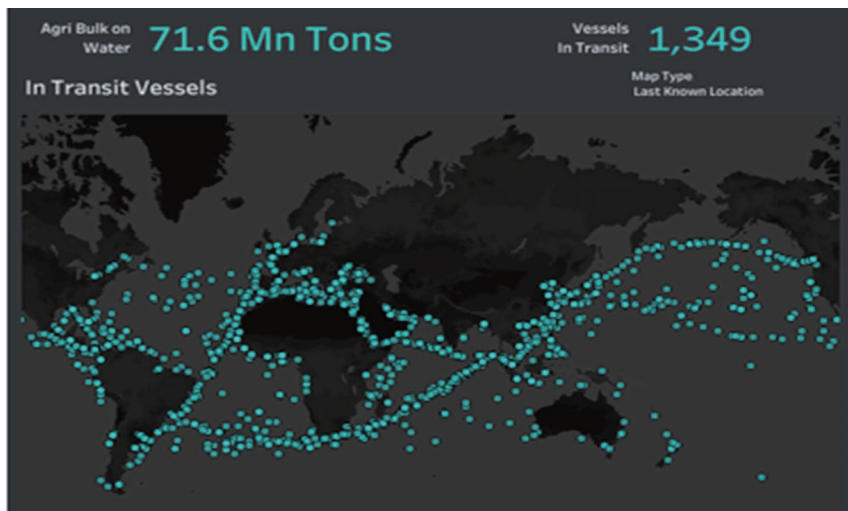
資料16 穀物の海上荷動き（出所：Clarksons）



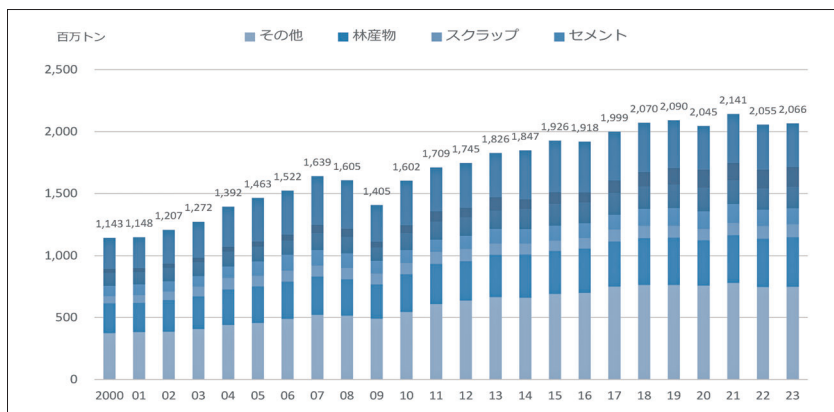
資料17 穀物の荷動き（出所：通関統計に基づき当社作成）



資料18 穀物の荷動き（出所：S&P Global）



資料19 マイナーバルクの海上荷動き（出所：Clarksons）

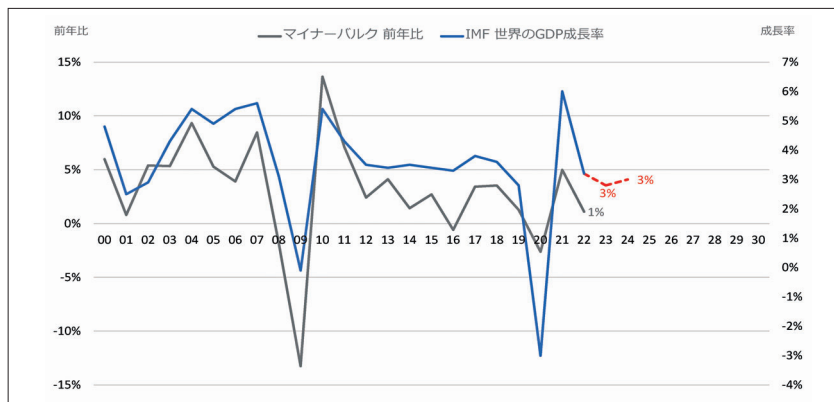


資料19をご覧ください。マイナーバルクとは鉄鉱石、石炭、穀物以外のドライバルク貨と考えてください。

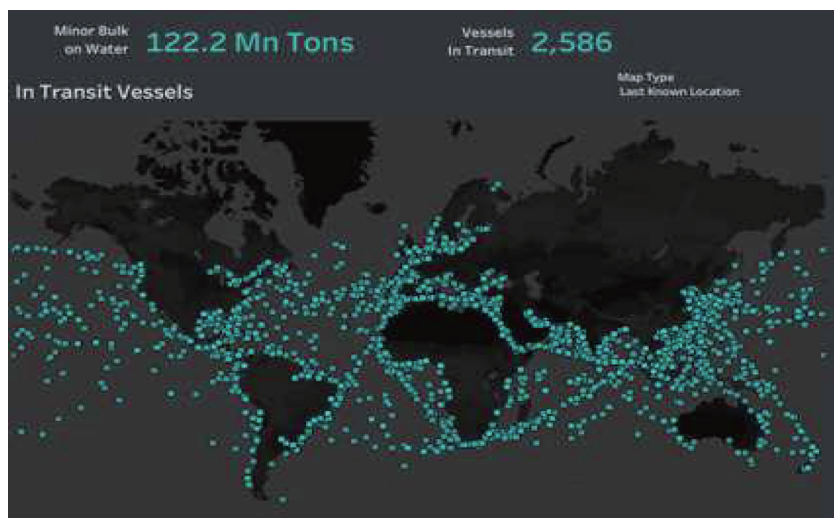
資料20、マイナーバルクの荷動き伸び率と世界の経済成長率はカップリングしています。経済成長が続く限り荷動きは伸び続けることになります。

資料21は、マイナーバルクの荷動きを捉えた AIS 表示です。

資料20 マイナーバルクの荷動き（出所：Clarksons）



資料21 マイナーバルクの荷動き（出所：S&P Global）



3. 船舶位置情報（AIS）で読み解く市況構造

さて、これからはAISから得られる情報を用いて市況構造を解説します。

現在は船の位置を机の上で確認できます。どこにいるのか、何ノットで走っているのか、何を積んでいるか（これは推定）等も提供してくれます。こ

れを利用し市況構造を読み解きます。

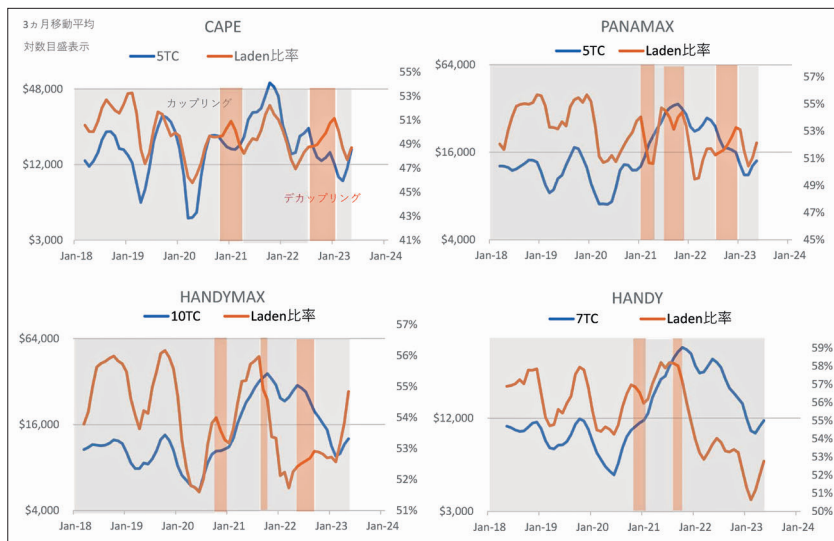
資料22をご覧ください。次の5つKPIと市況を重ねます。

一つめは、資料23のLaden比率です。これは全隻数に占めるLaden隻数の占有率で、船腹需給が強弱を表し市況とは正の相関にあります。グラフ傾向を見ると、常時、船腹需給が市況を語っているとは限りませんが、市況を決

資料22 5つのKPIsと市況の関係から読み解けることは？

KPI	単位	内容
Laden比率	%	全船腹に占める積載船比率
出荷隻数	隻数	Shipment数
滞船隻数	隻数	積載状態の滞船隻数
DWT Days	トン	載貨重量 (DeadWeight Ton) x 航海日数
速力	Knots	Laden (積載状態) スピード

資料23 Laden比率はトレンドを語る (出所：S&P Global)



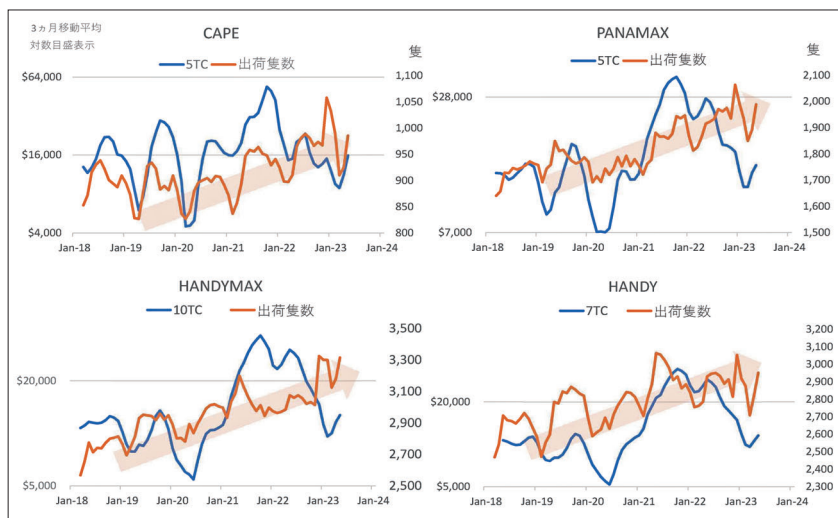
定する大きな要因の一つであることがわかります。

二つめは、資料24の出荷隻数です。これは貨物を積んで出航した船をカウントしています。ポイントは、(Laden比率ほど強くはないが) 市況とは無関係ではないということ。

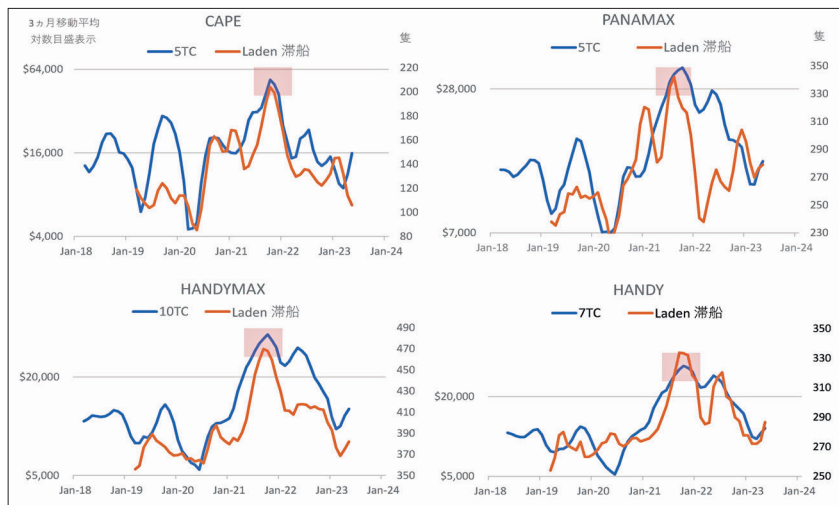
三つめは、資料25の滞船隻数です。これはLaden状態で滞船している船をカウントしています。Laden状態の滞船隻数なので、Laden比率と出荷隻数に内包しているKPIになりますので、市況との相性は良好。ポイントは、2年前のスパイクのピークと重なっているところを見ると、演出効果があったことが分かります。

次に、四つめの資料26の速力と市況を重ねると、きれいに相関します。これは、速力が市況を作っているのではなく、市況が速力をつくっていると考えられ、「原因」が市況であり、「結果」が速力という関係にあると推測します。二つめのポイントは、今年から速力が落ちていること。これは今年から燃費規制が始まったことが理由のひとつと考えます。

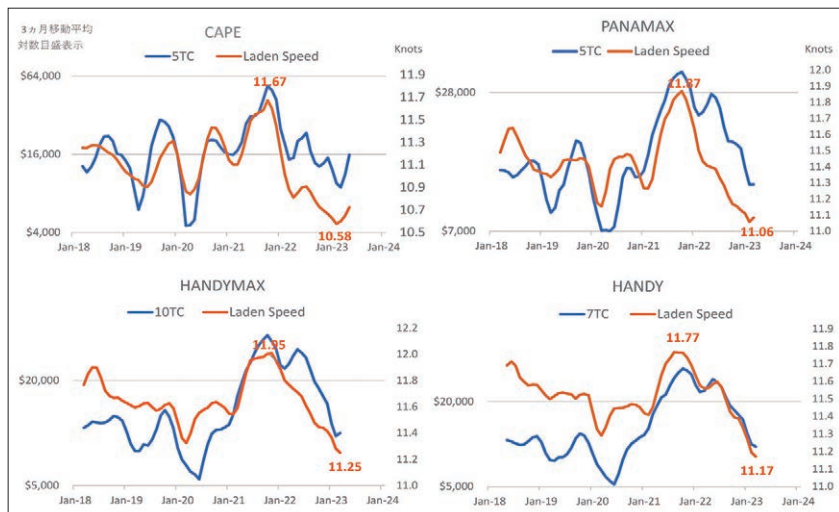
五つめは資料27の (DWT×航海日数=) Deadweight Daysです。これは資料24 出荷隻数は伸びている (出所：S&P Global)



資料25 滞船隻数が2年前の高騰を演出（出所：S&P Global）



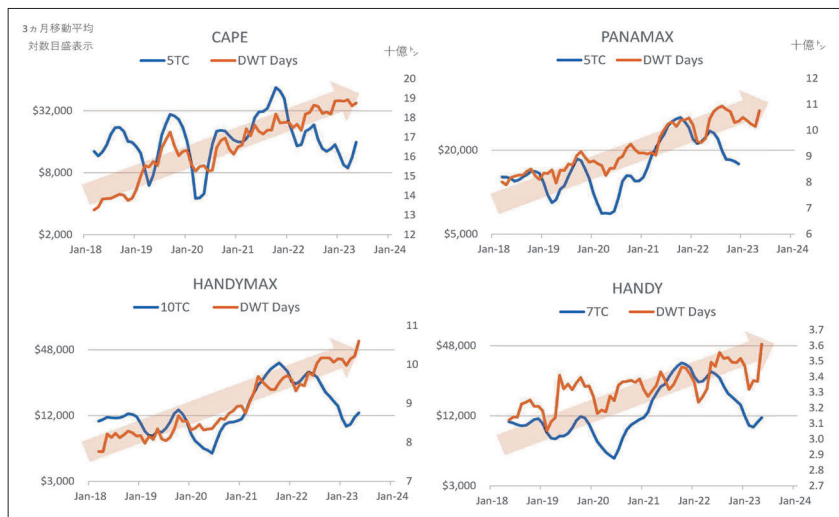
資料26 速力は市況に追随し今年から低速モード（出所：S&P Global）



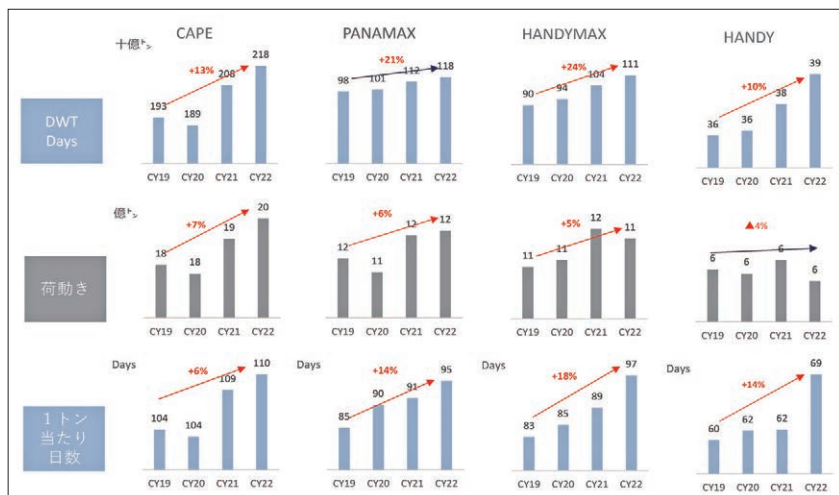
日数ベースの荷動きを表し、減速効果により日数が伸びています。

もう少し見てみましょう。資料28のグラフは4船型を並べて、上のグラフが年間のDeadweight Days, 真ん中がトン当たりの荷動き, そして、下が1

資料27 DWT Days = 日数ベースでの荷動きも続伸中（出所：S&P Global）

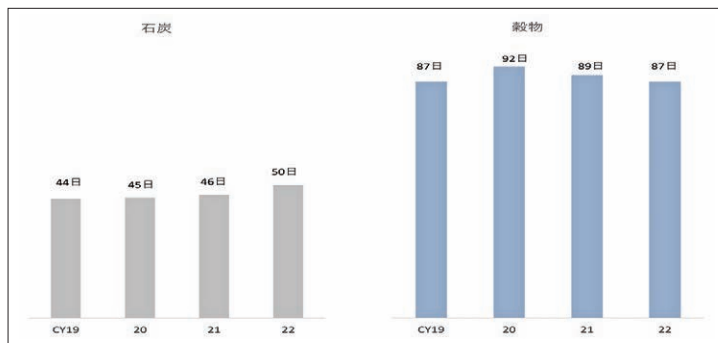


資料28 1トン当たりの日数（出所：S&P Global）



トン当たりの航海日数です。ポイントはコロナ禍前後を比較すると、トン当たりの荷動き量以上に、1トンあたりの航海日数が伸びています。同じ荷動き量でも航海日数が伸びており、トレードの規模は膨らんでいます。

資料29 1 航海当たりの航海日数（PANAMAXの場合）（出所：S&P Global）



もっとわかりやすくPANAMAXの1航海当たりの航海日数（資料29）を見ると、穀物の平均の航海日数は90日前後で変わらないですが、石炭は45日から50日に増えています。これは欧州が輸入禁止したロシア炭の代替ソースが長距離になったことが原因です。

資料30をご覧ください。今までお話ししたことを整理させていただきましたが、これからは「マーケットを語るKPIは存在するか」ということについてお話しします。Laden比率は強いKPIだが、最近はデカップリングし市況

資料30 読み解けることは？

KPI	単位	内容	読み解けること
Laden比率	%	全船腹に占める積載船比率	市況のトレンドを決める大きな要因だが（Laden比率が同率でも市況水準が異なることから）水準は決めない
出荷隻数	隻数	Shipment数	荷動きは続伸中
滞船隻数	隻数	積載状態の滞船隻数	滞船隻数の増加が2021年の市況高騰を演出
DWT Days	トン	載貨重量（DeadWeight Ton）x 航海日数	荷動き（トン当たり）以上に日数当たりのトレード規模は伸びている。
速力	Knots	Laden（積載状態）スピード	速力低下が日数当たりのトレードを伸ばしている。速力が市況を作るのではなく、市況が速力を決定する。

のトレンドと一致していません。荷動きや船腹需給が市況を支配すれば読み解けやすいが、そうならないのが市況です。

なぜならば、需給以外の要因（資料31）が市況を支配する力をもっているためです。

需給以外の要因の代表格はセンチメントです。そのセンチメントは目に見えませんが、源泉となる景況感は目に見えます。

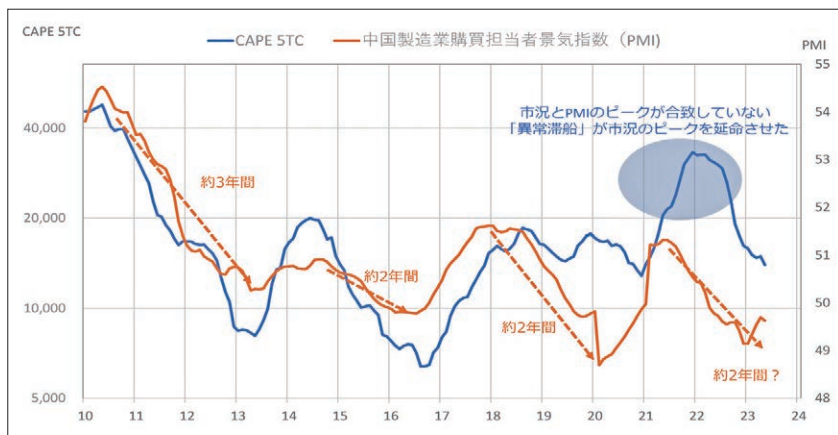
代表的なものは、中国の製造業PMIです。ドライバルク市況の季節的な変動要因を平準化するため12カ月移動平均にして重ねたグラフです。大味な見方になりますが、（コロナ禍前後は異常滞船があってPMIと比べてドライ市況のピークが延命し両者のトレンドはズレています）この連動性は合格点と言っていいでしょう。

すなわち、ドライバルク市況も景気の波に乗っていて、荷動きや船腹需給を上回る力があるということは頭に入れておきたい。そして、景気はサイクルで動く＝ドライ市況もサイクルで動くことも意識しておきたい。

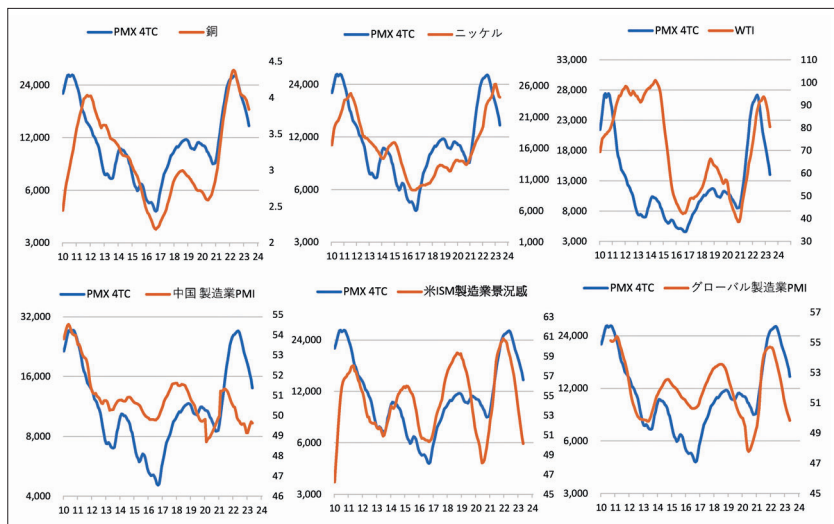
対象を身近なPANAMAX市況に変えて、世の中のいろいろな景気指数と重ねても見える景色は似ています（資料32）。

つまり、マーケットを見るときは、荷動き等のミクロだけではなく、大き

資料31 需給以外の要因（出所：BALTIMORE EXCHANGE, 中国国家统计局）



資料32 景気指数 vs PANAMAX市況



なマクロの視点も必要ということ。

4. 長期見通し

長期見通しを考える前に、もし世の中にマーケットを表す数式があるとしたら、需要÷供給、つまり需給バランスを基準に、滞船に異常はないか？を考慮した後に感応度を掛け合わせる、そして、サイクルを忘れない。この数式を念頭に市況の分析をしています。

分かりづらいのは「感応度」で、これがいわゆるセンチメントです。同じ需給バランスであってもセンチメントの強弱で結果（＝市況）は異なります。たとえば、需給バランスが 0.9 であっても、センチメントが 8 であったり 9 であったりすると、出た目の市況は異なります。つまり（需給バランスが分かっても）センチメントは定量化できないため、市況を予測するのは困難となります。

次に「サイクル」です。サイクルには 2 つあり、短期的なサイクルは季節性や反騰⇄反落の繰り返しを意味します。とりわけドライバルク市況は行き足がつきやすく、イケイケどんどんでマーケットは上がり、いつかどこかで梯子が

外れて急落します。マーケットは永遠に上がりませんし、下がり続けません。

長期的サイクルは、船腹の新陳代謝の波がもたらす15－20年毎のメガサイクルを指します。

以上を踏まえて、今後10年間の長期的な市況見通をお話しします。

資料33をご覧ください。注目は解撤候補の隻数が多いこと。20歳以上の老齢船は退出、すなわちスクラップ対象となります。

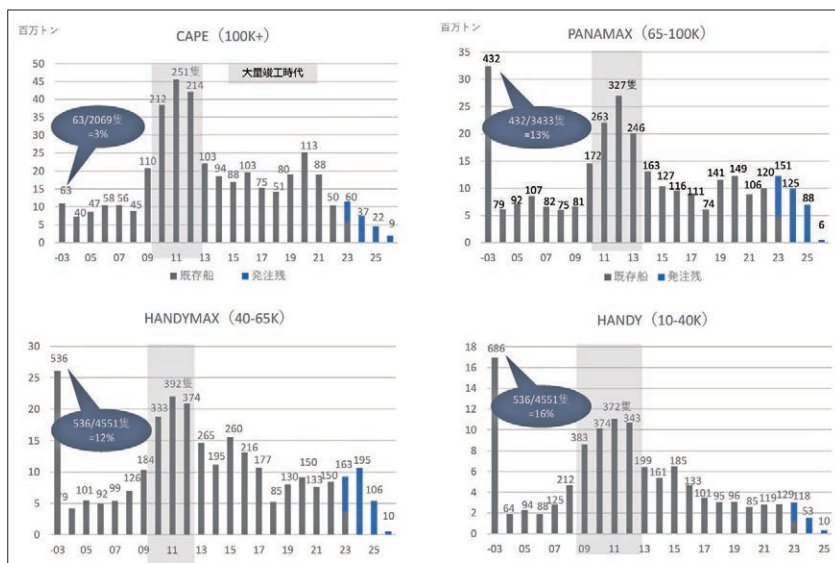
そして2033年までには、半分以上が20歳以上になります（資料34）。

資料35、これが最後のスライドになります。2024年から第8期が始まる見通しとしました。

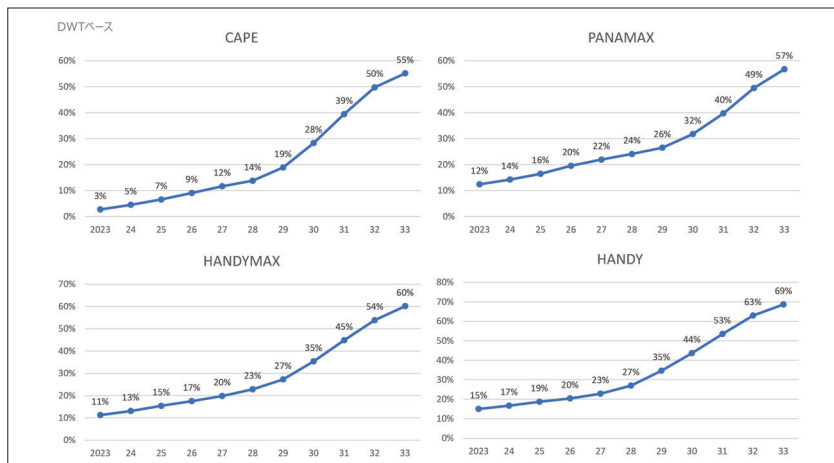
老齢船が積み上がっていくなか、環境規制が発効しソフト面でもハード面でも老齢船にこれまで以上の負荷がかかり、生き残りが困難な時代が予見できます。

第二期の海運バブルは急速な中国向けの荷動きの急速な伸びに船の供給が追い付けず、市況がスパイクしました。そして、これからの10年間は、船腹

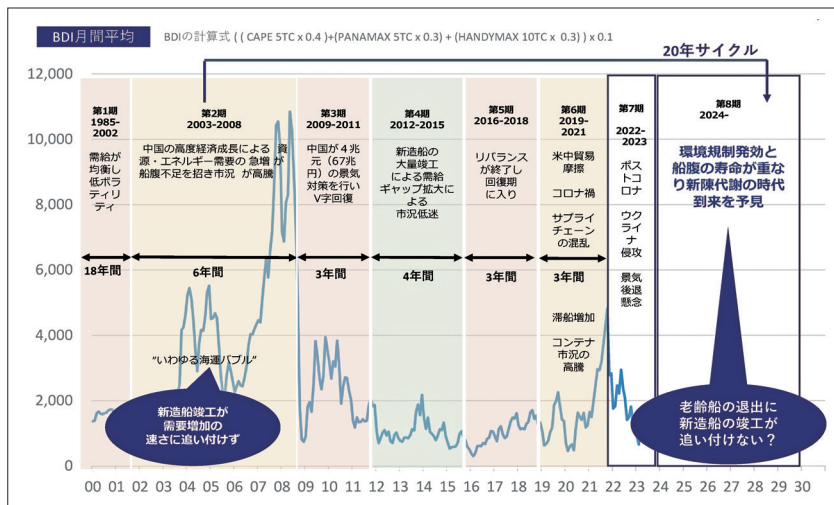
資料33 増加する老齢船（出所：Clarksons）



資料34 船腹量に占める20歳以上比率（出所：Clarksons）



資料35 ドライバルク市況の歴史認識（出所：Baltic Exchange as of 14 June）



の新陳代謝のサイクルが回ることが予見できるなか、新造船の竣工が老齢船に退出に追い付けるのか？に注目しています。

編注：文中資料は全て日本郵船㈱提供です。また、質疑応答は誌面の都合により割愛させていただきました。

国際海運における脱炭素の取り組み

——就航船の燃費性能指標規制（EEXI規制）や燃費実績の格付け制度（CII格付け）について

カーギルジャパン合同会社
船舶営業部 ビジネスデベロップメント マネージャー
安井 央



はじめに

脱炭素の潮流は近年海運業界においても年々加速しており、具体的な短期・中期・長期の目標とその達成に向けての制度・規制の構築，そしてその取り組みや投資が急速に具現化している。海運業界ではIMO（国際海事機関）が主体となって，世界的な目標数値・時間軸が設けられており，本章では2023年1月より開始されたEEXI規制及びCII格付けに焦点を当てながら，海運業界の脱炭素の動きを考察する。

海運業界の脱炭素の動き

まず初めに海運業界における脱炭素の動きを振り返ってみる。遡ること10年以上前から既に海運業界では脱炭素へ向けた取り組みは始動しており，その中で2018年4月にIMOにより国際海運からのGHG（温室効果ガス）初期削減戦略が採択された（今後5年ごとに見直し，次回は2023年7月のMEPC80にてGHG削減戦略の改定が予定）。

（参照：IMO脱炭素ロードマップ：<https://www.imo.org/en/MediaCentre/HotTopics/Pages/Cutting-GHG-emissions.aspx>）

● IMO GHG 削減戦略における目標

ビジョン：最終努力目標 GHGゼロ排出（今世紀中出来る限り早期）

目標レベル

短期：輸送効率の改善目標 2030年までに最低40%改善（2008年比）

EEDIの更なる導入により，新造船のCO₂排出効率の改善

中期：輸送効率の改善目標 2050年までに70%改善（2008年比）

GHG総排出量削減目標 2050年までに最低50%削減（2008年比）

長期：GHGゼロ排出のための努力を追求

これらの短期・中期・長期目標において，EEXI／CIIは短期目標達成の施策として位置づけられ，技術面・運航面の両サイドからのアプローチとして2023年1月から施行された。

次にそれぞれEEXI規制，CII格付けの詳細に触れる。

EEXI (Energy Efficiency Existing Ship Index)：就航船の燃費性能指標規制とは

EEXI規制は2021年6月のMEPC 76（第76回海洋環境保護委員会）で採択され，新造船のエネルギー効率を評価するエネルギー効率設計指標（EEDI^{※1}）の枠組みを「既存船」にも拡大したもので，新造船と同等の設計効率を求める規制である。EEXI規制の対象は，一部船種・船舶を除き，完工日にかかわらず国際海運に従事する400GT以上の全ての船舶で，船種・船型ごとに与えられたEEXI規制値（“Required EEXI”）への適合が要求される。また，規制適合に関する認証は，2023年1月1日以降最初のIAPP（International Air Pollution Prevention）証書に関する年次検査，中間検査または更新検査時までに受けることが要求されている。適合が承認されるとIEE（International Energy Efficiency）証書が発行される。

^{※1} EEDI（Energy Efficiency Design Index）は，新造船のCO₂排出量を，設計・建造段階において「一定条件下で，1トンの貨物を1マイル運ぶのに排出すると見積もられるCO₂グラム数」としてインデックス化し，船舶の燃費性能を差別化するものである。引用：（一財）日本海事協会

<https://www.classnk.or.jp/hp/ja/activities/statutory/eexi/index.html>

EEXIは以下の算出方式にて求められる。

$$\frac{(\text{CO}_2 \text{換算係数} \times \text{燃料消費率} \times \text{機関出力})}{(\text{積載能力DWT} \times \text{船速})}$$

個船ごとにEEXI値が算出され（個船ごとに“Attained EEXI”が算出）、EEXI適用船となるにはAttained EEXI ≤ Required EEXIを満たさなければならない。なお、個船ごとのEEXI値は各船舶の設計を基に評価され、気象・海象など運航要素の影響は受けない。

Attained EEXI ≤ Required EEXIを達成するための方法は船主に委ねられており、その改善方法としては以下の方法が考えられる。

- **主機出力の制限**: エンジン出力制限（EPL）、シャフト出力制限（SHaPoLi）、エンジン減定格などによってエンジンの出力を落とすことで船速を制限する。作業範囲が最小限で済み、費用を抑えられる手段であり、最も用いられる手段と言える。
- **省エネ装置や燃費向上技術の導入**: 低摩擦塗料、空気潤滑システム、風力補助推進、廃熱回収システムなどの省エネ技術を取り入れることで、船体の抵抗減少やプロペラの推力向上を実現する。
- **低炭素・ゼロ炭素燃料の使用と、対応エンジンへの改造**: LNG、アンモニア、メタノール、水素燃料の使用及び、それら燃料に対応できるようエンジンを改造する。

EEXI基準値を満たさない場合

EEXI基準値（Required EEXI）を満たさない場合は、上記に挙げたような燃費性能の改善を図る必要があり、船級（Class）による認証が必要となる（EEXIテクニカルファイルやEPL船上管理マニュアルの承認）。またIEE証書の発行も船級により行われるため、基準を満たさない未承認の状態では最悪の場合国際運航が不可能となってしまうことになりえる。

EEXIの影響

EEXI基準を満たすための手段としての航海速度の制限は、理論的には航海日数の長期化をもたらし、船腹供給の引き締め効果が考えられるが、市況や燃料価格にも依存するため、2023年導入開始後、現時点ではそれらの影響は限定的である。

また同規制導入によって老齢船、非効率船の退出を促進する作用は今後一定の影響を及ぼすと考えられる。

CII（Carbon Intensity Indicator）格付け制度とは

CIIとは燃費実績の格付け制度であり、船腹（5,000 GT以上が対象）の運用効率を改善することによりGHGの削減を目指す取り組みである。

主なポイントとしては

- 2023年より毎年1年間の燃料消費量等データの認証から格付け開始。格付け認証は2024年より実施
- 年間のCO₂排出量、航海距離に基づきCII計算値を算出する（Attained CII）。
- 2019年のCII平均値（リファレンスライン）から各年の削減率（2023年 5 %，2024年 7 %，2025年 9 %，2026年11 %）を基に算出されたCII基準値に対して、1年間のCII実績値の達成度によって格付けがなされる。よってCII基準値は年々削減されるため継続的に改善に取り組まなければならない。
- 格付けはA-Eで表され、低格付け船（3年連続“D”，または単年“E”）に対しては改善C評価を獲得するための対策をまとめた改善計画書を船舶エネルギー効率管理計画書（Ship Energy Efficiency Management Plan [SEEMP] Part III）に記載しなければならない。

ドライバルク船のCII算出方法は、

$$\frac{\text{年間燃料消費量} \times \text{CO}_2 \text{換算係数}}{\text{積載能力DWT} \times \text{年間航海距離}}$$

に基づいて算出される。

上記計算方法は一見すると、燃費効率性を計測に関しては一定の論理性・妥当性は認められる。しかしながら、規制遵守に直接的・間接的に関わる、または影響を受ける関係者は多岐に及び（船主・定期用船者・航海用船者・荷主）、規制遵守には全ての関係者の協力が必須である。その意味で規制設定はフェアに制定されなければならない。

以下、CIIの抱える課題について触れてみたい。

CII格付けの課題

● 罰則規定がない

改善計画を提出するのみで、明確な罰則は設けられていないことから、用船者や荷主の用船基準で高いランクが要求されうる以外、CIIのランク付けのみではGHG削減効果は限定的であるといえる。どの規制にも言えることだが、単一万能の規制は存在せず、多元的・多角的なアプローチによって関係各所を取り込み、総合的に脱炭素に貢献するというのが現実的であるため、CIIに罰則規定がないこと自体はここでは特段重大な課題としては見なさない。

● CII算出方法

技術アプローチであるEEXIは、その目標数値算出とそれに対する達成・非達成は客観的で議論の余地はなく白・黒はっきりしている。対照的に運航面での規制であるCII格付けはその算出方法の時点から、議論の余地があることは否定できない。つまり「運航」と一口に言っても、その運用主体者は複数存在し、「現実在即した」「公平」な算出方法という意味では現在の算出方法は船主や傭船者両者のコントロール可能な範疇を超えた要素を多く抱えており、慎重な議論と公平な算出方法の策定が急務であると考えられる。CII格付け改善を目的とするのではなく、あくまでGHG削減のための一つの枠組みであり、「木を見て森を見ず」の状態に陥らないことが重要である。

以下、CII算出方法に関して、現時点での問題点をいくつか挙げてみる。

- 航海距離

CIIの計算上、母数である航海距離を延ばすことはCIIの改善につながる。しかしながら、本船の年間航海距離を単一的に計測することは、滞船期間が多い航海を履行した本船は自動的にその航海距離は削減され、結果CIIに悪影響を及ぼすことになる。港での滞船期間は船主及び傭船者のコントロールが及ぶ領域ではなく、また滞船リスクを管理することはほぼ不可能である。そのような管理できない要素を算出方法として採用している現行の算出方法では高性能船に対しても低格付けを与えることになりえ、効率船が正当な評価を受けられない環境を生んでしまう。よって技術革新へのモチベーションの低下を招き、今後の船腹効率化への促進力を多大に阻害することにもなりうると考えられる。

- 短い航海に従事する本船（小型船）もCII算出の観点から悪影響を受けうる。短い航海を複数重ねて行う本船は荷役時間（ポートステイ）、これに付随する滞船時間の増大につながり、CII格付けは結果として悪化してしまう。よって長距離輸送に従事する船腹の方が、CO₂の排出量としては多くを排出するにもかかわらず、CIIの格付けがよくなる可能性がある。CII格付けを改善する目的だけを考えると、そのような状況下では効率船が短い航路、非効率船が長い航路を運航することでCII格付けを維持しようとする不合理な動きが出現し、結果としてCO₂の排出量の増加を招くことになり、GHG削減とは本末転倒の結果を招く可能性がある。
- CII格付け上悪い航路（長期滞船、短航海、荒天時期など）を避けようとする動きが顕著化する懸念（特に年後半）がある。これによってCIIの悪い航路での船腹確保が困難となる可能性がある。
- BIMCO CII Clause

CII開始に伴いBIMCO（バルチック国際海運協議会）が2022年11月にCII条項を発表した。この条項は定期用船における条項で、船主と定期用船者が協力しながらCII改善に向けて対応することを目指して策定されたが、用船者への偏った負荷を与える現実的観点を欠いたものと言わざるを

えない。主な点として

- 用船期間中のCII実績値をCII合意値より悪化させてはいけない
- 用船期間中のCII実績値が合意値から乖離していた場合、船主は用船者にその旨を警告し、次の航海計画の調整が求められる。

特に年の後半に時期にCIIが悪い本船を用船した際に非現実的な配船指示を要求される可能性は否定できず用船者に対する一方的な規制となり、用船者が船舶を最適に運航しようとする際の柔軟性を制限する可能性がある点を喚起すべきと考える。

弊社の考えでは、これらのCIIの抱える問題を共有しながら、用船者は船主と脱炭素への取り組みは適正な形で継続していく必要があると認識する。

(参照BIMCO CII clause : <https://www.bimco.org/contracts-and-clauses/bimco-clauses/current/cii-operations-clause-2022>)

- EEOI (Energy Efficiency Operational Indicator : エネルギー効率運行指標)

CII指標とは異なる視点からの指標がEEOIと呼ばれる指標がある。CIIとの主な相違点は、貨物数量が算定ベースとなっており、航海ごとに排出効率が算出される点である。これによって荷主側（航海用船者）と運航者間での排出削減に向けてより具体的に改善策が議論可能となる。EEOI目標値はIMO削減目標に即したものとなっており、後に触れるSea Cargo Charterは同指標を採用している。

EEOI算出方式

$$\frac{\text{燃料消費量 (Ballast + Laden 航海)} \times \text{CO}_2 \text{ 換算係数}}{\text{貨物数量} \times \text{輸送距離 (Laden voyage)}}$$

EU ETS(Emissions Trading System) EU 域内排出量取引制度

本稿で取り扱ったEEXI規制／CII格付け以外に、もう一つ脱炭素に向けた大きな規制開始として海運EU ETSにも触れる必要がある。欧州連合 (EU)

では、2005年当初から発電、鉄鋼、セメント、石油精製などエネルギーを大量に使用する産業セクターで開始しており、2024年1月からは海運セクターでの導入が予定されている。排出量の上限に対して海運会社単位で排出枠を購入（海運セクターは有償購入）し、過不足分の排出枠を売買する仕組みである（キャップ・アンド・トレード方式）。割り当て上限値は年々削減されるため、市場原理に基づき効率的に排出量を減らすことが求められる。最初の2年間（2024年・2025年）は軽減措置が設定され、2024年は排出量の40%を購入・償却、2025年は排出量の70%を購入・償却することとなる。また排出枠購入の対象となる排出量は、EU／EEA（欧州経済領域）加盟国の港湾間の航海、または停泊で排出量の100%、EU／EEA加盟国と加盟国以外の航海では排出量の50%が対象となる。

本制度はその対象領域と運用がはっきりしており、公平性のある制度だと言える。今後他の地域でも同様なETS導入の可能性は大きいと考えるが、これらの制度導入によって新燃料・ゼロカーボン燃料使用の増加が促進され、また同域での高性能・効率船の配船の増加を促進させる要因となる。

脱炭素へ向けて

規制を順守すること、格付けランクを改善すること以上に、GHG排出ゼロへの長い道のりの中で重要なことは、長期的な準備計画、費用算出、それに伴う投資計画、ひいてはパートナーを得ることである。海事産業での脱炭素の促進・達成には、先にも触れたとおり、単一の万能な規制・ルールは存在しないと同時に、主体者として船主、または運航者、用船者が単独で達成することも不可能である。そうした中で船主・用船者、荷主さらに荷主の先の顧客をも広く巻き込んだ従来の船主・運航者・荷主を超えたステークホルダーのvalue chainを構築しながら取り組む必要がある。

時間・投資面から見ても脱炭素のアクション・プランは多元的であり、以下簡単ではあるが短期・中期・長期の時間軸別に海事産業での脱炭素へ向けた取り組みを弊社カーギルの取り組みを含めて述べたい。

(短期)

Digitalization：本船運航を天候、CO₂排出量、コマーシャル的要素を加味して最適な航海ルーティングやバンカリング、本船設備や状態の最適化、パフォーマンスの検証を実現するにはデジタル技術を通してデジタルトランスフォーメーションが不可欠である。弊社はZero-North社のデジタル技術を活用して運航最適化に努めている。

(参照：<https://zeronorth.com/>)

ESD (Energy Saving Devices)：

エンジン効率の改善：排熱エネルギーの再利用技術、エンジンの電子制御、燃費効率改善技術など。

プロペラ効率の改善：プロペラから生み出される推進エネルギーの有効利用。プロペラ後方の水の流れを整える「PBCF」、二重反転プロペラ、推進効率改善のためのダクトやバルブ、翼（フィン）などの省エネ装置の開発や船型改良。

船体抵抗の軽減：選定と海水間に空気を送り込むことで抵抗を減らす空気潤滑システム

Parceling (積み合わせ)：船腹スペースを最大有効化すること、または積み合わせによってより効率的な船型で輸送することは、CO₂排出削減とともに、経済性（運賃）の効率化にも同時に達成する、というロジックである。弊社としても専門部署を置き積極的に行っている。

(短・中期)

バイオ燃料：既に供給が始まっており、“drop-in”方式で既存燃料に加えることによりCO₂排出を削減できる。(削減率はバイオ燃料のタイプ・供給度合いによる)。既存の燃料タンクやエンジンに技術的な改良を加える必要がないため、短時間で比較的低コストで脱炭素を推進することができる。弊社としても、feedstockは自社にて確保しており、既に欧州・シンガポールで供給を開始している。またUCO (Used Cooling Oil) や獣脂などを原料とした次世代Bio fuelは安定供給体制面で中期的なソリューションとして確立

されることになる。

風力：風力推進技術も力をいれる船主や運航者は少なくない。弊社は三菱商事の船舶事業子会社であるMC SHIPPINGとのパートナーシップの下で既存船に帆をレトロフィットする形で2023年7月頃より1隻航行開始する（船名MV PYXIS OCEAN）。

（長期）

新燃料船：LNG（液化天然ガス）、バイオディーゼル、アンモニア、メタノールなどの船舶燃料使用が現実的な形で、そのサプライチェーン構築も含めて検証・実証が行われている。

カーギル社としては現時点でメタノール二元燃料船を三井物産から2隻（常石造船 初番船は25年後半に竣工予定）、デンマーク船主J.ローリッツェンから2隻（常石造船 26年後半竣工予定）、それぞれ新造船をする発表をしている。ドライバルク船としては世界発であり、再エネ由来のグリーンメタノール燃料の使用によってライフサイクルベース（燃料製造から消費まで、well to wake）でネットゼロ排出を達成するべく取り組んでいる。

新燃料供給網の構築に関しては、「鶏が先か卵が先か」の議論に多くの時間が割かれてきたが、ドライバルクに関してはこの議論に一つの終止符を打ち、メタノール燃料需要を具体的な形で創造することで、業界の脱炭素への動きを確実に前進させようとする弊社の意図がある。また定期コンテナ船では既に最大手マースクラインがメタノール二元燃料船を発注しており（現時点で19隻）、船種の枠を超えて確実にメタノール需要を生み出しており、生産・供給網も確立されつつある。

脱炭素に向けたフレームワーク

● Sea Cargo Charter

主に荷主や運航者を主体としており、資源メジャー、鉄鋼メーカー、穀物商社、セメントメーカーなど36社が署名している。署名者になる条件として、年次報告義務や署名の公表などが求められる。弊社はSea Cargo Charter設

立にあたり議長を務めている。Sea Cargo Charterでは指標として先述のEEOI指標を採用している。

(参照：<https://www.seacargocharter.org/>)

● Global Maritime Forum世界海事フォーラム

海上貿易の脱炭素を含む発展に取り組む国際的なNPO団体である。現在は弊社カーギルOcean Transportation 社長のJan Dielemanがchairを務める。世界経済フォーラム（World Economic Forum）と連携し、海事、エネルギー、インフラ、金融各部門を代表する200社以上の組織・企業・機関などが参加する企業連合「Getting to Zero Coalition」を設立しており、IMOが定めたGHG削減目標を達成するために、2030年までに外航航路でゼロエミッション燃料による船舶の運航を商業ベースで実現する目標を掲げている。

(参照：<https://www.globalmaritimeforum.org/>)

● NJORD

2019年にデンマーク船社マースクタンカーズ社、三井物産、カーギルの3社によって設立。船主や用船者に対して、省エネ機器や環境技術の提案・最適化により、船腹のCO₂排出削減のためのサービスを提供。

(参照：<https://www.njordsolution.com/>)

最後に

海運業界の脱炭素に関しては、「Together」という言葉がキーワードとなる。脱炭素の方法・手段には一つの正解はなく、上記で述べたように短期・中期・長期の時間軸にまたがり、それによって投資規模も大きく異なる。また主体者も多元的にあり、船主、用船、荷主が単一主体で持続可能的に行えることではない。よって長期的なパートナーシップを構築することが極めて重要な要素となる。また脱炭素へ向けての長期ロードマップの中で今回取りあげたEEXI規制／CII格付けのような規制に関しては、透明性・簡潔性・平等性の観点から設定されることが前提であり、共通目標である「脱炭素」を共に実現することが重要である。

カーギルの船舶部門であるCargill Ocean Transportationはドライバルク船を常時650—700隻ほど運航しており、ハンディサイズからケープサイズまでの船型を取り扱っている。船隊規模度としては世界有数の規模である。このような大規模な運航船隊を有することから、ドライバルク業界の脱炭素の取り組みに関しては弊社は大きな責任を担っており、ドライバルク業界をリードする存在でありたいと考えている。

秋季為替セミナー開催のご案内

飼料輸出入協議会

恒例の為替セミナーを下記の通り開催いたしますので、ご参加くださいますようお願い申し上げます。

なお、今回も会場開催と同時にweb配信を行う予定です。どちらでのご参加を希望されるかも、お申し込みの際ご連絡いただきますようお願いいたします。

記

日 時：令和5年9月12日(火) 14時～15時30分

(会場開催の受付開始13時30分～)

場 所：新橋ビジネスフォーラム <http://biz-forum.jp/access.html>

港区新橋1-18-21 第一日比谷ビル8F TEL 03-5843-9169

演 題：「今後の景気と為替の見通し」(仮題)

講 師：伊藤忠商事(株) (予定)

参加料：無料 (定員となり受付できない場合のみこちらからご連絡差し上げます)

■参加ご希望の方は下記へお申し込み下さい。

飼料輸出入協議会 宮本宛 Email：jfta-o@galaxy.ocn.ne.jp

電話 03-6457-9550 FAX 03-6457-9551

理事長新任あいさつ



飼料輸出入協議会

理事長 永田 義典

(三菱商事株式会社 穀物飼料部長)

この度、飼料輸出入協議会理事長を拝命しました、三菱商事株式会社の永田義典でございます。若輩者ではございますが、我が国の飼料・畜産・水産養殖業界、並びに当協議会の発展に向けて尽力してまいる所存でございます。何卒、よろしくお願い申し上げます。

我々を取り巻く環境は、ここ数年大きく変化してきております。その変化のスピードは益々速くなってきているとともに、これまでの常識や想定には納まらないことも起こり出していると認識しております。

世界的な脱炭素や生物多様性の潮流は、あらゆる産業において変革を迫ってきており、農業・畜産業・水産養殖業と直接間接に対面する我々の業界にとっても、既に大きな影響を齎し始めております。更には、地政学リスクの顕在化を目の当たりにした世界では、様々な重要品のサプライチェーン見直しが進みだしており、食料安全保障を担うこの飼料業界においても対応が求められてくるのが今後あり得るのではないかと存じます。

また、国内に目を転じますと、長期化が懸念される円安、物価高による消費者行動の変化、物流業界の2024年問題、鳥インフルエン

ザ等の疫病リスクの恒常化懸念，更には少子化による長期的な国内市場の漸減等，多くの課題に直面しております。

斯様な環境下，安心・安全で競争力のある飼料原料の安定供給という使命を持つ当協議会の役割は今後一層重要になるものと考えており，様々な課題解決や将来に向けた対策のため，監督官庁，飼料・畜産・水産養殖業界並びに会員各社皆様のご協力を賜りながら，業界の更なる発展に寄与する協議会を目指していききたいと思います。

引き続き関係各所皆様のご指導ご鞭撻を賜りますよう，よろしくお願い申し上げます。

<プロフィール>

2000年 4 月 三菱商事株式会社入社 食糧本部 飼料畜産部

2001年 4 月 食糧本部 グレーントレーディングユニット

2003年10月 食糧本部 穀物ユニット

2008年 4 月 農水産本部 穀物ユニット

2010年 3 月 Agrex Inc. 出向（米国）

2011年 9 月 Agrex do Brasil 出向（ブラジル）

（2015年 9～11月 Harvard Business School：GMP, Executive Education）

2017年 8 月 経営企画部

2020年 4 月 食糧本部 穀物飼料部長

2023年 4 月 食料本部 穀物飼料部長

令和5年度新役員，専門委員会の委員決まる

飼料輸出入協議会では，さる5月30日，令和5年通常総会を飼料輸出入協議会会議室にて開催し，提出議案は全て承認され，引き続き開かれた理事会において新役員並びに専門委員会の委員長，委員が以下の通り選出された。

理事長には，永田義典三菱商事(株)穀物飼料部長が選出された。

7月1日現在の役員は以下の通り。(社名アルファベット順)

役 員

理 事 長	永田 義典	(三菱商事(株) 穀物飼料部長)
副理事長	佐野 豊	(三井物産(株) 食糧事業部長)
副理事長	萬田 義人	(豊田通商(株) 穀物事業部長)
副理事長	椎原 潤	(丸紅(株) 穀物油糧部長)
副理事長	山西 真介	(伊藤忠商事(株) 飼料・穀物部長)
会計理事	須藤 拓也	(双日(株) 食料事業部長)
理 事	豊田 裕司	(カーギルジャパン(同) 飼料穀物部長兼蛋白飼料部長)
監 事	岩瀬 裕紀	(兼松(株) 穀物飼料部長)
専務理事	姫野 健二	(飼料輸出入協議会)

専門委員会

1. 総務委員会

委 員 長	三井物産(株)
委 員	カーギルジャパン(同) 伊藤忠商事(株) 兼松(株) 丸紅(株) 三菱商事(株) 双日(株) 豊田通商(株)

2. 主原料委員会

委 員 長	丸紅(株)
副委員長	伊藤忠商事(株)

副委員長 豊田通商(株)

委員 カーギルジャパン(同) 兼松(株) 三菱商事(株)
三井物産(株) 双日(株)

3. 副原料委員会

委員長 豊田通商(株)

委員 カーギルジャパン(同) 伊藤忠商事(株) 兼松(株)
丸紅(株) 三菱商事(株) 三井物産(株) 双日(株)

分科会

植物蛋白・糟糠類分科会

動物蛋白分科会

粗飼料分科会

分科会長

三菱商事(株)

兼松(株)

双日(株)

4. 編集委員会

委員長 伊藤忠商事(株)

委員 カーギルジャパン(同) 兼松(株) 丸紅(株)
三菱商事(株) 三井物産(株) 双日(株) 豊田通商(株)

5. 安全性委員会

委員長 丸紅(株) (主原料委員長)

豊田通商(株) (副原料委員長)

委員 カーギルジャパン(同) 伊藤忠商事(株) 兼松(株)
三菱商事(株) 三井物産(株) 双日(株)

Empyreal**75**

a Cargill product

Written by: Cargill Branded Feed Empyreal team.

Translated by: カーギルジャパン合同会社

高純度タンパク質のEmpyreal 75[®]

Empyreal 75[®] は、必須アミノ酸と、重要な栄養素を消化しやすくするトウモロコシ由来のタンパク質で、効率的な増体を通じて成長を促進します。Empyreal 75 は、水産養殖魚用飼料の新しいカタチを実現させることができる選択肢として2008年から市場導入されました。



Empyreal 75専用トラック



Empyreal 75専用貨車

タンパク質の供給源として、高タンパク質である Empyreal 75 は飼料中のスペースを確保し、追加原料を配合することを可能にします。南北アメリカと東南アジアを中心に世界17か国で使用するために登録されています。

飼料メーカーに新たな Value

水産養殖魚用飼料メーカーにとっての主な利点は、魚粉の栄養価および機能性を犠牲にすることなく、配合飼料中の魚粉を削減または置き換えることができることです。Empyreal 75 は、栄養価とタンパク質濃度が高いことから、魚粉やその他の濃縮タンパク質などのよりコストのかかるタンパク質の必要性を減らすことにより、水産養殖飼料に更なる配合上のスペースを生み出します。これにより、配合飼料の設計をより創造的に行うための柔軟性が広がり、より付加価値を高めた製品をお客様にお届けすることができます。



持続可能な Choice

Empyreal 75 は、再生可能な植物由来の成分から作られているため、持続可能な選択と言えます。また、ハラールおよびコーシャの認証も取得しており、FSMA 準拠およびFSSC 22000にも対応しています。

対象となる動物／養殖魚にとっての Benefit（利点）

Empyreal 75 は、必須アミノ酸の供給源であり、給餌する動物／養殖魚の成長と健康維持に効果的なソリューションと言えます。消化性が高く、灰分が少なく、そして安全で健康的です。Empyreal 75 は、給餌する動物／養殖魚が早く身体を大きくさせることを促します。また、Empyreal 75 は栄養成

分が安定していることから、一貫して同じ機能上の利点とタンパク質レベルを提供することが可能です。

機能的メリットと物理的特性

Empyreal 75 は、成形された飼料の形状保持をする、より優れた押し出し性を発揮することが示されています。また、結合性とコーティング性、膨張性に優れており、より均一的なセル構造を備えています。加えて、Empyreal 75 は水中でのペレットの形状安定性に優れており、飼料としての形状保持を延長させることができます。水中での栄養分の溶出を最小限に抑えることで、栄養価の浸出を抑えることができます。

カーギルならではのビジネス

Empyreal 75 は、カーギルのトウモロコシウェットミリング事業の一部である、カーギルブランドフィードと呼ばれる事業セグメントが製造する 5 種類のユニークでブランド化された飼料原料の 1 つです。

カーギルのウェットミリング事業では、通常、コーングルテンミールやコーングルテンフィードなどの飼料原料として販売される副製品を製造しています。1995年、この飼料事業を管理していたグループは、トウモロコシ製粉から畜産業界向けに Sweet Bran® という



新しい飼料を生み出しました。その目的は、牛が消化不良を起こすことなく効率良くエネルギーに変えて、増体させることをサポートするためでした。これは、トウモロコシの穀粒にある消化の良い繊維を使用することで実現され

ました。この製品は非常に効果的に機能し、最終的には米国において、年間2百万頭を超える牛の仕上げステージ用の飼料に使用されました。

カーギル ブランドフィードチームは、肉用牛のための革新的な取り組みを続け、現在では年間250万頭を超える牛に給餌されている完全な初期ステージ用飼料である RAMP を開発しました。米国市場で供給されるステーキの5枚に1枚は、これらのブランドの飼料が使用されています。そしてその革新はその後も続き、OneTrak[®] と呼ばれる乳牛用のマクロ成分、そして水産養殖用の Emptyreal 75 へと続けました。

最近では、カーギル ブランドフィードは、エビ専用のトウモロコシ由来の発酵タンパク質成分である Motiv[™] を発表しました。Motiv は単なるタンパク質ではありません。

生理活性タンパク質である Motiv は、エビの腸内環境を改善し、栄養素の取り込みと免疫反応を改善します。その結果、収穫量が増え、エビがより大きくなり、エビの発色も良くなります。



カーギル ブランドフィードは、肉用牛、酪農、水産養殖業界において、独自のサクセス ストーリーを生み出してきました。これらのブランドは、エネルギー摂取量を向上させ、動物の消化器の健康を改善していきます。



オーストラリア（ブリスベン）の食生活

三菱商事会社（Riverina（Australia）Pty Ltd 出向）

吉田 俊介



はじめまして、三菱商事株式会社より Riverina（Australia）Pty Ltd に出向中の吉田俊介と申します。2022年9月末にオーストラリア、ブリスベンに赴任いたしました。赴任のタイミングが、新型コロナウイルスに関わるオース

トラリアへの入国規制が完全解除された直後でしたので、仕事や留学で来豪する方も増えている状況下、家



弊社から見た市内中心部の眺め

探しに相当苦勞したことを今でも覚えています（まさに争奪戦といった様子で、一回の内見に20人殺到したこともありました）。

ブリスベンはシドニー、メルボルンに次ぐ第3の都市で、クイーンズランド州の南東部に位置しています。人口は約250万人、丘や川が多く、気候は年間を通じて10～30℃と温暖です（亜熱帯性気候）。2032年にはオリンピックの開催が予定されており、市内中心部は多くのビル、ホテル、橋、鉄道等が建設中です。

ブリスベンの魅力は、都市に住みながら、自然や動物を気軽に楽しめる点でしょうか。市内にはそれなりにお店も充実している一方、町の中に植物園があり、市内中心部から車で15分ほどいけば動物園でコアラを抱っこ出来ます。また、車で1時間ほど走ればゴールドコーストの海で海水浴やサーフィンを楽しむことも可能です。今回は、そんなブリスベンでの食生活をお届けいたします。



コアラ

●平日ランチ

オーストラリアは移民を多く受け入れていることから、様々な国の料理を楽しむことができます。平日ランチは会社から徒歩圏内で食べることが殆どですが、オーストラリア、イタリア、フランス、日本、中国、韓国、タイ、ベトナム等々様々な国の料理を楽しむことができます。

特ににぎわっているのは、Arrivederci Pizzaというイタリアン料理のお店です。オーストラリアのランチ相場は15



ピザ



店内の様子

豪ドル前後ですが、ここのランチピザは11.5豪ドルとリーズナブルな上で、本格イタリアンを味わえます。

●食後のコーヒー

私自身、ブリスベンに来るまで全くイメージが無かったのですが、オーストラリアはイタリア系移民の方が多く、ピザ、パスタ、ジェラート、コーヒー等がとても美味しいです。特にコーヒーは独自の文化があり、エスプレッソ、ラテ、カプチーノ等に加えて、フラットホワイト^(※1)やロングブラック^(※2)といった日本では聞き慣れない種類もあります。

カフェの店舗数も非常に多く、ブリスベン市内でも至るところにカフェがあります。スターバックスも苦戦しているようで、日本では1,811店舗あるにも関わらず、オーストラリアでは全土で66店舗しかありません。

カフェも多いですが、家庭用コーヒーマシンを持っている人も多く、弊社



弊社コーヒーサーバー

にもなかなか優れた
エスプレッソマシン
があり、そこでカフ
ェと遜色ないコーヒ
ーを作ることができます。よく日本のカ
フェで店員さんがミ
ルクをスチームして
いる姿に感心してい
ましたが、あれを自
分で出来る日が来る

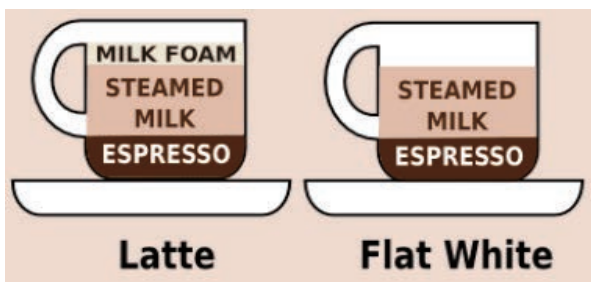


カフェポッド：フィルターに入ったコーヒー粉

とは思っていませんでした。恐らく私がブリスベンに来て一番上達したのは
ミルクのスチームだと思います。

(※1) フラットホワイト

カフェラテのよう
なコーヒーで、エス
プレッソに温かいミ
ルクを加えます。ラ
テは上にフォーム
ミルク（泡っぽいミ
ルク）を入れますが、



フラットホワイトはフォームミルクがない点が異なります。

(※2) ロングブラック

エスプレッソのお湯割りです。同じくエスプレッソのお湯割りであるアメ
リカーノは最初エスプレッソを入れてお湯を足すのですが、ロングブラッ
クは先にお湯を入れてエスプレッソを足す、という違いがあります（お湯に
エスプレッソを加える方が強い風味を感じらるようです）。同じような気もし
てしまいますが、こだわりを感じます。

● たまにステーキ

オーストラリアと聞いてすぐ思い浮かぶものの一つに、オーギービーフがあると思います。前評判通り、ステーキは非常においしいですし、比較的リーズナブルだと思います。とはいってもやはり高級品、滅多に行く機会はありませんが、今回はブリスベン3大ステーキハウスと呼ばれる有名店を簡単にご紹介させていただきます。

(1) Walter's Steakhouse and Wine Bar



オーストラリア産牛肉を使用したニューヨークスタイルのステーキハウスです。創業者がニューヨーク滞在時にステーキハウスに感銘を受けて開業したとのこと。店内はクラシック、ステーキメニューは3種類、店舗はブリスベン市内の1店舗のみです。

(2) Moo Moo The Wine Bar and Grill

ここは、Walter'sとは対照的に、メニューが豊富で、部位だけでなく、Marble Scoreと言われる、霜降り加減に応じた20種類近くのステーキメニューがあります。店内はお洒落なバーのような雰囲気、店舗はブリスベンとゴールドコーストにあります。



(3) Black Hide Steakhouse

Gambaro Group というレストラングループが経営しているステーキハウスです。牛肉はすべて100%クイーンズランド州産です。市内に2店舗あり、何とその内1店舗はカジノの中にあります。



以上、ブリスベンでの食生活をご紹介させていただきました。カンタス航空は23年10月から、ブリスベン⇄東京の直行便を週3便から1日1便に増やす（空港は羽田から成田に変更）等、ブリスベンへのアクセスは良くなってきておりますので、是非ブリスベンにお越しいただき、その際はお声がけいただければと思います。引き続きよろしく願いいたします。

双日株式会社

我が社の食料原料課 担当者のご紹介



◆久保 伸英（くぼ しんえい）

2023年4月に食料事業部食料原料課に着任しました、久保伸英と申します。97年に入社して以来、長くコーヒーの輸入を担当しておりましたが、2014年より5年間ロンドンに駐在し、地場商いを中心とするロンドン、パリ、ロッテルダムの食料部を統括し、帰国した後、食品関連の海外事業立ち上げ、また古巣のコーヒー事業を子会社の双日食料㈱へ移管する業務に携わりました。

駐在から帰国した2019年に、体重がピークに達したのをきっかけにトライ



アスロンのトレーニングを始め、18キロ減量しました。2020年からレースに出場し、2023年6月には悲願のロング・ディスタンスレース（合計200km）の完走を達成しました。トライアスロンという競技は、駐在したイギリスのビジネスエリート層の間では密かな嗜みとなっており、自己管理や計画性を表すものとして評価されています。ロンドン中心の金融街では、ロードバイクで郊外から通勤し、昼休みになるとランニングウェアに着替え、街中を走るビジネスパーソンが目につきやすく、当時は「なんでこんなことをやっているのだろう」と違和感を覚えたものです。実際に自分で始めて見ると競技そのものの魅力と、レースが開催される南方の島々や地方への旅の楽しみに、のめりこむようになりました。

学生時代は高校から7年間体育会アメフト部に所属し、入社後も社会人の下部リーグで37歳になるまで現役選手としてプレーを続けていました。

こんな好き勝手なことばかりやってきた私ですが、家族は妻と娘2人・息子1人の5人家族で、週末は半分家族のため、半分勉強のつもりで、料理や菓子作りをやっていました。自信作は今年のクリスマスに作ったビーフ・ウェリントン（牛ヒレ肉のパイ生地包み焼）と、ティラミスです。半分勉強のつもりですから、生地やクリームもすべて原材料から作りました。

こうしたこだわる性格で、新しい仕事に邁進します。皆様どうぞよろしくお願いいたします。

◆楠 誠司（くすのき せいじ）

いつもお世話になっております。双日株式会社食料原料課の楠誠司と申します。入社30年目となり、課内では最年長者となっております。1年半ほど前に同じ部ではありますが、それまで入社以来歩んでまいりました水産畑から、飼料原料を取り扱います食料事業課に異動してまいりました。まだ業界歴が短いことから、初めて経験することもございまして、お客様からも、同業界の方々からも教わることが多く、日々フレッシュな気持ちで吸収し、精



進んでいる毎日です。引き続き、よろしくお願いいたします。

入社以来、インドネシアでの活動が多かったのですが、水産物の輸入販売、海老事業会社の管理運営を担当し、国内ではまぐろ養殖事業会社で、配合飼料を利用した魚の育成に従事し、思えば酒の肴も魚介類中心の28年間でした。

飼料業界に移りましてから、お客様からおいしいホルモンのお店をご紹介いただけて、その後、自主サークル「ホルモン部」を発足いたしまして、畜産知識の向上と食肉の堪能を兼ね、月例会を開催しております。仕事環境の変化から、食生活も魚食から肉食に変わりつつありますが、皇居ランをはじめまして、健康バランスの維持にも努めております。

高校・大学では登山をしていましたが、海寄りの仕事を中心に山から遠

ざかっておりましたが、土日は都内ウォーキング、初心者用の高尾山、鋸山登りでリハビリを始めました。日本アルプス山頂で、冷たい牛乳を飲むことを目標に（綿実担当ですので）トレーニング中です。業界の皆さまと一緒に飼料の安定供給と畜産振興という山を登ってまいりたいと思いますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

◆李 博涵（り はくかん）

皆様初めまして、双日の李博涵と申します。2022年に入社以来、ベトナムにある飼料製造会社の主管業務を担当しております。2023年4月弊社内の組織変更により食料事業部食料原料課に着任し、担当業務に変わりはありませんが、国内の飼料業界とも接点を持つようになり、刺激を受ける毎日を過ごしています。

私は中国の天津に生まれ育ち、16歳の時に和歌山の高校に交換留学をし、その後横浜と東京で大学・大学院時代を過ごしておりました。大学では経済学を、大学院では国際協力学を専攻していました。聞き慣れない分野かもしれませんが、途上国が発展の過程で直面する課題を様々な学問の手法で分析する領域で、私は移民の教育についての研究を行っておりました。振り返ってみると、国際協力の道を志したのは、幼少期に中国の田舎で生活していた経験とベトナムに短期研修した経験があったからだと思います。どちらも社会インフラが目まぐるしい発展を遂げる中で、規定・ルール・社会規範等ソフト面での形成が追いつかず、その中に同一な基準がないカオス感もあり、上手いこと抜け道を探す人々の知恵と生きる強さもあると、その環境にいる時々感じておりました。裕福な人にこそ経済学だと思っていましたが、そうではない人の方がより経済合理性を追求していると感じました。そして、将来は途上国ビジネスに関わっていきたいと思い弊社に入社しましたが、幸いなことにベトナムビジネスに係るような部署に配属されました。飼料に関しては全くの素人で、日々皆様に教わりながら業務を行っておりますが、少しずつ

力をつけてこの業界に貢献していければと考えております。

休日はスポーツで体を動かしたり，シーシャ屋でシーシャと様々な人との会話を楽しんだりしています。メリハリをつけて仕事もプライベートも頑張りたいと思っています。

今後も皆様にお世話になる場面があるかと存じますので，ご指導ご鞭撻のほど，何卒よろしくお願いいたします。



わが社飼料関連部署の新人紹介



(社名、順不同)

三井物産株式会社



我那覇 大志朗 (がなは だいしろう)
食糧事業部 飼料原料室

今年度4月より、飼料原料室に配属された我那覇大志朗と申します。沖縄県出身で、幼少期より伝統芸能のエイサー、ピアノ、水泳、野球、テニス、ラグビー等様々なスポーツに挑戦してきました。沖縄では埋もれていた「我那覇」という名字も上京したことで、「我那覇＝沖縄」としてアイデンティティとなり、これからは自称沖縄県の顔として泥を塗らないよう精進してまいりたい所存です。

6歳から高校まで続けた創作エイサーでは世界一を4度受賞する等、人に感動を与えることにやりがいを感じる一方で、生徒会長や勉強、部活動でも全国大会出場を果たす等、文武に留まらず両道しておりました。学生時代は体育会ラグビー部として活動し、約140名の部員と日々切磋琢磨する中で、理不尽に打ち勝つ忍耐力、激しいトレーニングに耐える強靱な身体、決して諦めない不屈の心を身に着けました。

両親が沖縄県であぐー豚を飼育しており、飼料原料室で畜産を飼料供給から支えることができることを大変光栄に感じております。まだまだ未熟であり、ご迷惑をおかけすることもあるかと存じますが、不屈の心を持ち続け、日々着実に成長し、皆様と力を合わせ日本の飼料・畜産業界発展に寄与できるよう最大限に尽力いたします。何卒、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い

いたします。



堀内 日向歩（ほりうち ひなほ）
食糧事業部 飼料原料室

今年4月に三井物産に入社し、飼料原料室に配属になりました堀内日向歩と申します。生まれは静岡県、育ちは山梨県で、大学4年間は香川県で過ごしました。大学では社交ダンス部に所属し新型コロナウイルスの影響で大会には出られなかったものの、元プロ選手の先生にご指導いただき、憧れの選手に近づけるよう、練習に勤しんでまいりました。また高松市内にある懷石料理店と夜カフェにて接客のアルバイトを4年間行っておりました。オーナーのお2人にはとても良くしていただき、未だに定期的に連絡を取り合っており、当方にとって高松にいる第2の父・母のような存在です。

また、大学生活中に石巻の漁師さんの下でインターン、農業発信プロジェクトの立ち上げ、香川県のアスパラ農家さんとイベント企画、インドネシアの農家さんの家にホームステイ等、様々な食の供給に携わる方々と関わり、その面白さに触れてきました。これからは日本の食を支える畜産について、飼料の供給から貢献して行けること、大変光栄です。控えめな性格ですが、何事にも恐れず挑戦する性格、部活動やプロジェクト立ち上げで培った継続力や忍耐力については自信があります。皆さまのお役に立てるよう、最大限に尽力いたしますのでご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。



湖山 飛立（こやま ひたつ）
食糧事業部 飼料穀物室

今年4月より三井物産に入社し、飼料穀物室に配属となりました、湖山飛立と申します。奈良で生まれ、京都の大学に通い、今年から東京勤務と、我

が国の都と同じ歩みを送ってまいりました。中学高校では爽やかな顔をして黄色い歓声に包まれることを夢見てバスケットボール部に所属し、大学では涼しげな顔をして黄色い歓声に包まれることを夢見てストリートダンスサークルに所属しておりました。最後まで夢が現実になることはなかったわけではございますが、チームプレーの楽しさや自分自身に誠実に向き合う難しさを経験することができたと感じております。

また、大学の研究ではジェンダー史を扱っていたこともあり、食料ビジネスとは入社まで接点を持たずにおりました。入社後は一転、当室に配属をいただき、囃らずも黄色い歓声、ではなく黄色いトウモロコシを追いかける日々を送ることとなりました。今後も日々学びを深め、飼料穀物業界、ならびに世界の安定的な食料供給に貢献できるよう成長を追求してまいりますので、今後ともよろしくお願いいたします。



半田 莉子（はんだ りこ）
食糧事業部 飼料穀物室

今年4月に三井物産に入社し、飼料穀物室に配属となりました、半田莉子と申します。幼い頃から身体を動かすことが好きで、水泳、バレエ、体操などさまざまなスポーツに触れてきました。中学時代は陸上部で己との闘いに限界まで挑戦し、高校時代はテニス部で相手の思考の裏を読み解く頭脳戦に挑み、体力と忍耐力を培いました。

また、大学では食品廃棄に関する研究をしていたことから食に関する仕事をしなく、イタリアンレストラン、お惣菜屋さん、スターバックスでアルバイトしておりました。特にお惣菜屋さんのアルバイトでは食材の産地や生育環境による味の違いを意識して販売しており、飼料の産地や種類の違いを意識するこの飼料業界に通ずるものを感じております。そしてこれからは日本の食を支える畜産業界の根幹である飼料に携われること、大変光栄に存じま

す。至らぬ点が多々あるかと存じますが、部活動で鍛えられた忍耐力と努力家な性格を糧に、飼料穀物業界の発展に貢献できるよう最大限尽力いたしますので、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いします。

豊田通商株式会社



安立 岳史（あだち たけし）

穀物事業部 穀物受渡グループ

皆様、初めまして。食料・生活産業本部穀物事業部穀物受渡グループ配属となりました、安立岳史と申します。高校卒業まで静岡県浜松市で育ち、大学入学を機に上京しました。大学ではESSに所属し、英語でのスピーチ、ディベート、演劇に取り組んでいました。コロナの期間も重なり、全てが初めての経験でしたが、仲間と共に一つの課題や困難に向き合うことで、大きく成長できた4年間でした。また、趣味は、二郎系ラーメンを食べることです。全店舗制できるように、日々精進しております。

穀物という業界に足を踏み入れて2カ月経ちますが、日々お客様や社会のために業務に向き合う先輩方の姿を見て、社会におけるこの仕事の重要さとやりがいを感じています。若輩者ではありますが、何事にも謙虚な姿勢で取り組み、少しでも早く皆様のお役に立てるように一生懸命励んでまいります。何卒よろしくお願いいたします。



宇野 慎一郎（うの しんいちろう）

穀物事業部 穀物受渡グループ

皆様、初めまして。食料・生活産業本部 穀物事業部 穀物受渡グループ配属となりました、宇野慎一郎と申します。高校卒業まで兵庫県の神戸市で育

ち、サッカーに没頭してきました。大学では体育会サッカー部に所属し、約200名の部員と鎬を削る日々を過ごしてきました。

入部当初は5軍からスタートし、試合にも出場することができませんでした。粘り強さを活かし、大学3年次に1軍に昇格できたことは自信になりました。辛いことも多い部活動でしたが、苦楽を共にすることで一生の仲間ができたことが一番の収穫だったと感じています。また、趣味は海外旅行です。卒業直前にはインド・ベトナム・マレーシアに一人で旅行に行きました。新しい価値観や文化に触れることが大好きです。

変化の激しい穀物業界へ入り約2カ月が経ちますが、世の中の食の安定供給のために、チームで一体となり業務を行う先輩方の姿を通して、魅力とやりがいを感じています。至らぬ点が多々あるかと存じますが、どんな時も素直に粘り強く学ぶ姿勢を忘れず、1日でも早く皆様のお役に立てるよう精進してまいります。よろしくお願いいたします。

三菱商事株式会社



阿川 美貴（あがわ みき）

穀物飼料部 オイルシードチーム

座右の銘：努力する者は希望を語り、怠けるものは不満を語る

今年度入社いたしました、オイルシードチーム阿川美貴と申します。

大学では射撃部に所属しており、またゼミでは環境経済学を専攻してSDGsについて学んでおりました。

穀物という身近な商材を通じ社会を支えられる人間となれるよう精一杯精進してまいります。未熟な私ではございますが、皆様、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。



張 イ (ちょう い)
穀物飼料部 コーン・マイロチーム

座右の銘：負けに不思議の負けなし

この度、コーン・マイロチームに配属になりました、張イと申します。
大学時代は農地で起こる自然災害の発生メカニズムを研究しておりました。
日本の食の根幹を支えるビジネスに携われることを嬉しく思います。未熟な点も多いですが、ご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願いいたします。



山田 昌陽 (やまだ しょうよう)
穀物飼料部 飼料チーム

座右の銘：なるようにする

この度、飼料チームに配属となりました山田昌陽と申します。
大学、大学院とニワトリを実験対象とした研究活動に励んでおりました。また、課外活動ではラクロス部に所属し、院も含め6年間グラウンドを駆け回っておりました。
業務のことはまだ何も分からない状態ですが、一日も早く業界に貢献できるよう精一杯努力します。どうぞよろしくお願いいたします。

兼松株式会社



隈部 真尋 (くまべ まひろ)
穀物飼料部 ペット事業室

皆様、初めまして。穀物飼料部 ペット事業室に配属されました隈部真尋と申します。簡単に自己紹介をさせていただきます。
兵庫で生まれ、幼少期は広島、4歳までを東京、7歳までを佐賀で育ち、そ

の後再び東京に戻ってきました。このように各地を転々としている中でも、小学1年生の頃から高校3年生までの約12年間継続して打ち込んでいたのがソフトテニスでした。怪我やスランプで苦しむ時期もありましたが、たとえ雪が降る日であっても、朝7時にテニスコートに向かってしまうほど熱中していました。

大学では、体育会の男子ラクロス部に所属し、選手という立場ではなくトレーナーという選手を支える役割を選択しました。ソフトテニスの試合のように、結果が目に見えてわかる立場ではないからこそその難しさを実感する一方で、感謝されることの喜びも経験しました。また、体育会での活動を通じて、選手やチームにどうすれば貢献できるのかを自ら考え実行する力を身に付けることができました。

まだ慣れない点も多く、ご迷惑をおかけすることも多々あると思いますが、1日でも早く皆様のお役に立てるよう、持ち前の継続力を活かして業務に精進してまいります。ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。



高澤 太地（たかざわ たいち）
穀物飼料部 副原料課

本年度より兼松株式会社に入社し、魚粉担当になりました高澤太地と申します。ぜひ同業の方々に顔と名前を覚えていただきたく、簡単ですがこの場をお借りして自己紹介をさせていただきます。

大阪に生まれ、それから24年間、大阪の箕面という街で育ちました。箕面は滝とサルが有名な自然あふれる街で、幼少時代にはよくサルと遊んでいました。最近是我が家の愛犬、フクちゃんがサルによく遊んでもらっているようです。3年ほど前の話ですが、ある朝、母親がいつものようにフクちゃんの散歩に行き、私は大学に行く準備をしていました。すると散歩に行ったはずの母親がフクちゃんを抱いて全速力で家へ逃げ込み、こう言いました。「早

くカギ閉めて！サルに追っかけられてる！」。それを聞き、僕はすぐ玄関に向かい、ドアの隙間から外を見ると、なんと、クマのように大きなサルがこちらを睨んでいたのです！ 私はその眼光に恐怖を覚え、すぐに扉を閉めました。そして、その騒動を聞きつけ降りてきた妹、弟とともに、このままでは朝練に遅れる、フクちゃんが挑発したからだなどと話していました。するとその瞬間、玄関のドアが「ドン！」と大きな音を立てて揺れました。なんと、サルが玄関にタックルしてきたのです！

犬猿の仲、ですね。

そんな街で生まれ育った高澤太地です。皆様、ご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願いいたします。



佐藤 雪輝（さとう きり）

穀物飼料部 粗飼料課

皆様はじめまして。粗飼料課に配属となりました、佐藤雪輝と申します。

出身は東京で小学生のころに4年ほど中国に住んでおりました。中学からは東京に戻り、高校時代は漫才の全国大会で全国準決勝まで進出しました。ハイスクール漫才という大会に出場していたのですが、霜降り明星の粗品も同じ大会に出場していたと聞いています。

その後関西の大学に進学し、体育会のアメフト部で日本一を目指して部活漬けの日々を送っていました。スタメンではなかったのですが、超優秀な交代要員として重宝されていました。部活を始めてから体重が30キロ程増え、睡眠時無呼吸症候群になってしまったので、プライベートでの目標はとにかく痩せることです（1時間に47回呼吸が止まっていると聞いたときは驚きました）。学業面では勉強がとても好きだったので1年留年し、大学に5年間在籍しておりました。

最近は出勤前のキャッチボールにはまっていて、6時半に起きて同期とキャッチボールをしてから出勤しています。

大変忙しい業界だとは聞いておりますが、自分の強みであるポジティブさでどんなことにでも貪欲に取り組んでまいります。未熟者ではございますが、ご指導のほど、よろしくお願いいたします。



波多野 友香（はたの ともか）
穀物飼料部 粗飼料課

皆さま初めまして。本年度より入社いたしました波多野友香と申します。穀物飼料部粗飼料課に配属されました。主にヘイキューブの担当をしております。

2000年の夏に奈良県で生まれ、小中高18年間で奈良県で過ごしました。その後、大学を機に上京いたしました。小学生のときにダンスをはじめ、中高でもダンス部に所属していました。大学ではダンスから離れ、野球サークルのマネージャーをしておりました。また、商学部で経営コースに所属し、主に組織変革論について学びました。大学1，2年生のときに国際学生寮で留学生と共同生活を送っていたこともあり、グローバルに活躍する人になりたいと思い商社に入社いたしました。好きなものは音楽と旅行です。大学4年生のときに海外7カ国をまわりました。現地でコロナにかかったり飛行機を乗り過ごしたりと様々なトラブルがありましたが、それも含めてすべて良い思い出です。これからも色々な国へ行きたいです。最後になりますが、皆様のお力になれるよう日々精進してまいります。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



劉 春雪（りゅう しゅんせつ）
穀物飼料部 穀物課

皆様、初めまして。この度、穀物飼料部穀物課に配属されました劉春雪と申します。名前の由来は四字熟語「陽春白雪」からきており、春の明るい陽

光と白雪の美しさを表しています。この熟語は優れた文学や芸術作品を意味しており、親が私のことを優れた人に育ってほしいと名付けたと解釈しています。

出身地は中国の広東省深圳市で、夏が長く海辺に近い町です。大学までずっと中国に住んでいました。大学時代は金融学を専攻し、特に転換社債を中心に勉強していました。日本の音楽が好きだったことから、独学で日本語を勉強しました。日本語を学ぶうちに、日本に興味を持ち、留学を決めました。2019年に大学を卒業し、来日してからは2年間日本語学校に通い、2021年に経済学研究科に進学しました。大学院では環境経済学ゼミに所属し、環境税に関する研究を行いました。

自分の語学力を活かしながら、世界を舞台にした仕事に携わりたく、入社しました。当部署に配属され、トウモロコシのトレーディングとスケールの大きな仕事に関わることができることを非常に嬉しく思っています。まだまだ未熟ですが、ご指導とご鞭撻をいただければ幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

丸紅株式会社



高尾 祐樹（たかお ゆうき）

穀物油糧部 麦・油糧課

皆様、初めまして。この度、穀物油糧部麦・油糧課に配属となりました高尾祐樹と申します。大学時代は、体育会アメフト部に所属し、朝から晩まで部活漬けの日々を過ごしておりました。部活において毎日鬼監督に鍛えられたことを通じて培った体力と精神力を業務でも最大限生かしたいと考えております。

趣味は食べることで、特にラーメンを愛しております。私は京都出身で、京

都のラーメン激戦区として有名な一乗寺にございます「極鶏」はこれまで食べたラーメンの中で最も好きなラーメンの一つです。現在趣味が食べることだけなので、他にも新たな趣味を増やすべくいろいろなことに挑戦してみたいと思っています。

配属から2カ月が経ちますが、いまだに慣れないこと、わからないことも数多くございます。まだまだ未熟ではございますが、活躍する人材になれるよう精一杯努力してまいりますので、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

双日株式会社



大村 諒（おおむら りょう）
食料事業部 食料原料課

皆さま、初めまして。この度、食料事業部 食料原料課へ配属となりました大村諒と申します。

私は宮崎県で生まれ育ち、就職を機に上京してまいりました。大学時代は4年間、サツマイモの品種改良やその遺伝子の研究に励み、殆どは実験室および圃場で大学生活を過ごしてまいりました。今後は、日々の業務に愚直に向き合い、業界・商品についての知見を深めていく所存です。

趣味はサウナ・ゴルフ・ランニング・ラーメン二郎で、休日はリラックスの時間を設けるために通ったことのない銭湯を模索したり、体を動かしたり、全マシマシのラーメン二郎を食べたりと東京を満喫させていただいております。

至らぬ点多々あるとはございますが、粘り強さと知的好奇心を生かして1日でも早く成長し、皆様のお役に立てるよう精進してまいります。今後、ご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

伊藤忠商事株式会社



橋本 菜央（はしもと なお）
飼料・穀物部 飼料課

皆様初めまして。今年度入社し、飼料課に配属となりました、橋本菜央と申します。

私は中学からバレーボールを始め、大学でも体育会バレーボール部にて活動しておりました。コロナ禍ではあったものの、仲間とともに目標に向かって取り組んだ学生生活は大変充実しており、当たり前のことを当たり前でできる日常に改めて喜びを感じる日々でありました。友人は学生時代からオリンピックに出場するなど世界レベルで活躍しており、私自身も自分の力を世界を股にかけて発揮したいと夢見ております。

私は人々の生活に欠かせない「食」の分野に携わりたいという思いで入社いたしました。飼料という分野は未知の世界ではありますが、食の根幹を担う大変興味深い分野だと感じております。皆様のお力をお借りしながら当り前の食生活をお届けできるよう、精一杯取り組んでまいりたいと思っておりますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

米国産トウモロコシの需給と シカゴ相場動向



<山口大河氏>



<高橋千明氏>



<小林宗祐氏>



<日野翔太氏>



<高桑慶太氏>



<後藤佑理氏>



<片岡寿平氏>



<川田祐一郎氏>

出席者

(社名ABC順，敬称略)

山口 大河	伊藤忠商事(株)飼料・穀物部 飼料課
高橋 千明	兼松(株)穀物飼料部 穀物課 課長補佐
小林 宗祐	丸紅(株)穀物油糧部 穀物課
日野 翔太	三菱商事(株)穀物飼料部 コーン・マイロチーム
高桑 慶太	三井物産(株)食糧事業部 飼料穀物室
後藤 佑理	双日(株)食料事業部 食料原料課
片岡 寿平	豊田通商(株)穀物事業部 穀物トレードグループ
<司会>	
川田祐一郎	丸紅(株)穀物油糧部 穀物課

司会 丸紅の川田と申します。よろしくお願いします。

最初に1年間のトウモロコシの定期相場の総括ということで、片岡さん、お願いします。

● 6月末までのシカゴトウモロコシ定期相場展開総括

片岡 豊田通商の片岡と申します。よろしくお願いします。1年間の相場の振り返りをさせていただければと思います。

昨年の座談会が7月1日に行われましたが、直近限月7月限は¢754、9月限を見ると¢619.75という形になっていました。

過去1年間を振り返ると、最高値は9月12日につけた¢712.5、最安値は5月19日につけた¢554.5でした。

昨年7月前半は、経済停滞懸念・ウクライナからの穀物輸出合意といったところで値段を崩していったのですが、その後、7月下旬から9月にかけては、欧州の干ばつ、米国の乾燥懸念が出たり、その後、米国のクロップツアーでの単収悪化懸念などありまして、9月12日までじわじわ上げていくような相場、7ドルを超える相場まで継続して上昇していった、という感じかと思います。

その後、ロシア・ウクライナ問題の戦況であったり、FRBの金利政策の状況によって上下する場面もありましたが、中国のロックダウンによつての需要停滞が重石となり、12月頃まで弱含んだ相場になったのかなと思います。

その後、アルゼンチンで乾燥懸念が出て、また6ドルの後半くらいまで値を戻した、という感じだったかと思います。

年明けて2月後半にUSDAのアウトルック・フォーラムがあつて、23年産の米国トウモロコシの作付けが大きく増加しますよという話が出て、相場が急落する場面もありました。

3月になり、皆さんも記憶に新しいシリコンバレー銀行の破綻によって再度世界経済の停滞が不安視され相場が下落した場面もありましたが、結局はロシア・ウクライナ問題の悪化とか、期末在庫が減るなどあつて、4月中旬までは、またじりじりと値段を上げていくような状況でした。

4月中旬から5月中旬にかけては、米国の作付け状況が順調であったり、ブラジルのサフリーニャが豊作であるなどがあり、期近限月は1年間最安値の554.50まで急落しました。ただ、5月中旬以降にまたアメリカのほうで乾燥懸念が出てきて、6月中旬くらいまで6ドル後半くらいまで値段を戻した、という形だったかなと思います。

ただ、最近になり6月中旬から下旬くらいに、アメリカでも恵みの雨が降ったところで相場が急落して、6月末には9月限で523.50となりました、という感じです。

また6月末のUSDAの四半期レポート、作付け意向面積で9,400万acreという、トウモロコシの作付面積としてかなりサプライズが出ましたので、今日にかけて相場はまた急落して、7月3日の終値としては、7月限で557.25、9月限で488という形になっています。

この直近数週間の相場は、皆さん乗り越えるのが大変、予想するのが非常に難しい相場だったのかなと考えています。

司会 ありがとうございます。まさにおっしゃるとおり、最後の2週間くらいの値動き激しかったと思いますが、乾燥懸念や降雨だけでは片づけられないところがあるじゃないですか。そこはファンダメンタルズもそうですが、なぜこんな上げ下げするのかというのは、どう見ていらっしゃいましたか。

片岡 やはりファンドのポジションが大きくロングからショートに転じたところがあったと思うので、ファンドの動きが大きかったのかなと思っています。

司会 直近で一回ロングになったものがまたショートになってきた、ということですね。わかりました。ありがとうございます。

次に、米国産の需給について移っていきましょう。最初に供給の動向から、山口さん、お願いします。

●（旧穀）米国産トウモロコシ需給見通しについて

<供給動向>

山口 伊藤忠商事の山口です。よろしくお願いします。この6月から商売



座談会風景

担当となり、皆さんに比べたらまだまだ知識は劣るところがあるかもしれませんが、何かお気づきの点があれば適宜ご指摘いただければと思います。

旧穀の供給動向ですが、正直ここは皆さんの興味が一番薄いところかと思うので、手短に報告いたします。旧穀の供給面については、作付け時に、中部・北部にて降雨が続いたことで、作付面積、収穫面積ともに減少してしまったことに加えて、先ほど片岡さんからの報告にもあったように受粉期では乾燥懸念があったということで結果的に単収が減少し、旧穀の生産数量は21/22年対比大幅な減少傾向であったかと記憶しております。

それ以降は、特に毎月のWASDEの報告では大きな修正はなかったものの、2023年5月から6月のWASDEにおいて、輸入面で1,500万bu程のマイナスとなりましたが、こちらの影響は軽微かと考えております。実際に、6月は輸出数量が減少したことで、結果的に、期末在庫が微増していることがわかります。今後の旧穀の需給バランスについては、需要の変動部分に注視していきたいと考えております。米国の輸入数量の減少については、USは基本GMOの栽培がメインのため、有機やNONGの一部を輸入で賄っていると聞

いておりますが、その輸入数量が減少したのではないかと考えております。

司会 ありがとうございます。次に、旧穀の需要の動向について、高桑さん、お願いします。

<需給動向>

高桑 三井物産の高桑と申します、よろしく願いいたします。昨年度はトウモロコシ受渡を担当しておりましたが、先日よりトレーディングに携わらせていただいております。まだまだ新参者ですので、皆さまに顔を覚えていただける機会にあずかり、ありがたい思いでいっぱいです。

旧穀の需要に関し、まずは公表されている事実からお話しさせていただきます。6月WASDEで発表された旧穀の総需要は136.8億buでした。21/22クロップが149.6億buであったため、前年度対比で12.8億bu減少となります。その内訳を見ると、輸出が過半を占めており7.5億bu、飼料その他が4.5億bu、エタノールが0.8億buの減少です。

大きな背景としましては、旧穀は作付面積が前年度対比で減少となり、そもその供給量が163.3億buから151.3億buに、つまり12.0億bu減少しておりました。この供給の減少幅がそのまま需要の減少幅にスライドしているイメージです。

需要の各項目を見てゆきますと、飼料需要の減少は、過去最悪の状況と言われた鳥インフルエンザの影響が大きかったと考えられます。ただ、WASDE上の「飼料その他」の項目は、細かく各需要の数字を積み上げて計算されるというよりは、供給から主な需要を差し引いた調整弁的な数字としての側面がありますので、需要減少の要因としては輸出の数字に注目しております。

輸出がここまで減少した理由は、前述の通り、そもその供給減少によって輸出余地が縮小したこともありますが、ブラジルのトウモロコシに価格競争力が劣後していることも挙げられます。去年12月頃から、中国がブラジルのトウモロコシの輸入を開始したことで、米国の中国向けの輸出量が減少しております。

今後の旧穀動向としては、やはりポイントは輸出と見ております。他商社さんとの会話を踏まえると、今年は各社とも例年より早く積地出港ベースで6月下旬よりブラジル産の本邦向け配船が始まっており、以降はブラジル産が大勢を占めておりますので、この旧穀最後の残り2カ月程度も、米国産はブラジル産に押されている状況です。

ただし、7月と8月はブラジルの大豆の輸出シーズンであるため、斯様に例年より早く大きいトウモロコシの契約を、ブラジルがインフラ面で大豆と同時期に確実に出荷できるのか、というのは一つの不確定要素と言えるかもしれません。この出荷が滞るようなことがあれば、米国産の旧穀にも買いが入り得ると思われますので、米国需要にとってはポジティブとなります。

もう一点、エタノールに関しても補足すると、コロナ禍の終息後エタノールの生産は好調をずっと維持しております。エタノールは米国の経済全体の調子に左右されますが、有識者で意見は分かれるものの、差し当たって米国経済の急減速は想定されておきませんので、基本的にはエタノール需要は好調のまま推移するかと見ております。実績としても、6月の週次報告はすべて日産100万バレルを超えており、基本的にエタノールは底堅い需要が続いてゆくと考えております。

司会 ありがとうございます。では、後藤さん、次の6月末発表の四半期在庫についてお願いします。

< 6 月末発表の四半期在庫について >

後藤 双日の後藤と申します。よろしく申し上げます。入社して2年目で、受け渡し自体は引き継いで半年程度でまだまだ勉強不足ですので、ご指摘いただけますと嬉しいです。

私から発表させていただくのは、旧穀の四半期在庫、6月1日時点で発表された数値は4.106億buで、事前予想の4.255億buを下回る数値でした。

変動要因として先ほど高桑さんからもお話があったように、直近エタノール生産量は日量100万バレルを超える数量で安定的に推移していることが挙げ

られ、長期的なトピックとしては23～25年の米国での再生可能燃料基準が期待よりも低く設定されたことがありましたが、短期的には米国はホリデーシーズンでガソリン需要が堅調となっています。

ただ、中国の輸出キャンセルが続いていて需要数量増が見込みにくい中で、予測に反して四半期在庫が減少する結果となったのですが、同時に発表された23/24クロップの作付面積が予測値を上回ったことから、この四半期在庫の減少は、市場にとっても大きなサプライズにはなりませんでした。

司会 ありがとうございます。以上も踏まえて、最終的に22/23年の期末在庫率はどうなりそうかという見通しを、皆さんから一言ずついただければと思います。最初に、日野さんからお願いしてもいいですか。

<期末在庫見通し>

日野 三菱商事の日野です。簡単に自己紹介ですが、入社時は油糧種子チームに配属となり、その後副原料を4年ほど担当し、その後オーストラリアに3年弱駐在しておりまして、今年5月に帰国し主原料を務めることとなりました。よろしくお願いします。

旧穀の期末在庫率見通しですが、弊社はズバリ10.1%と予想しています。残り2カ月を切って概ね数字が固まっている状況ではあると思いますが、弊社予想としては、供給面においては6月のUSDAの発表から据え置き、一方で、需要については、先ほどお話があった通り、エタノール需要が堅調に推移する見込みと予想していますので、期末在庫はUSDAの発表値をやや下回ると予想しています。従いまして、期末在庫率はUSDAの発表値である10.6%をやや下回る10.1%と予想しております。以上です。

司会 ありがとうございます。次に高橋さん、お願いします。

高橋 弊社は、旧穀期末在庫レシオとしては9.92%を予想しております。6月末発表は、新穀作付面積に面喰った形で旧穀期末在庫については材料視されませんでしたが、Q3期末在庫に関しては市場予想平均を下回る数字となっており、旧穀にとっては強い材料だったとの印象を受けております。特に

飼料需要に関しては、明らかになっている輸出・エタノール需要から割り返していくと、Q3で9億9,000万buくらいの需要と推定されます。USDAの計画値から引き返すと、Q4における飼料需要は4億6,000万buが必要となり、昨年Q4対比で40%ダウン、過去9年間でQ4としては最少となります。これまでの飼料需要推移から考えるとコンサバすぎる数字であると分析しており、旧穀飼料需要に関しては54億buへ上方修正を予想しております。一方で、現在のUSDA計画値を下回って推移する輸出需要・エタノール需要が飼料需要増加分を打ち消し、供給面は現在値据え置きで10%をやや下回る結果になるだろうと予想しています。

司会 ありがとうございます。次に小林さん、お願いします。

小林 私も皆さんの予想と大きく変わらず、10.2%と若干のタイト化を予想しています。輸出需要に関しては、見方も分かれると思ってかなり難しい問題だと思いますが、直近の定期価格急落を受けて、南米ベースが大きく反発し始めており、南米産の競争力が徐々にはげ落ちているかなという印象を受けます。そのため、米国に一部輸出需要が回ってくる可能性も否定できませんが、アジア向けの成約を見ていると、期近の旧穀需要は大部分が既に埋められている状況かと思われますので、輸出需要は据え置きで予想しています。

他方で内需関係ですが、エタノール及び飼料需要は直近では好調さを維持しております。この影響を受けて、6月の期末在庫見通しが10.61%だったのに対し、需要面で修正が入る形で前回からややタイト化し、10.2%というのが今の私の見通しとなっています。

司会 ありがとうございます。続いて、片岡さん、お願いします。

片岡 私は皆さんの逆をいってしまって申し訳ないのですが、ズバリ10.8でUSDA発表よりも若干期末在庫率が増えるように考えております。輸出需要が0.75億bu減少して16.5億bu、それにより期末在庫が増加する。供給は発表値と変わらず、そんな形で計算しています。

司会 ありがとうございます。では、山口さん、お願いします。

山口 伊藤忠としても、10.2～10.3%程度を推移するのかなと考えています。皆さんと同様で、エタノール需要は堅調に推移することを考えています。

加えて輸出が減るという見方もあるのですが、こちらも中国のキャンセルが大きなファクターかと考えておりますが、サプライヤー筋の情報によれば、中国の国家備蓄上、「産地毎で最低数量」といったノルマのようなものがあるようで、中国としてはこれ以上US産を減らすことができないのではないかと考え、今後キャンセルが出てくる可能性は低いかと考えております。且つ、5月から6月で下方修正された輸出のデマンドを見ると、既にキャンセルによる減少も織り込み済と考え、エタノール以外の需要の減少はあまり考えられないのかなと考えております。エタノールについても、昨今のEV車の普及を考えると、エタノール需要が弱っていく可能性も考えておりますが、現時点での影響は限定的と考えております。よって、エタノールデマンドの増加を加味して期末在庫率はやや下方修正されると考えております。

司会 ありがとうございます。高桑さん、お願いします。

高桑 基本的な考え方は皆さんと同じですが、弊社としては12%前後で予想しております。米国の輸出需要をUSDAと比較して若干弱含んで見た結果です。

司会 ありがとうございます。最後に後藤さん、お願いします。

後藤 期末在庫率見通しは10.82%と予測しています。供給面は皆さんと同じく据え置き、需要面のエタノールを52.5億bu、輸出を17億buと小幅に下方修正されると予測しています。

エタノール生産量は、EV車の普及によりエタノール需要が弱っていく大きなトレンドを反映しています。直近を見ても、週間平均生産量は前年比マイナス2.7%ペースと落ち込んでいるところも影響が出てくるかと思います。

輸出の下方修正に関しては、直近の週間輸出検証高を見ると、直近でもUSDAまだマイナス2%ペースと遅れをとっており6月予測値の10.61%より上方修正されるのではないかと予測しています。

司会 ありがとうございます。

皆さんのお話を聞くと、兼松さんの高橋さんの予想が一番在庫が少なくなっていると思いますが、エタノールの需要増については皆さんおっしゃる中で、飼料需要も相当増えてくると見られている、ということですかね？

高橋 そうですね。

司会 なるほど。わかりました。あと高桑さんの12%は逆に在庫が増加するという予想だったと思いますが、輸出が減るとするのは、中国のキャンセルだけでなく需要そのものも減るイメージでしょうか？

高桑 弊社の予想する輸出需要の数字は、中国向け成約のキャンセルといったヒアリング情報の積み上げではなく、あくまで過去10年の成約情報と輸出実績の相関に基づく推測値となりますので、蓋を開けてみないとわかりませんが、昨年12月以降、中国向けの米国産成約が、ブラジル産に置き換わったというニュースは明らかに増えている実感があります。現在USDAが予想している輸出量は17.25億buですが、これが今後8月末まで15.5-16.5億bu程度まで下方修正されていくイメージで捉えております。

司会 ありがとうございます。

では、次に3つ目の項目、新穀の需給について移っていければと思います。先日発表された作付面積報告について、高橋さんからお願いします。

●2023/24年（新穀）米国産トウモロコシ需給見通しについて
＜6月末発表の作付面積報告について＞

高橋 新穀・米国産トウモロコシの作付面積は9,409万6,000acre、約9,410万acreと、3月末時点作付け意向面積からは200万acre強増加と発表されました。市場事前予想レンジの最高値が9,300万acreだったので、それをも100万acre上回るという結果になりました。比較的全米では作付けが早期に行われていましたが、プレーンズ北部においては積雪により作付けが遅れていましたので、そのあたりは減ってくるのではないかと見立てを建てておりましたが、結果としてはサウスダコタ州も3月末時点+30万acreと増加。その他主産地ではイリノイ州で+50万acre、アイオワ州+30万acreといずれも予想

を上回った形となり、新穀期末在庫は大幅に緩みが織り込まれる形となり、中西部乾燥懸念から過熱感があったトウモロコシは急落。5月から上伸していたところからシンメトリ的に下落したという展開になりました。一方、大豆に関しては、8,350万 acreと3月末時点発表から400万 acre減少と悲観的な数字となったことで急騰。トウモロコシ／大豆レシオは2.7倍くらいまで広がった形となりました。

司会 ありがとうございます。比価はどうですかね？ 戻りますかね？

高橋 作付けは終了しておりますから、トウモロコシ・大豆ともに豊作前提だとすれば当クroppにおいて比価は縮まらないと予想しております。ただ、現時点のテクニカル視点では、大豆は上げたがっているんだろうなという印象を受けており、トウモロコシに関しては、シンメトリ的に戻り、ここから方向感を探っていく展開を予想しておりますのでレシオが縮むとすればどちらかと言えばトウモロコシが材料になると思います。

司会 ありがとうございます。続いて、現在の作柄について、日野さん、お願いします。

<現在の生育状況・作柄について>

日野 6月中旬から7月上旬にかけて、米国において乾燥した天候が観測されたことによって、直近のシカゴ相場は急騰し、一時7月限は680程度にまで上昇しました。

そういった乾燥した天候が相俟って、USDAが発表した6月25日時点の作柄進捗報告では、グッド・エクセレント・レシオが50%となり、これは前週対比マイナス5ポイント、前年同期比マイナス17ポイントということで、特に前年同期比では大幅な作柄悪化となっていた状況です。

一方で、先ほど片岡さんからもお話がありましたが、直近1週間でまとまった降雨が観測され、これがまさに恵みの雨となり、現地の作柄は多少改善の兆しが見え始めている状況です。

7月3日にUSDAが発表した作柄進捗報告によると、グッド・エクセレン

ト・レシオは51%，前週対比1ポイントの改善となりました。

前年同期の数字は64%でしたので、前年同期比では引き続き作柄良好とは言えない状況ではありますが、今後7月上旬にかけて米国中西部で適度な降雨が予想されている中で、さらなる作柄改善も期待できるのではないかと考えています。

また、乾燥した天候の影響を受けて、単収低下の懸念がある地域は米国全体の約75%というインパクトのある数字であったところから、恵みの雨が功を奏し、直近では10～15%となっておりますので大幅に改善した状況かと考えています。こういった一連の降雨が、直近懸念されていた作柄悪化を食い止めることのみならず、作柄の改善につながるという期待感が持たれ始めている状況かと思っています。

伴って、直近7月限は550付近まで下落している状況です。今後の降雨次第では、更なる作柄の改善や単収の改善が見込まれる中で、更なる相場下落も考えられるかと見ています。

またシルキングの進捗率については、昨日発表されたUSDAの数値によると、米国全体で8%の進捗になっており、前週対比プラス4%という状況です。前年同期の数字が7%，例年平均が9%なので、現状はまずまずの進捗かといったところかと思います。

司会 ありがとうございます。先ほど高橋さんからもお話しいただいたとおり、作付面積は非常に増えていますが、一方で、アイオワ州やイリノイ州などの大規模な作付け地域でも最近では雨が全然降ってなかったじゃないですか。その辺の作柄はどう見ていらっしゃいますか。

日野 降雨量や作柄は州によってまちまちな状況にあるので、今後の降雨次第だと思いますが、7月上中旬にかけて中西部でも降雨が予報されている中で、改善していく見通しではないかと思っています。

司会 グッド&エクセレント率だと51%だと思いますが、これがもうちょっとよくなってくる、という予想ですかね？

日野 このタイミングから前年同期の数字に近いレベルにまで向かうこ

とは難しいと思いますが、ご指摘の通り、レシオは多少なりとも改善される見通しと考えております。

司会 ありがとうございます。次に単収について、高桑さん、お願いします。

<単収・生産量予想>

高桑 新穀の単収については、6月発表のWASDEにおいて181.5bu/acreという数字が発表されました。これは過去の歴史の中でも最高の単収となります。実績として、過去に180を超える単収を記録した州もありますので、当然不思議な数字ではありませんがややアグレッシブな印象です。

もちろん、この6月発表のWASDEにおいては、先物価格を乱高下させた6月のホット&ドライな状況は当然織り込まれておりませんので、7月のWASDEでは斯様な6月の天候と、その結果としての生育状況を踏まえた、どういった数字が発表されるのかは注目しております。

まだ生育の序盤で十分なデータが揃っていませんので、確定的なものではありませんが、過去のクロープコンディションと単収の関係に基づいて、弊社は今時点で新穀の単収を172～173程度で置いています。これは6月の天候・生育状況を踏まえてものになります。

とはいえ、直近の米国国立気象局による天候予想では、7月を通して概ね大きな問題は見られませんので、これよりも良い数字が最終的に達成されることは十分あり得るかと思います。

単収を占うにあたり、我々として見ているポイントを申し上げます。

1点目は、作付けが早期に終了することですが、この点は各州でほぼ遅滞なく完了しております。

2点目は、7月・8月を通じて日照時間が十分に確保されるかという点です。これについては最後まで気が抜けません。

3点目は、受粉が行われる7月末・8月頭に十分な降雨があるかという点ですが、米国国立気象局の天候予想においては、主要な生産州のうち、いくつかの州では例年対比やや降水量が多いと見られています。

最後に、受粉後の8月が暑過ぎず、なおかつ日照時間が確保されるかという点は、これも2点目と同じく今時点では予想できませんので、注視してゆきたいと思っています。

この単収の前提を置いた上で、直近の作付面積と合わせて試算すると、新穀の生産量はおおよそ148億buと予想しております。6月発表のWASDEでは152.7億buでしたので、作付面積ではポジティブな修正を加えつつも、単収を現時点で低く見ている点がこの結果に出ております。

司会 ありがとうございます。どのくらいから単収の修正が入ってきますかね？ 次の7月からなのか、もう少し見てからなのか。

高桑 この6月一時的に乾燥した天候による影響は、USDAも7月発表に織り込んで計算すると思われます。ただ、6月のホット&ドライがどこまで作物に影響しているかというのは、結局シルキングの進捗がどうかという点に影響しますので、7月がシルキングのシーズンであることを考えると、最終的にはこの6月の天候の影響というのは8月発表まで見てみないと、総括できないのかと思います。

司会 わかりました。ありがとうございます。今度は、需要サイドを山口さんからお願いします。

<需要全般について>

山口 需要サイドについては、様々な考えや側面があるかと考えており、現時点で検証するのは非常に難しいですが、当方の考えとして、まず輸出面及びエタノールの部分については、コンサバに考えてしまい恐縮ですが、6月のWASDEから据え置きと考えております。輸出の部分は、ウクライナの輸出状況が一番の大きなファクターになってくると考えており、穀物輸出合意の期限が現在7月18日までとなっているが、ロシアは相変わらず難色は示しているものの、世界の安定供給の観点から、恐らくこの先も、延長を繰り返していくものかと考えております。6月のWASDEでは、旧穀対比で新穀の輸出需要は3億7,500万buほど上目で見えており、ウクライナからの輸出が

活性化すれば、アメリカからの輸出需要は目減りする可能性はございます。ですが、一旦は据え置きとして考えております。

エタノールについては、基本的には22/23年と比べて増加はしていくのではないかと考えておりますが、先ほども申し上げました通り、EV車がどの程度普及するかによって、エタノールの需要も左右されてくると思います。ですが現段階では評価し辛い状況ということもあり、現状としては6月のWASDEの数字から据え置きで考えております。

一方で、飼料用デマンドにつきまして、下方修正されると考えております。数字としては、55億bu程度まで下方修正されるのではないかと考えております。その理由として、米国食肉輸出連合会によれば、アメリカの飼養頭数は、特に牛について、COVID19の影響や干ばつの影響を受けて、4年連続減少している状況です。加えて、今年の見通しについても、直近の干ばつ懸念を受け、前年対比4～5%減少されるのではないかと見込んでいます。今年の子牛の主要生産州における干ばつの影響によってこの数字は左右される見込みながら、飼料用デマンドはやや下方修正されると思えました。

司会 ありがとうございます。コロナも終わって、景気の回復基調が強まっているイメージがありますが、そこはどのようにお考えですか？

山口 そうですね。エタノール需要でいうと、確かに増加する材料は多いかと考えておりますが、既に今のWASDEの新穀のエタノール需要は、旧穀のエタノール需要に比べて若干上方見通しで考えており、ポストコロナの需要増は織り込んでいるのかと考えております。

司会 わかりました。ありがとうございます。最後に、期末在庫率の見通しを皆さんから一言ずついただければと思います。後藤さん、23/24年の在庫率はどのくらいで見えていらっしゃいますか。

<期末在庫率見通し>

後藤 弊社は新穀の期末在庫率は16.15%と見ています。供給サイドでは、クロップコンディションが同年時期対比で昨年の64%に対して、直近51%、手

前降雨に恵まれたところもありながらも低い状況は変わらない現状があります。ここを踏まえて、先月発表の181.5bu／acreの維持は難しいということで、178.5bu／acreと単収を下方修正しています。

作付面積は、6月1日時点の発表数値も踏まえて、8,500万acreと上方修正されると予測しています。

需要サイドでは、ブラジル産の豊作予想が米国の競争力を落とす要因となっており、直近では1億3,600万MTの生産量、5,100万MTまで輸出が見込まれるという予測が出ており、米国の輸出需要は20億bu、エタノール需要も旧穀と同様の理由で52.5億buと下方修正されるのではという見立てをしています。

司会 ありがとうございます。次に片岡さん、お願いします。

片岡 弊社としては、新穀の期末在庫率は16.3%でお願いします。作付面積は6月の発表の94.1と置いています。単収は177.5bu／acreと考えています。181.5全てがパーフェクトでないと達成できない数字でしたし、現在のコンディションを鑑みても、ある程度トレンドラインに直ったようなところで177～178程度になると考えており、177.5に置いています。

デマンドはそのままにしています。先ほど申し上げた通り、旧穀で輸出が減と考えていますので、期初在庫のキャリーインが0.75億bu増えて16.1%という形かなと思っています。

先月末からの中西部の降雨で乾燥懸念はかなり後退したと考えてり、先3カ月の天候は概ね平年並みとなっており、単収はある程度トレンドに沿ったような数字を予想しております。

司会 ありがとうございます。次に小林さん、お願いします。

小林 私はお二人と大きく変わってしまうのですが、期末在庫は12.9%程度で見えています。

需要面に関しては、現時点で何か言うには早計であり、直近の数字を据置きです。ただし、先ほども旧穀のほうで話が合ったとおり、南米産穀物の競争力の点やエタノールも直近生産量を回復してきているというところがあ

るので、ある意味では需要面はアップサイドと捉えています。つまり、先ほど申し上げた12.9%から、更にタイト化する可能性があるかと思っています。

供給側で申し上げますと、作付面積は、6月末に発表された94.1百万acreを使っている形で、生育環境の悪化で単収が173bu/acre。計算上1億4,880万buになります。これだと、先ほど高桑さんがおっしゃった172.4よりは若干いいような形ですが、米国における作柄は過去5年間と比較しても今年は圧倒的に悪い状況で、GE割合は単収が173.3bu/acreとなった昨年同期の水準で60%強、今期は51%という状況です。天候は好転していく見込みではあるものの作柄がどの程度まで改善するか、という点には懸念を抱かざるを得ない状況です。

また、過去5年間で比較すると167.5bu/acreが最低水準になりますが、目下エルニーニョ兆候が強く表れています。エルニーニョのこの時期における北米での特徴としては低温が上げられます。つまり、少なくとも高温乾燥のリスクは若干減るような形になるので、現段階で作柄を材料に167.5bu/acreといった水準まで落とすのはまだ早計。実際に、今の市場予想は、175～176bu/acreというところが話されていますが、弊員としての最終単収の予想としてはそれをやや下回り予想単収の下限となる173bu/acreという水準で出させていただいています。

司会 ありがとうございます。次に高橋さん、お願いします。

高橋 弊社は13.06%で予想しています。需要面に関しては、USDAの計画値据え置きでそのまま使っていますが、皆さんに言及いただいている通り、計画値は高過ぎる印象を受けますので、最終的には修正され在庫率の上方修正の要因になるのかなと予想しております。供給面に関しては、単収175bu/acre、作付面積は6月末発表の9,410万acreを使用しています。一点付け加えるとすると、単収に関して全米作柄はGEレート51%と過去5年で最も低い数字ながら、中西部長期予報はウェットパターンと変わったため、市場予想に近い数字で置いておりますが、ファンダメンタルズは依然として変わりやすい環境が予想されます。確かにペルー沖海面温度上昇、エルニーニョの傾

向は強く出ているのですが、インド洋の海面温度の影響で対流が停滞、ラニーニャの影響が残ると分析されています。そのため、純粋なエルニーニョなら日本も冷夏になるはずですが、今年は猛暑が予想されていますので、一つのファクターとして今後注視していかなければいけないと。現状のパターン通りであれば単収自体は175bu/acre、トレンドラインをやや下回るくらいの単収は維持されるのではないかと予想しています。

司会 ありがとうございます。次に日野さん、お願いします。

日野 弊社予想は14.3%で見えています。先ほど申し上げたように、目下ウエットな状況ではあるものの、今後の天候次第で作付面積が100万acre程度下振れることは往々にしてあるかと思しますので、作付面積は9,310万acreとやや保守的に見ており、単収については175bu/acreで見えています。従いまして、生産量自体は直近のUSDAの予想対比若干の下げで149.7億buと見えています。

需要面については、輸出において前年よりも増加する見通しかと考えている一方で、USDAの見通しまでは届かないのではないかと考えています。従いまして、期末在庫は20.5億bu、期末在庫率は14.3%と予想しております。

司会 ありがとうございます。高桑さん、お願いします。

高桑 弊社の生産の見通しは、先ほどお話しした通りですが、作付面積は先日発表の94.1百万acre、その上で単収を172~173bu/acreと置いていまして、生産量自体は約148億buと予想しております。

需要については、現時点では弊社として6月発表のWASDEと大きな相違点はなく、結果として期末在庫率は13.7%程度と見えています。

司会 ありがとうございます。

今後の単収予想が肝になってくるかと思いますが、175近辺が多そうというところで、私もトレーダー等から聞いている数字とも大体一緒かなと思っています。先ほど高桑さんがおっしゃったとおり、シルキングの進捗とかによってもぶれてくると思うので、ここは要注視というところですね。ありがとうございます。

では、4つ目の項目にいきます。他産地の動向について、小林さん、お願いします。

●他産地トウモロコシ動向について

小林 他産地動向について地域ごとにお話しします。はじめにブラジル産について。ブラジル産は、既に皆さんご存じだと思いますが、生育は極めて順調です。例えば、一時霜の懸念等も噂になったパラナ州を例に見えると作柄はGE割合が84%という環境。また、収穫はマットグロッソ州では既に33%まで進んでおり、パラナ州に関しても14%程度が進捗している状況です。進捗率という意味では、作付け自体が例年対比で2週間程度遅延していたので、収穫も同じような遅れとなっていますが、冒頭に申し上げた、当初いわれていたような霜のリスクも結局は発生せず、結果として、ブラジルの豊作はほぼ確実視される状況だと思います。

現状USDAの発表では1億2,900万トンですが、市場の期待は1億3,200万トン程度まで増加するのではないかとわれていまして、週末に発表されたマットグロッソ州でのトウモロコシの生産量見通しは収穫が進んでいる状況下で4,900万トンから5,000万トンまで、約100万トンの上方修正がされました。これを例に見ても、かなりの豊作期待が持たれる状況となっています。

アルゼンチン産に関しては、USDAの発表は3,500万トン。およそ5割程度まで収穫が進捗し、収穫は後半戦へ。ただし、収穫が進むにつれて単収悪化の可能性が再び噂されております。従い、USDAの発表の3,500万トンから、今後の収穫進捗に伴う実単収次第では3,400万トンといったもう一段の生産量減少があるのではないかというのは、ちらほらと聞かれている状況です。ただし、既に収穫も後半に入中、天候といった部分で大きな追加減産の余地があるかという、懐疑的な部分ではあると思うので、ここが変わったとしても、100万トン、200万トンレベルの下方修正に収まるのではないかな、という状況にはなります。

南アフリカ産は、今期日本にも一部入ってくる、乃至は既に入ってきてい

る状況かと思いますが、そもそも南アの収穫時期は主に4月から6月にかけてですので、今期に関しては収穫がほぼ完了。従い、旧穀で数字が動くようなことは基本的になく、輸出面でいうと、USDAの見通しとなる370万トンが輸出市場に出ることになり、一部が日本向けに、ということになります。今も輸出市場で南アフリカ産の引き合いが聞こえてくる状況かと思いますが、南アフリカは、需要地域として欧州／中東地域が近く、地理的優位性を持っていますので、基本的にはそちらに輸出されることになります。従い、今後、南アフリカ産が日本向けに大きく数量を伸ばすかという、それは考えにくいのかな、という所感ではあります。

最後に極東／ロシアですが、正直申し上げて、ウクライナ、東欧情勢は、7月18日の輸出合意がどうなるか次第にはなります。ただし、穀物に焦点を当てると、6月度USDA需給報告では生産見通しが2,200万トンから2,450万トンまで上方修正されており、市場では相応の期待感が見られます。ただし、ウクライナでの作付けは例年、5月中の2週間～1カ月程度の短期間で急激に進む形となっていますが、今年は6月上旬までかかっており、後半になればなるほど生育等への気候リスクが高まる状況を鑑みると生産見通しに対する懸念材料となっております。USDAと異なり、現地の調査会社では生産量が2,100万トン程度まで落ち込むのではないかと、といった予想を出しているところも見られており、東欧情勢及び作付け遅延の今後の影響で、極東ロシア関係は油断のならないような状況が続くかなと思っています。

各産地の状況を説明したところでまとめとすると、繰り返しになりますがブラジル産は大豊作が予想されていますので、少なくとも期近中心に輸出市場を席卷するのは、引き続きブラジル産で間違いのないと思います。ブラジル産に関しては、現段階で競争力を有しているとはいえ、大豆との輸出余力の取り合いがどうなってくるのか、といった点も今後の注目材料にはなりますが、先ほど申し上げたとおり、1億3,000万トンを超える生産規模から考えると、10－12月積みといった短期的な見通しとしては、引き続きブラジル産が輸出市場の大部分を占める環境になるかなと思っています。

司会 ありがとうございます。ブラジルは多分1億3,000万くらいが見えてくると思いますが、また砂糖等の他作物が豊作になったりすると、内陸のロジが全然回らないとかも想像できますかね？

小林 そうですね。例年、トウモロコシと比べて大豆のほうが非常に多くブラジル輸出市場に出てくるため、大豆輸出の時期は内陸物流の混乱がよく話題に上がっていました。ただし、今年はトウモロコシも大豊作となっており非常に大きな数量が輸出に回ることになりますので、川田さんが言われたとおり、砂糖等との輸送の取り合いも含めて、輸出物流は非常に懸念されるかなと思います。価格の話になってしまいますが、こういった物流混乱を加味すると、ここまでずるずると下げ相場が続いていましたが、今後のFOB価格は上昇に注意したい、というのが所感です。

司会 ありがとうございます。

では、次、5つ目の代替原料の動向について、片岡さん、お願いします。

●主原料代替原料（マイロなど）動向について

片岡 主原料代替原料の状況についてお話しします。主原料の代替原料でお話しするのは、マイロと、最近多い飼料米になります。

マイロについては、22/23クロップの世界の期末在庫率は5.7%となっています。これは21/22クロップの期末在庫率が6.0%だったので、微減という形になっています。

貿易の需給で言いますと、22/23クロップ輸出数量は世界で約700万トンでした。そのうち約3割の230万トンが米国産、約3割の220万トンがオーストラリア産、15%の100万トンがアルゼンチン産という内訳になっていました。

一方で、輸入に関しては、依然、中国が圧倒的の最大輸入国で約500万トン輸入しています。これは輸出数量として700万トンあると考えると約71%となっています。去年はもうちょっと多かったのですが、去年よりは減っているのですが、それでも依然71%のシェアという形になっています。

一方、日本はどうかというと、年間約20万トンの輸入量になっていまして、

これは世界全体の貿易数量から考えると2%くらいですので、プレゼンスが非常に低い状況になっているかと思います。

毎年のことですが、中国が1週間足らずで100万トン単位で買ったりなど「今、余っているよ」という状況であっても、急に「売る物が無い」と急騰したりするので、中国次第の商品になってしまっているのかなという印象を受けています。

日本のデマンドは、先ほど年間約20万トンと申し上げましたが、以前はマイロがトウモロコシ対比で安かったのでたくさん使われたと思いますけど、トウモロコシ対比で高い原料になってから久しく、需要は微減、微減、微減というのが年々続いていて、これが増えていくようなトレンドはなかなか期待しづらいのかなという状況です。20万トンしか輸入してない原料なので、JFTAの皆さんもどうやって手当てしようかと、非常に悩みの種のような商品になってしまっているのではないかと想像しています。

飼料米に話を移しますと、まず令和4年産の作付面積は、日本で14万ヘクタールと出ていました。これはその1年前の令和3年に比べて2.5万ヘクタール増えていて、飼料米の生産量は75万トンくらいになっていたのではないかと考えています。75万トンというのは、過去最高の生産量であったと思います。

これだけ増えたのは、主食用の市況が低迷して、生産者さんが作付けを主食用から飼料用に転換していったことが背景にあるのかなと思っています。

令和5年について、データが公表されているものがあまりなかったので推測にはなってしまうのですが、作付け意向調査によれば、「飼料用米を令和4年対比減産する」と答えているのが47都道府県中19ということです。去年、同じ時期にあった調査では、「減る」と言っているところはゼロだったようなので、去年と比べて減産するのはほぼほぼ確実なのかなと思っています。

背景としては、主食用の市況が去年対比回復していることや、大豆とか小麦とか他の転作に回っていることもあって、飼料米自体は去年よりも減っていくのではないかと今のところ考えています。具体的にどれだけ減るかとい

うのはなかなか推定しづらかったのですが、減るということはほぼ確実なんじゃないかと考えています。

司会 飼料米のメリットは、今後もどんどん薄れていく感じですかね？

片岡 そうですね。飼料米は上がって、逆にトウモロコシは下がってという状況で、価格的にもやるメリットは少なくなっていると思っています。恐らく数量も、話している限りでは1割くらい減るのではないかと、今のところ考えております。

司会 ありがとうございます。続いて、6番目のFOBの動向について、小林さん、お願いします。

●FOBプレミアム動向について

小林 他産地動向の部分でも申し上げましたが、基本的には今が底で、今後はプレミアムの動向としては強含む展開が続くかな、というのが正直なところです。基本的には、今期期近中心に市場を席卷しているブラジル産の価格がどうなるかが非常に大きなポイントになってくると思います。そのため、ブラジル産に言及すると、大豆及びトウモロコシともに大豊作。例年6月下旬ないし7月からブラジルの各港は、大豆からトウモロコシに輸出プログラムを切り替えてトウモロコシの輸出を開始しますが、今年は両穀物ともに大豊作という中で、大豆を引き続き7月以降も取り扱うような港、乃至は並行して扱うような港も増えてきていると聞いています。

その観点から、例年であればトウモロコシ一本であったものが、大豆を輸出する動きが出てくることによって、トウモロコシを輸出する余力が相対的に減り得るような環境になっている状況です。それを加味してか、サプライヤー勢が、一時的に売り意欲を見せていましたが、トウモロコシを売り急ぐような意欲も後退しているように見受けられます、逆に言えば、価格が上がるまでは貨物を留保して大豆とトウモロコシのどちらを出すか検討できるような状況です。従い、FOB価格は自然と底堅い展開が予想されると思います。また、FOB価格をサポートするもう一つの材料として、シカゴ定期が大きく

急落しているところも、FOB価格に上げ圧力を加えており、底値を支えるポイントとなっていると思います。

司会 ありがとうございます。次は、7番目の海上運賃の動向について、日野さん、お願いします。

●海上運賃動向について

日野 海上運賃の動向についてお話しさせていただきます。まず過去の振り返りから始めさせていただくと、2022年2月に勃発したロシア・ウクライナ間紛争によって、海上運賃相場は大きく高騰しました。ドライバルク全体の市況を示すBDI (Baltic Dry Index) においては、2022年1月末時点で1,418ポイントであったのに対し、紛争勃発後に急激に値を上げ、5月下旬には3,369ポイントを記録しており、紛争前の約2.4倍の数字まで上昇しました。

パナマックス船型の市況を示すBPIも同様に、同年1月末時点1,828ポイントであったものが、約1カ月間で2倍近くまで上昇した、というのが紛争前後の状況です。

その後の市況についてパナマックス船型の話をしますと、中国の石炭の国内生産量が増加したことに伴って、中国の石炭輸入量が一気に減少しました。それによって中国向け石炭の荷動きが鈍化し、市況は下落基調に転じました。

2023年に入るまでボラタイルな状況が続いたのですが、総じて海運市況はbearに推移したと言えるかと思います。

先ほど3,369ポイントまで上昇したと申し上げたBDIは、今年の2月中旬時点で550ポイント前後まで下落しました。その後、中国向けのインドネシア産の石炭の値動きが活発化したことを受けて、市況は反転し、再度上昇基調に転じました。このタイミングでの上げ幅は相当險しく、2月中旬～3月中旬の1カ月間で約3倍近くまで値を上げました。

そこから今年4月以降、また徐々に下落基調に転じている状況で、主要因としては、中国経済の成長鈍化によって中国向け貨物全体の荷動きが低下していることが挙げられます。

また直近1～2カ月については、中国向けのインドネシア炭やインド向けの豪州炭等の荷動きが徐々に回復し始めている状況ではあるものの、現在、中国国内の石炭在庫が過剰に積み上がっている状況のため、それら荷動き活発化の兆しが市況を反転させるほどの材料には至っていない状況かと考えております。

伴って、一時的に反転上昇するケースはあれど、全体的にはずるずるとbearなマーケットが続いているという印象を受けています。

今後の見通しについては、短期的にはbear、中期的にはbullなマーケットになるかと考えています。先ほど申し上げた通り、中国の石炭在庫は徐々にはけ始めている状況ですが、引き続き余剰感があるのは否めません。斯かる中で、中国向け石炭の荷動きは、短期的には鈍化傾向になる見通しかと思っています。

一方、強気な側面という意味では、直近1カ月間の中国南部の降雨量が比較的少なかったことから、中国国内で水力発電を抑制している動きがあります。これを受けて、火力発電所の稼働率が今後高まっていく可能性があるかと考えております。

また中国で6月末から7月にかけて記録的猛暑が観測されていることから、夏場の電力需要も活発化すると想定しています。

従いまして、今後夏場の電力消費のピークシーズンに突入していき石炭需要が旺盛となれば、中国向けのインドネシア炭や、今年2月頃から輸入が解禁された豪州炭等の荷動きが再び活発化していくのではないかと考えております。

また、直近ブラジル出しのトウモロコシが船積みされ始めている状況の中、世界的競争力のあるブラジル産トウモロコシの荷動きも堅調に推移しておりますので、トンマイル、つまり輸送距離×積載数量の増加が強材料の一要因になるかと考えております。

また、長期的には、昨今注目されている船舶へのCO₂排出規制も注目すべきポイントかと思っています。皆さんご存知だと思いますが、船舶が排出す

るCO₂の削減目標を設定して排出規制を行うというものであり、それに加えて、CO₂の排出実績に基づいた船舶の格付けを実施するという制度です。これに伴って、新造船対比、非効率な運航となるであろう既存船や老齢船は減速航海をせざるを得ない状況となります。本件は長期的にはマーケットの押し上げ要因の一つになり得るかと考えております。

こうした背景から、ドライバルク相場は短期的には下げトレンド、中期的・年末にかけては上昇基調に転ずると予想しています。

また、ご参考までに、コンテナのマーケットについても簡単に触れさせて頂きます。コロナが蔓延した2020年2月以降から約2年間で、コンテナ市況は約6倍近くまで上昇しました。

この背景は、ズバリ世界的なコンテナ不足にあります。米中貿易摩擦によって、米国が中国品に対する関税を導入し、それに伴って米国向け貨物の荷動きの減少懸念が生じ、それによってコンテナの生産量を抑える動きが見られました。また、コロナ禍においては、世界のコンテナの98%が製造されている中国のロックダウンによって、製造が一時的にストップしたことから、更なる供給不足懸念が生じたことで、コンテナ市況は急激に高騰いたしました。

一方、2022年以降については、コンテナの増産体制が徐々に追いつき始めており、また、世界各国のコロナ規制が緩和されていることから、コンテナ不足感が徐々に解消され始め、市況は下落トレンドに転じました。

直近も横ばいから下落基調が続いておりまして、今後は概ねコロナ前の市況レベルにまで値を戻していくことが予想されておりますので、コンテナマーケットは引き続き下落基調と考えております。

司会 ありがとうございます。では、定期価格見通しについて、これも皆さんに一言ずついただければと思います。最初に高橋さんからお願いします。

●シカゴ定期価格見通しについて（2023年9月末時点ZH予想）

高橋 弊社は、9月末時点においての12月限は440、3月限は449で下降方面にて予想しております。3月限に関しては、現時点スプレッドをそのまま乗

せた形にしています。

司会 ある程度豊作が出たから？

高橋 そうです。

司会 わかりました。ありがとうございます。次に、高桑さん、お願いします。

高桑 野心的な数字ですが、12月限が540、3月限が550と予想します。期末在庫率と先物価格の相関だけで考えれば、400台前半という値位置も違和感はないのですが、米国の近年の急激な物価上昇を考えると、農家の生産コストも軒並み上がっているため、必ずしも過去の相関をそのまま今年度に援用することは適切ではないと考えております。

両限月間のスプレッドに関しては、足元インバースになる特殊要因があるとは見ていないため、キャリアが継続し、現時点のスプレッドがやや開く形で10と置き、540、550としています。

司会 わかりました。ありがとうございます。次は山口さん、お願いします。

山口 私も兼松さんの考えと似通っておりますが、12月限が450、3月限が460と考えています。

まず、期末在庫率についてですが、GE値から考える単収増減の相関を見た時に、GE値が60%を下回った際に、その時点のWASDEの単収予想が下方修正される傾向が強いと考えております。昨日USDAが発表したクロップ・プロGRESSによれば、GE値は51%となり、この値から考えられる単収見通しは、約6～7%程の単収減が想定されると考えます。一方で先週対比1ポイントの改善となり、この先のまとまった降雨が観測される予報となっているため、さらなる作柄改善も期待できるのではないかと考えています。このことから現状のGE値がこの先改善することを見越し、単収が約2～3%減程で考えると、期末在庫率は12～13%になるかと予想いたします。期末在庫率から求めるシカゴの理論値を算出すると、450が良いところかと考えています。

12月限と3月限のスプレッドについては、新穀の近い限月ということもあ

って、インバースとなる材料は現時点見当たらず、現状の12月限と3月限のスプレッド値を参考に、10セントのキャリーとさせていただきます、12月限が450、3月限460としております。

司会 わかりました。ありがとうございます。次に後藤さん、お願いします。

後藤 12月限月が410、3月限月が420と予測しています。低く出た理由としては、期末在庫率を16.15%と高めに見ていること、ZHのスプレッドは関しては、皆さんと同様、現状のスプレッドを加味してキャリー10セントを当てはめています。

加えて高桑さんからお話があったように、米国のインフレが、直近で104.52%（4.52%の上昇）となっているところも反映させての数値としています。

司会 ありがとうございます。次に片岡さん、お願いします。

片岡 うち12月限が450で、3月限が465で考えております。私が先ほどお話しした期末在庫率から考えたら、もう少し安くてもいいかなみたいなどころはあると思いますが、高桑さんがおっしゃったように、インプットコストが高いところで、そんなに下がらないのではないかと。

中期的には下方トレンドには入っていると思いますが、一旦50日平均線くらいまで戻すことも考えて、9月末でそんなに大きく下にいくことはないのかなと思って450で置いています。

キャリーは15セントつけたのですが、まだ米国金利は高いですし、タカ派の意見も強いと思うので、キャリーはもうちょっとつくかなと思って、キリよく15セントに置いています。

司会 ありがとうございます。続いて、小林さん、お願いします。

小林 期末在庫率をどのくらいで予想するかによっても違うと思いますが、私は12~13%とみております、従い、今まで出た予想からすると若干タイトな予想となっており、12月限で530、3月限で540を見えています。

期末在庫率という観点から補足しておく、歴史的に見ると、12-13%といった水準であれば5ドル前後が参考程度に示唆されるような水準となって

いると思いますが、私はその水準からやや上に見ている理由として考慮しているポイントとしては、皆様からもあったインフレがあるのが一つ。また大豆との比価が大きく拡大しているところがあるのも一つとなります。トウモロコシ大豆の比価については6月末の発表を受けて大豆需給のタイト化に対する懸念から大豆価格が大きく上昇したことが原因となっております。基本的にはトウモロコシ／大豆の比価は2.2～2.4くらいが妥当といわれる中で、この水準に収まる前提では、大豆価格が下がらなければ12月限のトウモロコシは560あたりまでいくのが適切な水準。大豆の期末在庫率が今回の作付面積発表を受けて大きくタイト化する懸念がある状況では、大豆価格に多少の調整が入ろうともここから急落することは考え難く、トウモロコシへの上げ圧力が強いというポイントもありますので、それらを鑑みて、560は上がらないだろうけど、4ドル台はちょっと安過ぎるというところで、530、50日移動平均線あたりまでは一たん戻し得るかなと思って、このレベルになっています。

3月限に関しては、現状の12月限と3月限のキャリー幅をそのまま入れたような形です。

司会 ありがとうございます。最後に日野さん、お願いします。

日野 12月限は420、3月限は435で予想しています。直近、降雨が観測されていますように、このまま順調に生育及び収穫が進むと仮定すれば、マーケットは下落トレンドと考えております。その中で、期末在庫率は14%前後を想定しており、シカゴとの相関的に4ドルを割る可能性も十分考えられるかとは思いますが、天候リスクを多少織り込んだ上で12月限は420と見ています。

司会 ありがとうございます。

小林 今、一番上はどなたでしたか。

高桑 私ですね。

司会 そうですね。540、550ですね。

小林 一番下はどなたですか。

司会 一番下が410の後藤さんですね。

小林 ありがとうございます（笑）。

司会 ここは難しいところですね。実際ここからの新穀の生育でめちゃくちゃぶれそうですし、1日で30セント動きますしね。

小林 実際の供給面の数字を決める上では、この先1カ月の天候が非常に重要になってきますね。

司会 100セントくらい各社の予想にブレがあっても当然だと思います。ありがとうございます。

最後のウクライナのところですが、日野さんからお願いします。

●ウクライナ

日野 紛争が始まったのは2022年2月くらいですか、そのときはオーストラリアにいましたが、皆さんご存知の通り、オーストラリアは世界有数の麦の生産地です。ウクライナは、小麦の輸出市場において10～15%くらいのシェアを誇っている小麦輸出国なので、同紛争のインパクトはオーストラリアにとっても非常に大きなものでした。

当時を振り返ると、世界中が同様だったと思いますが、オーストラリアの小麦市場もいわゆるパニック状態で、世界各国から引き合いが集まり、相場は急激に高騰したという状況でした。先程申し上げた通り、最大のインパクトは小麦だと思いますが、もちろんトウモロコシにおいてもかなりの影響を与えたものでした。

22/23年産のウクライナ産トウモロコシの生産量は、もちろん前年対比でも減少しておりますし、新穀についても前年対比減少することが予想されておりますので、これが国際相場に与える影響は小さくないと思っています。

直近のニュースで、ロシアのメドベージェフ前大統領が「ウクライナとの紛争は永久に続く」といった発言をしていましたが、今後も戦争の終息が見えずに長期化するようなことがあれば、穀物業界にとり非常に不安定な情勢が続くと考えております。

加えて、ロシアによる黒海穀物回廊への妨害のニュースが話題となってい

る中、代わりに、ほとんどの穀物輸出がドナウ川沿いの港を通じて行われることが示唆されている状況ですが、ドナウ川沿いの港は鉄鉱石や銅鉄等がメインで貿易されている港が多いこともあって、港までの穀物輸送ロジや滞船の懸念等が直近の課題になっているかと考えております。

司会 18日の期限はどう思いますか。延長されないという話も結構ありますけど。

日野 個人的には延長されると思っています。延長しないことによるロシアにとってのデメリットも相応にありますので、引き続き強気な姿勢ではありますが、最終的には延長の方向かと個人的には予想しております。

司会 わかりました。ありがとうございます。では、小林さん、お願いします。

小林 ウクライナ情勢が穀物相場に与えたものについて、日野さんからお話があったと思いますが、小麦のみならずトウモロコシにも非常に大きな影響はあったのかなと思っています。

というのも、ウクライナは、輸出市場では世界で4本の指に入るようなシェアを持っている国ですので、仮にここから輸出されなくなれば、穀物の需給関係を大きく崩すところは間違いありません。そういう意味では、この情勢がどう動くかは、過去も今後も含めて非常に重要なところとなっていると思います。

目下のところカホクカダム破壊が話題になりましたが、それを受けてウクライナからの小麦輸出が最大14%減少する話もありました。しかし、これ自体は、小麦相場にはそこまで影響を与えなかったことから、ある意味ウクライナを中心としたヘッドラインに市場が疲れを見せている可能性も否定はできません。とはいえ、先ほども申し上げたとおりトウモロコシ、小麦に関してのウクライナの国際的な存在感／シェアは非常に大きなところがありますので、市場予想から大きく外れるようなサプライズが発生したときの穀物相場の暴騰・暴落には警戒をしたいかなと思っています。

司会 ありがとうございます。次に、片岡さん、お願いします。

片岡 ウクライナ問題の与えた影響としては、ウクライナ侵攻前は、たしかウクライナは結構豊作で、プロダクションが4,300万トンくらいありました。侵攻後はどんどん減っていった、23/24クロープは2,600万トンとなり、単純計算で1,500万トンくらい減っている。世界のプロダクションがどんどん増えている中で減っているのは、相場を下支えている材料だったのかな、しばらくあり続けるのかなと思っています。

ただ、ここを皆さんはどう思うかですが、実感として、最近ずっとブラジルが世界最安値になっていて、ただ、ウクライナもなんだかんだでちょろちょろ安い値段で出ているという感じで、特にMENAやアジア向けに出ている、結局なんだかんだでブラジルの値段が上がることの重石みたいにはなっていないんじゃないかというのが、個人的にトレードをしている中でも思っていたところです。

もしウクライナが全く出てきませんとなったら、ブラジルも大豊作とはいえ、アグレッシブに来ていたのではないかと感覚としては思っています。別に裏付けがあるわけではないですが、自分がシッパーならもうちょっと上げるだろうなというのは、個人的には思っていたところです。

いずれにせよ戦争は、人が戦い合っているのはよくないと思うので、本当にどういう方法でもいいから早期解決してくれないかなと思っています。

司会 メーカーさんから聞く話だと、そもそもウクライナ産は粉が多いとか不揃いだとかで、A飼料もB飼料も使いづらいと聞きますが、その点はどうか考えますか？

片岡 日本だとそうでしょうね。

司会 はい。海外とかはちょっとわからないですね。ありがとうございます。次は後藤さん、お願いします。

後藤 入社して2年目で入社した時点で2022年3月からのウクライナ侵攻は始まっており、初めて見たトウモロコシのシカゴ相場は700中盤という視点から見ると、直近の400~500のシカゴ相場は、私個人の感覚だとここ1年間で急激に下がっている、低く見えてしまう部分もあります。

ただウクライナ侵攻によっての穀物相場の動きは、プーチン大統領の発言一つや、ゼレンスキー大統領やロシア軍のSNSを通じたといった、小さな一つ一つの発言や関係性の変化で相場が乱高下するところを見ると、誰しもが情報を得られる環境だからこそ不安感といったメンタル面の影響で相場変動が起こってしまっているように思います。

ロシア産、ウクライナ産の穀物は、飢餓が問題となっている中南米にも輸出され、150～500万人もの食糧安全供給の役割を担っています。しかし、前回の継続合意が不安視された際にプーチン大統領は最終的には継続同意するだろうといった少し楽観的な視点も出てきており、市場の反応は鈍くなっているように思いました。一個人としてもメインニュースで取り上げられる機会は減り、戦争が起こっているという危機感は減ってきてしまっていると感じます。

受渡という業務で穀物のトレーディングに携わる中で、一トレーダーとしても一個人としても引き続きウクライナ侵攻の終結を願って引き続き注視し、7月18日の期限延長も期待したいと思います。

司会 ありがとうございます。続いて、山口さん、お願いします。

山口 当時、戦争が勃発した際、私はアメリカにおりまして、丁度帰国するタイミングとも重なり、リアルタイムで確りと追えておりませんでした。いざ、このように過去のことを振り返ると、一番大きな事象としては、トウモロコシの穀物価格然り、あらゆる分野において物価上昇が波及していったことが大きな影響だったと考えております。

先ほど三菱の日野さんからも説明があったように、海上運賃については戦争勃発と同時に価格が高騰したという話もありました。更には肥料価格が高騰し、金利も上昇し、農家のインプットコストが軒並み上昇し、農家の設備投資意欲がかなり後退しているという話も聞いており、ネガティブインパクトが大きかった印象があります。

一方で、今回の戦争の勃発にビジネスチャンスも隠れており、例えばウクライナから輸出ができないとなると、ウクライナ産トウモロコシをシャトル

や舩で別港へ輸送し、他の国からの輸出が盛んになることを想定し、舩等の物流ビジネスに投資をする、といった話もでていました。シリアスなシチュエーションの中でも、様々な動きがあり興味深いと感じました。

今後については、穀物輸出合意を延長する、しないの話がでておりますが、ウクライナの輸出が滞ると、世界的にもトウモロコシ並びに小麦といった主要穀物の円滑な物流が大きく停滞してしまい、ロシアの国際的な立場も危ぶまれることを考えると、延長されていくものかと考えます。

司会 ありがとうございます。高桑さん、お願いします。

高桑 大体お話は出たかと思います。去年、戦争が勃発したときは、戦況が読めない、ひいてはトウモロコシの生産・輸出の見通しが立てられないということで、市況が乱高下させられる展開が続きましたが、その後、膠着状態に入るにつれて価格は落ち着きを見せました。現実の問題として、ウクライナの生産・輸出の状況は戦前と比べるまでもなく、作付け地域におけるロシア軍の攻撃による損害はもちろんのこと、徴兵によって人手不足で作付面積が低下しているという話も聞きますし、輸出をしようにも、ロシアによってイスタンブールでのインスペクションが遅延させられるなど、ネガティブ要因は山積みですが、これはすべて今の市況に織り込まれていると見ています。

今後、例えばウクライナがロシア軍を完全に駆逐するとか、状況を根本的に一変するような事象がない限りは、一進一退の戦況が市況に対して与える影響は、それほど大きくないのかなと見ています。

黒海穀物イニシアチブをロシアが延長するか、という点は、期限が近づくたびに国際的な論点となりますが、ロシアがイニシアチブを停止することは考えづらいというのが私個人の意見です。このイニシアチブは、当初からロシア・ウクライナ二国間の取引ではなく、国連が介在することによって世界の飢餓問題にも絡めた議論が行われていることがその根拠です。これをロシアが一国の利害で停止した、と世界から見られてしまうと、名実ともにロシアの国際的孤立が確定してしまいます。それはロシアにとって得策ではなく、

現状のように、イニシアチブに対しては同意を示す一方、インспекションの妨害によりウクライナに対して婉曲的にダメージを与え続けることが、現実的なロシアの対応策かなと見ています。

司会 わかりました。定期の価格も大体合意がベースになって、今の価格くらいと思っておけばいいですかね。

高桑 そう思います。

司会 ありがとうございます。最後に高橋さん、お願いします。

高橋 皆さんとはほぼ同じで、トウモロコシ定期は戦争勃発から8ドルつけてから見ると、今は5ドル前後ですから一時から比べるとかなり落ちついたかなとの印象を受けます。正確ではないものの、黒海輸送回廊合意後1年で1,800万トンくらいはトウモロコシが輸出されたと見られておりますから何となくマーケットとしては落ち着いたかなとの印象です。但し、ウクライナトウモロコシ生産量は本来であれば4,000万トン以上が見込まれるはずが、2,300万トン前後まで減産していることから、市場の底支え材料になっていると言わざるを得ない状況です。視点を少し変えて、フローズンポトリの輸出量は、ウクライナは世界7位の位置を付けていたというというのは今年の座談会でも触れさせていただいた通りです。正確な数字が明らかになってはいませんが、減少しているのは明白。こうした食肉供給の動きもトウモロコシ産地における現地価格の押し上げ材料になっている印象を受けました。

司会 ありがとうございます。

本日の議題とは少し離れますが、Phyto cert厳格化に伴って生じる問題については、我々商社勢の懸念しているところだと思います。燻蒸用の器材を本船へ設置することで産業廃棄物が著しく増加すること、それに付随して多額の処理費用が発生すること、加えて多額の滞船料が発生する可能性は無視できませんね。また、港湾関係者の安全性と、諸々のコストを両立させていくのは非常に難しいところだと思います。

相場動向のみならず、新たなコスト増となる要因をどうやって克服するかも重要な課題だということを申し添えて、締めさせていただきます。

New Balance

< 14 >

岩崎食料・農業研究所 所長

岩崎 正典



「足早に豊作期待から高温乾燥懸念に転換した新穀の生産見通し」

5月に米国農務省が、新穀年度の穀物需給を大幅な緩和見通しと発表したことで、世界の穀物関係者を安心させたが、その後の展開では需給バランスの回復を約束するには程遠い話題が続いた。中でも、米国コーンベルトの東側にトウモロコシや大豆の生育が不安視される天気予報が示されると、シカゴの穀物市場はそれまでの大幅な先安の価格体系から大急ぎで期近限月が期先限月より割高となる逆鞘幅を縮小して、6月後半には高温乾燥予報から、作柄リスクの織り込みに発展して、春先の値位置に戻された。以下、新穀年度の供給体制が固まる、前段階の慌ただしき動きを振り返ることにしたい。

1. 米国農家が、積極的な新穀の作付意欲を見せた

米国農務省の統計資料は、トウモロコシは意向面積が市場予想を上回ったが、四半期在庫が前年比少ないことと相殺された。3月を通じて、中国によるトウモロコシ買付が逆鞘幅を拡大させることになり、6ドル台半ばの高値が維持された。大豆は意向面積も四半期在庫も市場予想を下回ったことで、15ドルの大台に戻るV字回復になり、アルゼンチンの減産が国際需給を引き締めて逆鞘幅を拡大させた。小麦は意向面積も四半期在庫も想定範囲内となり、新穀の生育に優しい天気予報が上値を抑制して、7ドルを割り込んだ。

a. 農家作付意向面積（単位は千エーカー）

	農家意向面積	事前予想	観測会議	前年実績	相違
トウモロコシ	91,996	90,880	91,500	88,579	+3,417
大豆	87,505	88,242	87,500	87,450	+55

トウモロコシの作付意向面積は、前年実績より3,417千エーカー（3.9%）多くなった。市場予想を上回り、農業観測会議の机上計算予測に近かった。前年比での増加が見込まれたのは、ノース・ダコタの850千エーカーを筆頭に、ミネソタが350千エーカー、インディアナが250千エーカー、アイオワとイリノイが200千エーカーで、減少見通しはネブラスカの100千エーカーのみであった。昨年は予定通りに播種が出来なかった北部産地の農家が、今年もトウモロコシ栽培に挑戦する意向を示した。

b. 四半期全米在庫調査（3月1日現在、単位は100万ブッシェル）

	今回	市場予想	12月1日	前年同期	前年比
トウモロコシ	7,401	7,470	10,809	7,758	▲357
大豆	1,685	1,742	3,022	1,932	▲247

トウモロコシの現物在庫は前年同期より5%弱減少した。農場在庫は4,106百万ブッシェルで前年同期より1%増、農場外在庫は前年比10%少ない3,295百万ブッシェルになった。12-2月期の消費は輸出需要の低迷で3,421百万ブッシェルになり、前年同期より12%の減退と推定された。なお、前年下期の消費実績は6,390百万ブッシェルであったので、前年並みの消費が実現すれば、今の期末在庫予測の1,342百万ブッシェルから相当な引き締めになるので、旧穀需給の引き締まりを警戒する大幅な逆轉体系の一因になった。

2. 今年の天候相場は冬の空模様で始まった

農家が播種作業を始める準備が整い、天気が許せば畑に出向く時期になったが、4月初旬は、真冬の嵐が北部産地を西から東に進み、大平原南部からデルタと中西部東側に向けて、激しい雷雨を伴う前線が通過する荒天に見舞われた。農家が大型化したプランターを畑で牽引するのに必要な穏やかな晴

天は、4月中旬以降にズレ込むことになった。復活祭休日を控えて穀物市場は、米国農務省発の強材料が消化されたことで、大豆に利益の確定売りが広まると軟弱地合が広まった。トウモロコシは、初回の播種進捗が平年並の2%と報告され、北部産地での冬の空模様が懸念されたが、需要の停滞が嫌気されて反落に転じた。

イースター休日の後も、北部産地に寒冷多雨型の天気予報が続き、大平原南部からデルタと中西部東側には、雷雨を伴う前線が通過すると予報が示された。土壌温度が十分な水準に上昇している南部産地でも、播種作業の進展が懸念された。産地情報は、地場の加工業者（トウモロコシはエタノール工場、大豆は搾油工場）が、期近の現物に超高値を払う状況を報じた。四半期在庫調査で旧穀の在庫量は前年同期を下回ったことが判明したので、これまで通りの消費が発生すると、目先の現物需給が一段と窮屈になるのは当然視され、米国農務省の需給報告は、この産地情報を確認するものになると思われた。ところが、4月度の需給報告は、トウモロコシと大豆の期末在庫見通しが据え置かれた。

ラニーニャ現象による大減産により、トウモロコシや大豆はアルゼンチンの輸出供給量が大幅に低下するので、市場参加者は今月も大幅な作柄見通しの下方修正と、輸出見通しの引き下げがあると判断していた。大半は豊作に恵まれた隣国ブラジルの供給余力の増加に吸収されとしても、幾分かは米国からの供給も増加すると期待していた。市場は、米国国内需要の鈍化傾向でひねり出された供給余力が、輸出需要の増加に繋がるという需給の改訂を予想していたが、輸出需要見通しに変更はなく、市場参加者を落胆させた。

また、南米産地の作柄見通しも、市場の事前予測を追認するものになり、印象の薄い需給報告になった。しかし、ブラジル産大豆の収穫が進捗し、出荷の最盛期を迎えたことで、輸出市場は米国産大豆への依存が低下した。それのみならず、30千トンのブラジル産大豆が、4月下旬積で米国東海岸向けに船積手配が完了したと報道された。需給報告がトウモロコシや大豆には新鮮味のない内容であったが、穀物市場では旧穀買／新穀売のスプレッド取引が

活発化して、逆轉体系が一段と強まった。トウモロコシは、中国向け追加成約や現物ベースの堅調さを追い風にして反転上昇となる一方、大豆は東海岸の搾油業者がブラジル産を輸入したとの話題が嫌気されて、トウモロコシ買／大豆売の動きを誘った。

3. 全体として微調整に終わった4月度の需給報告

a. 米国需給 期末在庫見通し（単位：100万ブッシェル）

	4 月予測	市場予想	3 月予測	前年度末
トウモロコシ	1,342	1,319	1,342	1,377
大 豆	210	198	210	274

3月の全米在庫報告は、前年実績を大きく下回っていたが、米国農務省はトウモロコシの期末在庫見通しを据え置きにした。輸入を10百万ブッシェル引き下げたが、エタノール以外の産業用途での10百万ブッシェルの需要減退と相殺された。下方修正が必至とされていた輸出需要が据え置かれたので、期末在庫見通しは1,342 百万ブッシェルで変化はなく、農家価格も660セントで据え置かれた。

b. 国際需給 生産高と期末在庫見通し（単位は、万トン）

		今月予測	前月予測	前年度	前年比
トウモロコシ	生産高	114,450	114,752	121,700	▲7,250
	期末在庫	29,535	29,646	30,691	▲1,156
大 豆	生産高	36,964	37,515	35,980	+984
	期末在庫	10,029	10,001	9,973	+56

c. 南米両国の動向（単位は、万トン）

			今月予測	前月予測	前年度	前年比
ブラジル	トウモロコシ	生産高	12,500	12,500	11,600	+900
		輸出	5,000	5,000	4,828	+172
	大 豆	生産高	15,400	15,300	13,050	+2,350
		輸出	9,270	9,270	7,906	+364

アルゼンチン	トウモロコシ	生産高	3,700	4,000	4,950	▲1,250
		輸出	2,500	2,800	3,440	▲940
	大 豆	生産高	2,700	3,300	4,390	▲1,690
		輸出	340	340	286	+54

穀物市場には、豊作の時は作柄が後追いで大きくなり、凶作の時は作柄が後追いで小さくなるというジンクスがある。今年度の南米両国は、ラニーニャ現象がブラジルの大部分で作柄に協力的に働いたが、同じ現象でもアルゼンチンに何十年振りかの大干ばつをもたらした。アルゼンチンの減産が災いして、世界の穀物需給が引き締まる感触を強めた。アルゼンチンは、既に収穫が終了した小麦が前年比43%の減産になった他、早生種の収穫がかなり進んでいるトウモロコシが前年比25%の減産見通し、そして収穫が10%強に達した大豆が前年比39%の減産見通しになった。一方、ブラジルは小麦の収穫が前年比35%の増産で終わった後、大豆の収穫完了が8割を超える段階で18%の大増産、そして全体の3／4を占める二期作トウモロコシの播種が終わった段階で、全トウモロコシの作柄は9%の増産が見込まれている。このようにラニーニャ現象の影響は、南米全域に対して均等な影響を及ぼすのではなく、気温と降雨量の実現する時期に微妙な違いが生まれる結果、天国と地獄のような作柄をもたらすことになる。輸出市場への影響は、勿論のこと大減産になったアルゼンチンからの穀物輸出の減退になるが、その全てを隣国ブラジルで埋め合わせ出来るとは限らない。トウモロコシはアルゼンチンの減産を、ブラジルが肩代わりすることは容易に見えるが、2期作トウモロコシの出荷時期は6月後半以降になり、その間は米国の供給に頼る可能性が高いと言われる。

4. ファンドの手仕舞い売りに、昨年7月以来の安値に下落

穀物市場の格言には、“Bull must be fed.”として、強気相場を保つには強材料の持続が必要とされるが、次第に動意が失われた。オプション取引の清算と現物受渡通知の開始という期近限月の持高整理が始まり、投機筋の手仕

舞い売りが広まると、買い手不在に陥ることで、定期市場の均衡が崩れて下げ足が速まった。トウモロコシは輸出需要の停滞とブラジルでの2期作トウモロコシの順調な生育が弱材料になった。大豆は、大豊作に恵まれたブラジル産大豆が大幅な安値攻勢が弱材料になった。4月末も、北部産地では冬の嵐のような天気が予報されたが、市場は5月初旬からの温暖乾燥予報をより重要視した。

4月下旬のトウモロコシは昨年7月以来の値位置に戻された。穀物市場は輸出成約や船積動向に示される、米国産穀物への需要の乏しさが、チャートの姿に映されることで、商品ファンドから手仕舞い売りが出た。その中で、当分の間ミシシッピ川の水運に、ロック&ダムの17番から上流で洪水の可能性が高まり、ハシケ運航の規制が発動された。現物輸送という観点で、シカゴ定期の下落と相反する国内要因が発生したが、輸出船積が低調な状況下では材料視されずに終わった。

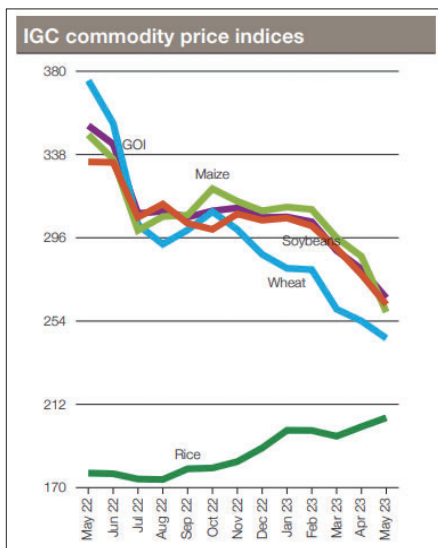
穀物相場は輸出需要の停滞が続く中、商品市場全体に広まったリスク回避の風潮が弱材料に加わって、下値余地を探る展開になった。商品ファンドの売攻勢が続いたが、ウクライナからの穀物輸出を巡る不透明感が下げ過ぎ警戒感を与えた。

外部市場の話題は、専らウクライナ戦争が新しい段階に移行するのではないかと憶測が大半を占めて、その関連でウクライナ産穀物の輸出ルートに対する不安が話題にされたが、シカゴの穀物市場に大きな影響を与える要因ではなくなった。一年前は、ロシアによる海上封鎖に伴い、ウクライナ産穀物の輸出が途絶えるリスクに、国際社会が過剰な反応を見せたが、現在はウクライナからの陸路での代替輸出が東欧諸国の猛反対に見舞われている。海路は、ロシアが合意時の約束が履行されていないとして、国連の仲介が片務的であったとの不満を募らせて先行きが不透明になったが、商品ファンドの売攻勢を押し戻す力にはなれずに、穀物市場全体が弱気に傾いた。

その背景には、米国の播種作業が順調に北上したことで、新穀に対する安堵感を強めたことが最初に指摘できる。次いで、ラニーニャ現象の下で、ブ

ラジルの大豊作とアルゼンチンの大干ばつとが共存した南米産地も、ブラジルでは大豆の収穫が概ね完了し、二期作トウモロコシも順調な初期生育が確認できたことで、アルゼンチンの凶作による影響が吸収される見通しが高くなった。もし、国際機関が一年前に懸念したような、国際市場の需給環境であれば、ここまでの価格の下落は起こらなかったように思われる。ところが、商品別指数の推移チャートは、小麦、トウモロコシ、そして大豆も右肩下がりの姿を鮮明

＝IGCの商品別価格指数＝
(AMIS 6月報告から転載)



にして、穀物の国際需給が新しい段階に移行する気配を強めた。国連を始めとする国際機関は、ロシアによるウクライナ侵攻を、国際需給の逼迫化やその長期化の枕詞に使っているが、そうした理解に相応しくない需給環境が生まれる公算の高いことを、定期市場はその独自の先見性をもって披露することになった。(参考図 IGCの商品別価格指数)

5. 弱材料で発表された米国農務省の新穀需給予測

米国農務省の新穀年度の需給予測で、トウモロコシと大豆には大増産見通しが示された。トウモロコシは弱材料の出尽くし感から反発を見せたが、大豆は新穀年度の需給緩和見通しから、新穀限月が12.50ドルの節目を大きく割り込み、需給の引き締まりが続く旧穀大豆も14ドルの節目を割り込んで終わった。需給の全体像、期末在庫と農家価格見通しは下記の通りになった。

(単位：米国需給は在庫が百万ブッシェルと価格はセント、世界の生産高・期末在庫は万トン。)

		期末在庫	農家価格	生産高	期末在庫
		米 国		世 界	
トウモロコシ	旧穀	1,417	660	115,020	29,741
	新穀	2,222	480	121,963	31,290
大 豆	旧穀	215	1,420	37,042	10,104
	新穀	335	1,210	41,059	12,250

トウモロコシ需給は、米国の増産3,900万トンに加えて、アルゼンチンで1,700万トン、そして欧州でも1,100万トンの生産回復で、世界の需給が緩和に向かうとの予測になった。需給の緩和見通しを反映して、米国の農家価格は27%の価格低下が予測された。

大豆需給は、米国で小幅な増産見通しになったが、世界はブラジルが1億6,300万トンと800万トンの増産、アルゼンチンは4,800万トンと2,100万トンの増産が見込まれて、需給は超緩和に向かうとの予測になったが、南米諸国の新穀出回りは来年からの話になる。

a. 5月度の米国農務省需給報告

米国農務省の月例予測は毎年5月から、新穀の需給予測を始めるが、春作物の播種作業がまだ終わっていない時点である。従い、面積推定は3月末の農家作付け意向面積の数字が採用されて、単収も長期の傾向値になるので、現時点でのベストの予測という扱いになる。

b. 米国の期末在庫と需給予測（単位は100万ブッシェル）

	今年度	市場予想	前月予測	新穀年度	市場予想
トウモロコシ	1,417	1,393	1,342	2,222	2,094
大 豆	215	212	210	335	293

米国農務省はトウモロコシの旧穀年度の期末在庫を75百万ブッシェル引き上げた。輸出需要を75百万ブッシェル引き下げて、1,775百万ブッシェルに下方修正したことによるもので、農家価格は660セントで据え置かれた。新穀年度の期末在庫は2,222百万ブッシェルとなった。これまで通りの手法で、作付面積は92百万エーカーと農家意向面積を適用し、収穫予想面積は91.4%の収

穫面積率を当てはめて、84.1百万エーカーになった。それに傾向値単収の181.5ブッシェル・エーカーを適用して、新穀の作柄を15,265百万ブッシェルとした。飼料用途は5,650百万ブッシェルで、前年比375百万ブッシェルの増加とした。産業用途は6,375百万ブッシェルで前年度から55百万ブッシェル増加になった（この内エタノール用途は50百万ブッシェル多い、5,300百万ブッシェルが見込まれている）。輸出需要は前年度から325百万ブッシェルの増加で2,100百万ブッシェルを見込み、それらの需要増加をもたらす農家価格は、今年度の実行見通しから180セント下落して480セントが想定された。

c. 世界の期末在庫見通し（単位は万トン）

	旧穀年度	前月予測	新穀年度	在庫変動
トウモロコシ	29,741	29,535	31,290	+1,549
大豆	10,104	10,029	12,250	+2,146

ラニーニャ現象から減産に見舞われた国々の作柄が回復する見込みになったが、反対に豪州の様にラニーニャ現象による増産があった国は、平年作に戻ると見込まれた。従い、トウモロコシは米国の増産に、欧州とアルゼンチンの作柄が回復するので期末在庫は回復、大豆もブラジルの増産が維持される上に、アルゼンチンの生産回復が見込まれて大幅な在庫積み増しが想定されている。世界の国々で新穀年度の供給体制が固まるのは、随分と先のことになる。

6. 中国の契約取り消しが弱材料になった5月中旬のトウモロコシ

5月中旬は、輸出需要の低迷や黒海の輸出回廊の延長合意が、市場心理を弱気にさせた。更に、播種作業の終了と初期生育に問題の少ない天気予報が示されると、天候リスクを織り込む必要なしと判断されて、商品ファンドの買持が手仕舞われた結果、トウモロコシは5ドル半ば、旧穀大豆が13ドルと、それぞれの節目に下押された。

中西部で新穀の播種が順調に進捗したことで、米国農務省の予測通りに新穀年度の需給が改善されるとの感触が、商品ファンドの売攻勢を促した。初

期生育が順調に進んでいることが毎週の作況評価で確認されるようになり、7月になってトウモロコシの受粉に支障のない適温適雨の天気になれば、中西部の農家が新穀の収容スペース確保の為に、旧穀の処分売りを始めるというのがこれまでの、典型的な季節性であった。

トウモロコシは週間作況作柄進捗報告で、5月14日時点の播種が65%の完了と、平年を大幅に上回る順調な進展が安堵感を広める中で、中国が前週に続いて272千トンのトウモロコシの既契約を取り消したことが弱材料になった。これで4月下旬以降、合計1,104千トンの契約解除が行われたことになり、残り2,131.6千トンの契約履行が懸念されるようになった。更に合意期限の5月18日の直前に、ロシアが黒海からの穀物輸出回廊に関して60日間の延長に合意したことが、トウモロコシに追加の圧迫材料になった。好天の下で、新穀の播種が捗る中で、需要の不振からトウモロコシの新穀限月は5ドルの節目が試され、旧穀トウモロコシ（7月限）は550セントの節目にと下押される展開になった。

7. トウモロコシはメモリアルデー休日前にV字回復

メモリアルデーの三連休を控えて、旧穀トウモロコシが約50セントの反騰を見せ、6ドルの節目にV字型回復を見せた。外部市場で株式や原油が反発を見せると、穀物市場は6月初旬の高温乾燥予報が、夏の到来を印象付けてトウモロコシに天候リスクの織り込みを促した。大豆は輸出需要の停滞、小麦は冬小麦の収穫の開始が反発の勢いを弱めた。

週明けの新しい天気予報が、中西部に平年を上回る気温と、大平原で通り雨が定着する予報になったので、メモリアルデー休日までに春の農作業を終らせ、新穀の生育に好都合な天気と判断された。昨年とは異なり、農家が作物保険の期間内に播種を済ませる可能性が高くなった。昨年はメモリアルデーの頃に、ノース・ダコタやミネソタを中心に、全米でトウモロコシが13%、大豆が34%、そして春小麦は27%が播種未了状態になり、播種を断念する事態が起こった。米国農務省の統計では、農家意向面積と最終作付面積との相

違が、トウモロコシで0.9百万エーカー、大豆は3.5百万エーカー、小麦は1.7百万エーカーの減少になったので、大部分が播種の遅れによる減退と推察されたが、今年はそうした不安感なしに、メモリアルデー休日を迎えることになった。

市場参加者の関心は、過去にエルニーニョ現象が出現した時のパターンである、大平原の降雨とその対極に位置するミシシッピ川東側で、高温少雨の傾向が強まるのではないかと懸念であり、5月からの天候は、確実にその傾向を強めたと指摘され始めた。昨年は北部産地の播種作業が遅れて、作物保険で単収リスクが100%カバーされない事態になったが、今年はトウモロコシの播種は概ね完了し、大豆も80%台の完了と見込まれるので、天候リスクの織り込みは最小限で済むと思われていた。ところが、トウモロコシの7月限は、50セント近い急進で6ドルの大口を回復して、需給報告以前の値位置に戻された。天候相場の期間はエルニーニョ現象などの悪天候の可能性を懸念して、農家は勿論のこと市場が売り手不在になり易いことが早くも実証された。そして、連休明けに発表された初回のトウモロコシの作況評価は、優と良好の割合が69%に止まり、前年同期の73%よりも4%低い評価になった。米国農務省の単収見通しは、長期傾向値である181.5ブッシェルとなって、昨年実績の173.3ブッシェルより5%近い改善を見込んでいるが、播種作業の早かったことが高単収に結び付くとは限らないのではないかという警戒感が広まった。新穀トウモロコシの作柄に安心感を持てるのは、これまで通りに7月の受粉期の乗り切りを確認してからになった感触が強まった。

国際需給に関する話題は、ブラジルの2期作トウモロコシの生育が順調に推移して、過去最高の作柄が実現するとの産地情報と、シカゴ定期の軟調推移にもかかわらず、ブラジルでは大豆を含めて農家販売の増加による現物ベースの低下が報告された。その一方、ウクライナからは依然として、戦争による作柄見通しの悪化と、ロシアによる輸送回廊への揺さぶりの報告が続いた。また、今後の注意が必要な話題として、中国の小麦産地である河南省の降雨過多による品質劣化が報じられ、飼料用小麦の大量発生で、飼料用小

麦の供給量増加が必至と推察された。被害の程度によっては、トウモロコシの輸入減少と、製粉用小麦の輸入増加の形になって、国際需給に影響する可能性が浮上した。

8. 6月を迎え天候懸念から、押し目買いが広まる

ブラジルからの供給圧力と新穀の豊作見通しから、輸出需要の低迷が続く中、6月が到来した高温乾燥型の天気予報に穀物市場が感応度を強めた。原油相場の上昇がきっかけとなって、大豆製品が先導する大豆3品の反騰で始まり、トウモロコシへも押し目買いが波及した。コーンベルトで6月前半は乾燥気候が継続するが、気温は比較的穏やかに推移し、6月後半には寒気が南下するので、降水確率が高まると予報された。5月末時点での干ばつモニターは、大平原南部からコーンベルトに向けて干ばつ地域が拡大して、トウモロコシ産地の34%、大豆産地の28%が干ばつの影響下に置かれて、前回からそれぞれ8%の拡大になった。6月を通じて、コーンベルトの中央から東部にかけて、干ばつ状況が拡大する可能性が高いと予測されて、市場参加者に天候リスクの織り込みを促した。

9. 需給の緩和傾向を確認した6月の需給報告

市場参加者の多くはコーンベルト中央部から東部へと拡大傾向を見せる乾燥気候を心配していたが、週明け月曜日の引け後に発表された週間作況作柄進捗報告で、その懸念が正しかったことが確認された。トウモロコシの作況評価は前週比5%の悪化で、優と良好の割合が64%と、前年同期から9%も低くなったが、作況の悪化は既に織り込み済みであったらしく、週を通じては4.75セントの反落で終わった。今週から新穀の作況評価が始まった大豆は、優と良好の割合が62%と報告され、トウモロコシ同様に、コーンベルト中央から東部の作況評価の低さが示された。大平原諸州に降雨が観測される一方で、東側に定着しつつある高温少雨の傾向が、遂には河川の水位の低下になって顕れ、ハシケ運行への制約が懸念される様になった。こうしたガルフの

輸出市場に向けて、現物輸送が必要なトウモロコシや大豆は、ヘッジとしての旧穀買いを外すことが出来ず、大幅な逆鞘の価格体系がトウモロコシは6セント拡大して、73.75セントの先安、大豆は13.50セントの拡大で182.25セントの先安となった。そうした状況の下で、インデックスファンドによる期近限月の買持高の先送りが始まった。7月限の持高が手仕舞いされ、期先に買持が移し替えられることが一般的で、常識的にはベア・スプレッドの形で、期近限月に売圧力が強まるが、大豆の7月限は週を通じて34セントの続伸を見せているので、旧穀の現物需給が想定以上に窮屈な状況と理解された。

こうした、市場参加者がごく最近に見聞したことの要約版のようにして、米国農務省から6月度の需給報告が発表された。発表当日に大豆が急伸を見せたが、可食油の高騰が主な原因であり、大豆需給の問題ではなかった。

トウモロコシや大豆の旧穀需給は、輸出需要が小幅に下方修正され、期末在庫が増加する見通しに修正された。その結果、新穀年度の供給量が小幅に増加することで、米国需給に若干の余裕が生まれた。世界の生産高も新穀年度は程度の差はあるが、揃って増産が確実視され、その結果、世界の期末在庫も久しぶりに積み増しが期待できるようになった。需給の方向性は、南米比率の高い大豆は横ばいで終わったが、北半球の比率の高い小麦とトウモロコシは、今月の見直しにより5月度に示された基調がより鮮明に確認された。旧穀年度の米国産品への需要減速（大半は輸出需要）による需給の緩和は、まずは次年度への繰越在庫の増加に波及する。そして世界の新穀生産が順調に推移すれば、おそらく現在の見込みよりも輸出需要が減速し、米国需給の緩和が期待できるという推測になるのだが、市場の反応はそうではなかった。

10. 需給の緩和見通しを再確認した6月度の需給報告

6月度の需給報告は、いわゆる谷間の月例報告なので、事前予想も最近の低調な動向から輸出需要の下方修正を通じて、旧穀の期末在庫の引き上げによる需給の改善を想定していた。従って、発表当日であった金曜日の取引は、トウモロコシは6セントの下落、週を通じては4.75セントの下げとなった。値

動き幅も比較的狭く、米国農務省の需給見通しの改訂も、このところの値動き圏からどちらか一方に抜け出す材料を提供できなかった。その中、旧穀大豆は週を通じて34セントの上昇となり、5月半ば以来の高値引けとなった。大豆油は2.09セント上昇で54.59セントであったので、大豆ミールではなく可食油からの支援であった。6月度の需給報告は、市場の事前予想通りに米国需給の小幅な改善が示され、国際需給は5月度に示された新穀の生産動向に顕著な変化が見られず、新穀年度に向かってトウモロコシや大豆は大幅な先安の価格体系が維持されると判断された。

a. 米国の期末在庫と需給予測（単位は100万ブッシェル）

	旧穀年度	市場予想	前月予測	新穀年度	市場予想	前月予測
トウモロコシ	1,452	1,449	1,417	2,257	2,254	2,222
大豆	230	223	215	350	345	335

トウモロコシ：米国農務省は、旧穀年度の期末在庫を35百万ブッシェル引き上げて、1,452百万ブッシェルに改訂した。（市場予想よりも3百万ブッシェル多かった。）米国農務省は輸入見通しを15百万ブッシェル引き下げて25百万ブッシェルに下方修正した。一方、輸出見通しを50百万ブッシェル引き下げて、1,725百万ブッシェルに下方修正したことで、差し引き35百万ブッシェルの期末在庫見通しの増加になった。懸念された飼料用途、エタノール用途は据え置きとなった。期末在庫の上向き改訂にもかかわらず、農家価格見通しは660セントで据え置かれた。

新穀年度は、前年度からの繰越在庫が35百万ブッシェル増え、市場予想よりも3百万ブッシェル多くなった。それ以外に何も変更されたところがなかったので、期末在庫も35百万ブッシェル増加して、2,254百万ブッシェルに引き上げられた。農家価格見通しの480セントも据え置かれた。作況評価は初回から2週連続して、181.5ブッシェルの長期傾向値単収の達成に疑問符の付く低評価になった。米国農務省は何時までこの単収予測を続けるのか、8月の実地調査に基づく単収予測に切り替える時まで引っ張ることになると、向こう2カ月間の市場は独自の数字を織り込む必要に迫られるので、今後の天候推移

が重要になって来た。

b. 世界の期末在庫（単位は万トン）

	旧穀年度	前月予測	新穀年度	前月予測	在庫変動
トウモロコシ	29,755	29,741	31,398	31,290	+1,643
大豆	10,132	10,004	12,334	12,250	+2,202

トウモロコシや大豆は、旧穀の需給に関してはブラジルの作柄の上向き改定は、アルゼンチンの作柄の下方修正で相殺されて、大勢に変化はなかった。新穀年度に関しては、まだ机上計算による予測の域を出ないが、在庫の大幅改善が見込まれている。

c. トウモロコシの世界の生産高と需給予測は下記の通りになった。

（単位は万トン）

	生産高	消費	貿易（輸出）	期末在庫	前年比
2021／22年度	121,731	120,207	20,618	30,815	+1,530
22／23年度 6 月	115,073	116,306	17,657	29,755	▲1,060
23／24年度 5 月	121,963	120,414	19,526	31,290	+1,535
23／24年度 6 月	122,277	120,635	19,776	31,398	+1,643
前月からの変化	+314	+221	+250	+108	+108

旧穀年度は、米国産の作柄が思わしくなかったところに、ウクライナ戦争による供給不安と、ラニーニャ現象による世界各地の作柄の悪化と重なったことで、国際需給の先行きが大きく懸念されたが、新穀年度は米国の作柄に回復が期待できる上に、昨年在減産に見舞われた国でも平年作に戻る可能性が高くなり、需給は緩和が見込まれている。これを具体的な生産国単位に並べ変えると次のようになる。

主要産地の生産高推定と予測（単位は万トン）

		2022年産	2023年産予測	前月予測	前年対比
中国	小麦	13,772	14,000	14,000	+228
	トウモロコシ	27,720	28,000	28,000	+280
インド	小麦	10,400	11,350	11,000	+950

欧 州	小 麦	13,434	14,050	13,900	+ 616
	大 麦	5,179	5,285	5,260	+ 106
	トウモロコシ	5,297	6,430	6,430	+ 1,133
ロシア	小 麦	9,200	8,500	8,150	▲700
	大 麦	2,150	1,960	1,950	▲190
ウクライナ	小 麦	2,090	1,750	1,650	▲340
	トウモロコシ	2,700	2,450	2,200	▲250
カナダ	小 麦	3,382	3,700	3,700	+ 318
	大 麦	999	980	980	▲19
豪 州	小 麦	3,900	2,900	2,900	▲1,000
	大 麦	1,410	1,000	1,000	▲410
アルゼンチン	小 麦	1,255	1,950	1,950	+ 695
	大 豆	2,500	4,800	4,800	+ 2,300
	トウモロコシ	3,500	5,400	5,400	+ 1,900
ブラジル	小 麦	1,060	1,000	1,000	▲60
	大 豆	15,600	16,300	16,300	+ 700
	トウモロコシ	13,200	12,900	12,900	▲300
米 国	小 麦	4,490	4,532	4,532	+ 42
	トウモロコシ	34,875	38,775	38,775	+ 3,900
	大 豆	11,638	12,274	12,274	+ 637

11. 俄かに浮上した天候不安に、穀物相場が急騰

トウモロコシや大豆の旧穀の需給見通しが小緩むことが再確認されたが、市場の関心は次第に生育期の天候と作況評価に移った。トウモロコシと大豆の作況評価は次第に悪化が進んだ。穀物市場は新しい国民の休日になった“Juneteenth”（奴隷解放記念日）の週末を前にして、今後の天気が高温少雨型と予報されると、商品ファンドが売持高の解消に動いた。売り手不在の中でストップ買いが誘発されて、旧穀トウモロコシは640セント、旧穀大豆は1,466セントと4月中旬の値位置に戻され、新穀トウモロコシは600セント目前に、新穀大豆は1,3142セントと春先以来の高値へ急伸した。又、冬小麦の収穫作業が進む中、シカゴ定期は4月中旬以来の700セントが視野に入る水準に

連れ高となった。輸出需要の停滞が続く中、この思い掛けない高値に農家からの旧穀処分売りと同時に、新穀のヘッジ売りの活発化が産地から報告されたことから、新しい天気予報次第では騰勢が鎮まると思われた。

米国農務省が、トウモロコシの週間作況評価を開始した、5月30日（5月28日時点）以来、毎月曜の引け後に発表される週間作況作柄進捗報告で、初回の報告から連続して作況評価が下方修正されると、トウモロコシや大豆の作柄懸念が、現実味を増すことになって来た。週末の降雨は散発的なものとなり、恵みの雨が観測された所がある一方、多くの場所で乾燥状態が続いて、水分の補給が切望される様になった。6月のFOMCでは政策金利が据え置かれたが、年末に向かって0.5%の利上げを示唆したことで、先行き景気の悪化を印象付けた。その直後に、外為市場がユーロの利上げをきっかけに米国ドルが急落すると同時に、天気予報が夏場の高温乾燥を示唆すると、穀物市場では商品ファンドが一斉に売持の買い戻しに動いた。生憎、新穀限月には売り手が乏しく、逆転幅の急速な縮小を伴う急転上昇となった。株式市場が金利の低下と5月の小売売上高を好感して大幅上昇となったことや、原油相場の上昇が市場心理を改善させて、穀物市場ではコーンベルト東側のイリノイを中心に今年夏場に干ばつ状況を強めるとの予報が、トウモロコシ定期に天候プレミアムの織り込みを促した。

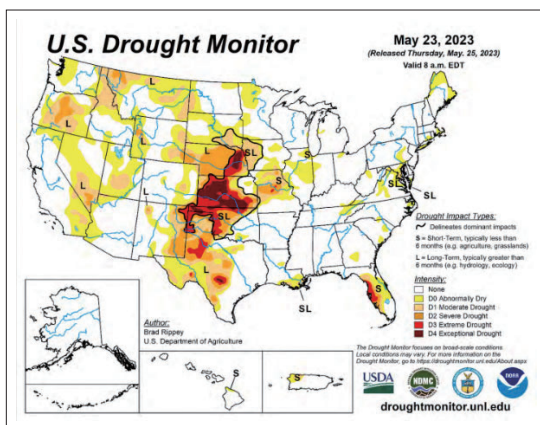
そして週明けの6月20日発表された、週間輸出検証高報告（6月15日現在）では、トウモロコシの船積は、過去10週間続いた100万トン台を割り込みこんで87.7万トンに後退し、大豆や小麦も低調な数字であった。国際市場に潤沢な供給が確保されている印象を強めたが、引け後に発表された6月18日時点の作況評価は、今回も前週から大幅な悪化が報告された。トウモロコシの優と良好の割合は前週から6%低下して55%、前年同期を15%下回り、この時期の評価としては1988年以降での最低になった。大豆も前週から5%の低下で54%と前年同期を14%下回り、2013年以降の最低になった他、春小麦の評価も前週から9%の低下で51%と前年同期を8%下回った。メモリアルデー休日の今年の天候に対する楽観論が急速に変化して、7月からのトウモロ

コシの受粉期，その後の大豆の開花・着鞘期に向かって，作柄の警戒感を強めることになった。干ばつモニターでは，この一月間にコーンベルト中央部と東部に干ばつ傾向が拡大したことが示された他，9月末に向かってこの地域で干ばつが長期化するとの予測が示されたことで，商品ファンドが取組指針の修正に動いたと推察される。今年も油断大敵の季節を迎えている。

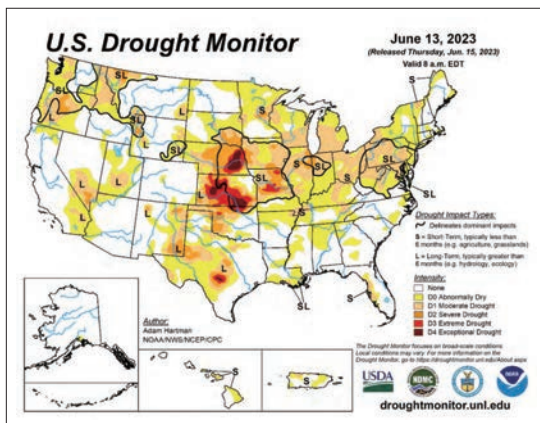
(2023年6月23日記)

<参考>

＝メモリアルデー前の干ばつモニター＝



＝直近の干ばつモニター（6月13日）＝



USDA需給報告（US産トウモロコシ）

	22／23年度			23／24年度			
報告月次	4 月	5 月	6 月	5 月	6 月	前年比	前月比
作付面積	88.6	88.6	88.6	92.0	92.0	3.4	0.0
収穫面積	79.2	79.2	79.2	84.1	84.1	4.9	0.0
単収	173.3	173.3	173.3	181.5	181.5	8.2	0.0
生産高	13,730	13,730	13,730	15,265	15,265	1,535	0
期首在庫	1,377	1,377	1,377	1,417	1,452	75	35
輸入	40	40	25	25	25	0	0
総供給量	15,147	15,147	15,132	16,707	16,742	1,610	35
飼料用途	5,275	5,275	5,275	5,650	5,650	375	0
産業用途	6,680	6,680	6,680	6,735	6,735	55	0
エタノール	5,250	5,250	5,250	5,300	5,300	50	0
国内消費	11,955	11,955	11,955	12,385	12,385	430	0
輸出需要	1,850	1,775	1,725	2,100	2,100	375	0
総需要量	13,805	13,730	13,680	14,485	14,485	805	0
期末在庫	1,342	1,417	1,452	2,222	2,257	805	35
在庫率(%)	9.7	10.3	10.6	15.3	15.6	5.0	0.3
農家価格	6.60	6.60	6.60	4.80	4.80	▲ 1.80	0.00

注：面積は100万エーカー，単収はブッシェル・エーカー，生産・消費は100万ブッシェル。

世界のトウモロコシ需給バランス

23／24年度

国名	期首在庫	生産高	輸入	飼料	内需	輸出	期末在庫
世界 5 月予測	29,741	121,963	18,450	75,863	120,414	19,526	31,290
世界 6 月予測	29,755	122,277	18,700	76,079	120,635	19,776	31,398
中国	20,532	28,000	2,300	22,300	30,400	2	20,430
除 中国	9,224	94,277	16,400	53,779	90,235	19,774	10,968
米国	3,687	38,775	64	14,352	31,459	5,334	5,732
除 米国	26,068	83,502	18,637	61,727	89,075	14,442	25,665
メキシコ	266	2,740	1,800	2,730	4,570	30	206
アルゼンチン	151	5,400	1	930	1,350	4,050	151
ブラジル	797	12,900	120	6,250	7,650	5,500	667

欧州	708	6,430	2,250	6,050	8,150	500	738
ウクライナ	139	2,450	0	450	550	1,900	139
ロシア	91	1,630	5	1,080	1,190	420	116
南アフリカ	141	1,680	0	730	1,330	340	151
東南アジア	304	3,126	1,845	4,070	4,900	61	314
韓国	190	9	1,180	950	1,185	0	194
日本	140	1	1,550	1,200	1,550	0	142

単位は10,000トン。

世界の大豆需給バランス

23／24年度

国名	期首在庫	生産高	輸入	搾油	内需	輸出	期末在庫
世界 5 月予測	10,104	41,059	16,977	33,231	38,649	17,241	12,250
世界 6 月予測	10,132	41,070	16,982	33,191	38,609	17,241	12,334
中国	3,580	2,050	10,000	9,500	11,800	10	3,820
除 中国	6,553	39,020	6,982	23,691	26,809	17,231	8,515
米国	627	12,274	54	6,287	6,629	5,375	952
除 米国	9,505	28,796	16,928	26,905	31,981	11,866	11,383
メキシコ	33	24	655	660	666	0	46
アルゼンチン	1,755	4,800	570	3,600	4,270	460	2,395
ブラジル	3,335	16,300	45	5,575	5,970	9,650	4,080
パラグアイ	16	1,000	2	350	365	590	63
欧州	161	322	1,400	1,515	1,674	30	178

単位は10,000トン。

編 集 後 記



あるラジオ番組で、工業原料となる穀物加工品をエサにした付加価値の高い鶏卵の紹介があった。その話自体はなかなか興味深い内容であった。番組の最後で、昨今の相場高騰の話になり、「値上がりを防ぐために国産の原料を多く使いましょう」で終わった。今さら、この手のコメントに驚くこともないが、社会的責任の大きい放送局の番組で、こういう短絡的なコメントはいかがなものかと思う。

本欄では、コストアップが正当に価格転嫁される仕組みが必要であると訴えてきた。もちろん、生産性の改善によりコストアップが吸収されることもあるが、強い立場の者が弱い立場の者にしわ寄せする形でコストアップが吸収される仕組みはいただけない。これは賃金でも同じことである。

このところ、大手企業が春闘の要求を受け入れる等の話がニュースになっているが、「消費者物価の上昇＝生活のコストアップ」と考えれば、コストアップの正当な価格転嫁を訴える企業が人件費をきちんと上昇させないとしたら、それは究極の矛盾である。トラックドライバーの労働問題も本質的には全く同じで、人の軽視、弱いところへのしわ寄せに過ぎない。

世の中を変革していくには、誰かが最初の一步を踏まなければならない。そこには生みの苦しみが伴う。そこで生まれるからこそ尊いのであるが、苦しみを嫌い、失敗を必要以上に恐れ、自分がチャレンジしないにもかかわらず他人の失敗は厳しく非難する風潮を最近は強く感じる。これこそ日本が停滞している原因だと言ったら言い過ぎであろうか？

今号では、6月19日に実施された海上運賃に関するセミナーが掲載されている。実際に会場で拝聴したが、非常に興味深い内容であった。この手の話は、需給関係の話題が中心になる。今回もそうであったが、一方で「需給関係は相場を構成する要素ではあるが、相場は需給関係だけでは構成されない。」という話が印象深かった。若い頃、相場について造詣が深いと言われた先輩に聞いた話と全く同じで、初心を思い出させていただいたようである。

